方正友好交流の会　会報 30 号　2020 年 6 月刊

星火方正

～燎原の火は方正から～

開館満７周年を迎えて～「コロナ禍」の中で～　寺沢　秀文
「日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後」シンポジウム報告　三沢　亜紀
「満洲国」のエスペランティストたち～「王道楽土」の一断面～　石川　尚志
引揚者となる人たちと歌―そのとき歌い、そのとき聴いた　藤川　琢磨
この空は、チベットに続く　渡辺　一枝

松花江の旧満鉄鉄橋脇に旧日本軍トーチカ跡（蓮江口駅側と佳木斯駅側）が今でも二つある。写真は黒竜江省の佳木斯（ジャムス、旧満洲にいた日本人たちはチャムスと呼んでいた）対岸の蓮花口にあるもの。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第 30 号　2020 年 6 月刊）　～燎原の火は方正から～

目　次

開館満７周年を迎えて～「コロナ禍」の中で～　寺沢　秀文　1

「日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後」
シンポジウム報告　三沢　亜紀　11

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「満洲国」のエスペランティストたち　～「王道楽土」の一断面～　石川　尚志　16

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

引揚者となる人たちと歌―そのとき歌い、そのとき聴いた　藤川　琢磨　22

「方正日本人公墓と満蒙開拓団そして
日中戦争を勉強する資料」の作成にあたって　岡邑　洋介　32

満洲で育った私、夢は方正訪問だ　―ぜひ、中国人と対局したい！―　長尾 寿　36

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

水葬　柳生　じゅん子　41

本は広げないと燃えない　〃　43

この空は、チベットに続く	渡辺　一枝	45
新疆ウイグル自治区での国際協力ご紹介	小島　康誉	54

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

武吉次朗氏を偲ぶ	凌　星光	59
武吉次朗さんと方正友好交流の会	大類　善啓	60

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「満蒙開拓平和通信」4 号発行さる	発行者　末広一郎	61
ちばてつや　幼年期を過ごした中国は僕のふるさと	「日本と中国」	62
中国残留婦人 貴重な語り　藤沼敏子さん証言集出版	東京新聞	64
旧満洲の戦争孤児描いた人生	東京新聞	65
東京大空襲 75 年 ずさん「防空実験」の実相	東京新聞	66
満蒙開拓青少年義勇軍訓練所跡	毎日新聞	68
元復員兵の心の傷　語ろう	《ヒロシマへ　ヒロシマから》	70
――「方正友好交流の会」へのお誘い――	方正友好交流の会	71
報国／編集後記		72

開館満７周年を迎えて～「コロナ禍」の中で～

満蒙開拓平和記念館　館長　寺沢秀文

１.開館満７周年に

昨年末から中国・武漢より始まった「新型コロナウィルス」による災禍は年を明けてから日本、そして世界中へと拡大し「パンデミック（世界的大流行）」と化しました。日本国内でも「緊急事態宣言」、「外出自粛要請」等、戦後では初めての異常事態となり、我が満蒙開拓平和記念館も４月初めより臨時休館を余儀なくされ、５月末までの休館延長となっています（６月１日より再開予定）。

そのような中でではありますが、お陰様にて我が記念館も開館から満７周年となりました。２０１３年（平成２５年）４月２５日に開館してもう満７年。まさかこのような長期の臨時休館の中で満７周年を迎えようとは思いもしませんでしたが、「もうそんなに経つのか」と感無量でもあります。このような状況下でとは言え、こうして開館満７周年を迎えることが出来たこと､それは偏に優秀な事務局スタッフ､熱心なボランティアの皆さん、そして全国から支援の声を送って下さる多くの皆様方、様々な形で記念館を支えてくださる皆さんのお陰であることは言うまでもありません。この場を借りて、改めてこれまで記念館を支えてきて下さった全ての皆さんに対して心より御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

今、コロナ禍のためとは言え記念館を長期休館せざるを得ないのは忸怩たるものがありますが、しかし、かつて開館に至るまでの紆余曲折の足かけ８年間、「本当に建てられるのだろうか？」と言う不安の中で長い準備期間を耐えた日々のことを思えば、今は記念館もあり､そしてここを拠点として活動してくれる多くの同志の皆さんがいます｡単なる「箱物」としてでは無く、開館当初の理念として掲げた「満蒙開拓」をキーワードとして人と情報とが交錯する「拠点」とするという役割はそれなりに果たせてきているものと自負しています。また、記念館の構想着手時から今日までこの『星火方正』誌上においても当記念館のことを何回も取り上げて頂きました。そのことにも深謝申し上げつつ、この機会に記念館の建設当時のことを少しばかり振り返ってみたいものと思います｡記念館開設まで、そして記念館開館後においても本当に様々なことがありました。その中には記念館構想の「言い出しっぺ」であり、また建設着手までの足かけ８年間の苦節時代に事務局長を務めた当方しかもう知らないこと等も少なくありません。当時、苦楽を共にした諸先輩方等の中からも多くが鬼籍に入られ、もう当初の事情等を知る人もほとんどいなくなりました。「記念館建設当時のことなど本にしてみたら」等の声も少なからず頂いていますが、それも本業を別に持つ非常勤館長の多忙の身にてなかなか果たせず、「いつかは書いて残しておかなくては」と思いつつも、それはまだ先のことになりそうです。

２.私と満蒙開拓との関わり

２００５年（平成１７年）９月に創刊され、これまでに２９号の発刊を誇るこの『星火方正』のバックナンバーを読み返してみると、満蒙開拓平和記念館のことを何回も取り上げて頂いており、その中で我が記念館の建設構想のことが最初に掲載されたのは２００６年（平成１８年）１２月発行の第３号において、当方が『旧満州二題』と題しての中で記念館の建設構想への取り組みを紹介したのが初めてのことと思います。

ここでも触れていますが、記念館構想に着手したのは２００６年（平成１８年）７月の飯田日中友好協会の第４４回定期大会において「記念館事業に取り組む」ことが採択されてからに始まります。飯田日中友好協会は記念館構想を進めてきた中心的組織であり、この協会無くしては記念館完成も有りませんでした。勿論、記念館構想着手に至るまでにも数年に及ぶ伏線があり、簡単な道のりではありませんでした。振り返ってみるに、戦前・中、全国各地から約２７万人もの開拓団員が渡満した「満蒙開拓」、その中で約３万３千人もの圧倒的な多くを送り込んだのが我が長野県であり、そしてその中でも最も多くの約８,４００人もの団員を送出したのがこの記念館のある飯田・下伊那地方でした。私事ながら私の亡き両親も満蒙開拓団員でした。私の一番上の兄は終戦の冬、新京（現長春）の避難民収容所で僅か１歳の命を落としています。父はシベリア捕虜抑留を経てようやく日本に引き揚げ、山間地の戦後開拓地に母と共に再入植し、今度こそ本当の開拓の苦労を重ねてきました。その父から、子供の頃から私が聞かされてきたこと。それは、「今度こそ本当の開拓の苦労をしてみて、改めて自分たちの大切な農地や家を日本人によって結果として奪われてしまった現地の中国農民たちの悔しさ、悲しさが本当に良く判った。あれは本当の開拓などでは無かった。中国の人々には本当に申し訳ないことをした」と言う悔恨の述懐でした。私が東京から故郷の飯田に戻り不動産鑑定士事務所を初めてから、当地で「中国帰国者の支援活動」等に積極的に取り組む飯田日中友好協会（当時は飯伊日中友好協会）に入会してその支援活動等に参加したのも、そしてその延長線上のこととして、満蒙開拓平和記念館の言い出しっぺとなり、今もこうして記念館の館長として関わり続けているのもこの父の言葉が一番の原点となっています。改めて「語り継ぐ」ということの大切さを思います。

３.記念館建設構想着手までの紆余曲折

前述通り全国で最も多くの満蒙開拓団を送出したこの地域だけに当然に残留孤児・婦人も多く、私たち飯田日中友好協会もその中国帰国者の帰国支援に行政等と共に取り組む中で、その残留孤児等の多くが実は満蒙開拓団の子女であるという事実を知ることになります。「どうして開拓団の子女ばかりが多いのだろう？」と疑問に思い調べ始めた中で、あれだけの多くの犠牲を出した満蒙開拓でありながら、そのことに特化した記念館等は全国どこにも無いことが判りました（青少年義勇軍だけに特化した記念館が現在の水戸市内原にはありましたが）。そして、「この満蒙開拓の歴史は語り継ぎ残さなくてはならない」と思い、当方が初代委員長となって飯田日中友好協会の中に発足した青年委員会の中で、元満蒙開拓団員や中国帰国者の方の聞き取りに取り組み始めたり、後にはその延長としてこの元開拓団員の皆さんらに体験を各地で語ってもらうための「語り部の会」を立ち上げたりもしました（後に飯田歴史研究所の中で作られ既に解散した『満蒙開拓を語りつぐ会』とは全く別組織となります）。しかし、当初段階では私にしても独自での満蒙開拓に特化した記念館まで建てようとまでは思っていませんでした。そのようなことを考えたことはありましたが当時はまだ私自身も「そんなこと無理だろう」とも思っていました。

その頃のことですが、当地域の平和団体、教育団体等の中で「平和祈念館(仮称)」を作ろうと言う運動があり、それは今も続けられ、かつ今も建設は実現していませんが、その運動に飯田日中友好協会としても当初は参加していました。しかし、正直なところ「行政等に建てさせよう」と言う他人任せ的なところがあり、いつまで経っても実現しそうも無く、また仮に実現したとしても満蒙開拓はそのうちの一コーナー程度に取り上げられるに過ぎず、それでは満蒙開拓の史実を十分には伝えられないとの思いもあり、その活動から

「コロナ」休館中の満蒙開拓平和記念館　（2020. 4. 26撮影）

まだ建設前の記念館建設用地と案内看板　（2010. 8. 15撮影）

国道沿いにあった記念館建設準備会の旧事務局（阿智村駒場。2009. 6. 4）

はやがて脱けました。その頃から「これはもう満蒙開拓に特化した記念館を作るしかない」と言う思いを抱くようになりました。当時の飯田日中友好協会の幹部の皆さん等にもこの考えを話すと、「それがいい」と言う意見もありましたが、それでも「そんなもの作っても人は来ないだろうし、維持も出来ないのでは」等と言う慎重論、消極論の方が当初は多くありました。

４.「満蒙開拓記念館」構想の立ち上げ

しかし、私なりに独学で満蒙開拓の実態等を調べ続ける中で、「この満蒙開拓という歴史はこのまま埋もれさせてはならずこれからも語り継がなくてはならない歴史」、「そのためには満蒙開拓に特化した記念館等の施設を作る必要がある」と言う思いがより高まり、それは確信へと変わっていきました。しかし、記念館を作るには資金確保を含めて多くの力の結集が必要であり、行政等にも働きかけなくてはならないものの、その提唱はこの地域で中国帰国者支援活動等に取り組む飯田日中友好協会がするしかなく、そしてそれを最初に言い出すのは私の役目との思いも高まりました。そこにはやはり戦後の国内生まれとは言え、元満蒙開拓団員を親に持ち、長兄が旧満州で亡くなっているという自身のルーツに対する思いも強くありました。同時に単なる私情としてだけではなく、このことを語り継ぐことの社会的意義の大きさは私情を大きく上回るものであり、その遠大な事業をやり遂げるには「有言実行」、まずは世に表明してしまって、これはもうやるしかないと言うところに追い込んでいく、それしかないとも思いました。そして、飯田日中友好協会の役員の皆さん等にも根回しをしつつ、日頃から親交のあった地元日刊紙の『南信州』と言う新聞紙面に「この地域にこそ満蒙開拓記念館を」との当方の寄稿を掲載してもらったのは、２００６年（平成１８年）５月のことでした（別添）。これが「満蒙開拓記念館」と言う名前が新聞等を通じて世に出た最初でした。これを踏み台として、飯田日中友好協会の中でも「協会が中心となって記念館建設に取り組むことにしましょう」と言う理事会提案をし、その年の７月の定期大会で建設事業への取り組みが採択されました。協会内外にも前記通りの慎重論、消極論も聞かれましたが、協会役員、会員の皆さんの中にはこの事業の重要性を理解し、これに前向きに取り組んでくださった方も多くいました。当時の協会副会長で（後には会長）長野県議会議員としても記念館実現に大きく寄与された森田恒雄先生（故人）、元泰阜村開拓団員で「残留婦人の母」とも言われ、残留孤児・婦人の帰国支援等に熱心に取り組まれた中島多鶴さん（故人）などを始め、多くの皆さんが熱心にこのことに取り組んでくださいました。しかし、会員の皆さんの中にも「寺沢さんが言い出したことなら賛成するしかないけど、でもそんなもの本当に作れるものかどうか判らないし、作ったところでそんなものに人が来るかなあ？」と言うやや不安視する声も一部にはありました。年輩者の多い日中友好協会の中で当時既に５０歳を過ぎていた私はそれでもまだあくまで若手でしたが、その一方で、上部団体の長野県日中友好協会の青年委員長、更には全国日中友好協会（当時は平山郁夫会長）の全国青年委員長なども歴任していて協会内での発言力も少しはあった当方の押しの一手でもあり、また前述通り「ここまで言い出した以上はやり遂げるしかない」と自分を追い込んでのものでもありました。誰かがやらなくてはならないことで、しかし誰もやらないならば、それは私（たち）がやるしかない。その思いでの出発でした。

５.立ち上げてはみたものの・・・

かくして記念館建設構想が打ち上げられ、その後直ちに組織整備に入り、飯田日中友好

協会が呼び掛け団体となって、地域の各種団体、行政等にも声をかけて回り、２００６年（平成１８年）８月には「満蒙開拓記念館（仮称）建設準備会」が発足しました。会長には飯田日中友好協会の河原進会長（記念館開館後は初代館長）が、また事務局長には言い出しっぺの責任を取って当方がそれぞれ就任し、準備会事務局も当方の会社内に置きました。正直なところ、「事業を私物化している」等の誤解を受けかねないことや社員に本業以外のことで迷惑をかけたくないこと等から、出来れば自分の会社に事務局を置くのは避けたかったところでした。しかし、当時、各種活動も活発で多忙であった飯田日中友好協会の事務局に記念館準備会の事務局まで負担して頂くことは避けざるを得なかったこと、また記念館事務局のことは結局は言い出しっぺでもある私がかなりの部分は負わざるを得ず、事務作業効率上からも当方の会社に置かざるを得ないと言うのが実際のところでした。

さて、こうして準備会が発足したものの、正直なところ組織的にも、また肝心の建設資金的にも不安満載での船出でした。幸い、長野県や全国の日中友好協会等の支援や、当時はまだ存続していた開拓自興会などかつての開拓団組織等からの支援も受けられたものの、行政等は「総論賛成、各論反対」的で、地元行政も当初はオブザーバー的な参加としてでした。今でも思っていることですが、当時も「国策として推進された満蒙開拓なのだから、本来はこういった記念館等は国立、県立等の公立として作るべき」との思いから、国、県、当時の政権与党であった民主党など各方面への陳情等も繰り返しましたが、行政等からの支援は当初段階では極めて厳しい状況でした。

行政からの支援も進まず、当初段階で大口寄付をして下さった方はいたものの、それ以降はなかなか寄付金集めもはかどらず、やがて１年、２年と歳月が過ぎ、またリーマンショック（２００８年）による経済不況等で寄付金集めにも暗雲が漂う等の中で、関係者の中でも「本当に記念館なんて実現できるのか？」等の重苦しいムードも漂い始めました。私個人としては最後には自腹を割いてでも、自分の家の農地の隅っこにでも、例えどんな小さなものであろうと必ず建てると言う信念はありましたが、それは最後の手段。何としても「みんなの力で完成させることが何よりも大切」との思いから準備会の仕事に没頭しました。しかし、準備会の役員の方々の多くは高齢者であり、数少ない若手も現役として仕事を抱える者ばかりで、結局は私一人で深夜、休日等に事務局の仕事をこなすしかありませんでした。あの頃、深夜に一人、会社に泊まり込みで資料作成などをしていると、「国策で進められた満蒙開拓の記念館を作ろうと言うのに、どうして一民間人である自分が深夜に一人、家にも帰れず、無報酬でこんなことをしなければならないのだろう？　一体、国や行政は何をしているんだ。子ども達を旧満州へと送り込んだ教育界の先生達は一体何をしているんだ」とやるせない思い、義憤にかられた夜もありました。しかし、それも今思えば懐かしい思い出です。あの日々があったからこそ今の記念館があると思ってもいます。

６.ようやく建設候補地が決定

当初段階で建設資金集めと共に特に苦労したのは建設用地探しでした。当初はこの飯田・下伊那地方の中核市であり、開拓団の送出者数も最も多い飯田市内での建設を想定し、行政関係等にも協力要請に歩きました。しかしながら、なかなか飯田市内では適当な用地が見つからず、ようやく光明が差したのは、建設構想着手から２年ほど経ってから、高校の先輩でありいろいろとお世話にもなっていた下伊那郡阿智村の岡庭一雄村長（当時）から、「だったら、阿智村の中でやってみるか」と言うお声かけを頂いたことからでした。実は当時はまだ飯田市内での立地を考えていた中で、阿智村は飯田市に隣接の村とは言え、

地域中核市を外れての他の山村部での建設用地確保はどうだろうか？　と言うことで正直迷いました。しかし、民間主導で進めざるを得ない事業とは言え、地元行政等からの支援は必要不可欠で、そのような中で小さな村ではあっても村を上げて支援をしようという阿智村からのお申し出は大変有り難いものでした。同時に幸いなことに飯田市と阿智村との境に新たに中央道の「飯田山本」インターが２００８年（平成２０年）４月に新設され、阿智村内でも飯田市内とはほぼ変わらない立地条件となったこと等もあり、準備会で協議した結果、「阿智村でお世話になろう」と言うことに決めたのは、その「飯田山本」インター開設と同じ２００８年（平成２０年）４月のこと、構想着手から２年近くが経過していました。

かくして阿智村での記念館立地は決めたものの、実はこの段階ではまだ具体的な場所は決まっていませんでした。現在の場所の他、村内の「昼神温泉」など何ヶ所かの候補地がありました。その中で最終候補地となったのは、国道等からはやや奥に入るものの村内を流れる阿知川の河畔にある１,４５５㎡（４４０坪）もの広い村有地である現在の場所でした。国道からも離れた目立たない場所ではあるものの、しかし駐車場も十分に確保出来る広さは魅力でした。しかも村のご厚意により当面は無償貸与で良いとのこと。実はこの土地のことは私も以前から良く知っていました。と言うのも、この土地は記念館の隣にある阿智村浄化センターの敷地としてかなり以前に確保された土地の一部で、村がこれを取得したのは遥か昔、確か昭和時代のこと。河原に水田が広がるこの場所の用地買収のための不動産鑑定評価を行ったのは、昭和５６年に東京から郷里の飯田に帰って不動産鑑定士事務所を開業してまだ間もない当方でした。実は阿智村は私が当村内にある阿智高校で３年間の青春時代を過ごした思い出の場所でもあり、この土地のことも含め阿智村との不思議なご縁を感じずにはおられません。

７. 山本慈昭記念館事業計画の統合

阿智村で記念館事業を展開することになった中で、一つの懸案として、当時阿智村内ではかの「残留孤児の父」と呼ばれ、阿智村の名誉村民でもあった山本慈昭翁を顕彰しようとする活動との調整がありました。勿論、山本慈昭翁はもう鬼籍に入られており（平成２年没）、その後継者の皆さん等が細々と活動されていたものの、中国からの帰国者も年々少なくなる中で、慈昭翁の立ち上げた「日中友好手をつなぐ会」の活動も停滞化していました。しかし、その後継者の皆さんの中には慈昭翁を顕彰する記念館を建設しようという計画があり、阿智村としてもその合体を前提としての具体化策としても満蒙開拓記念館を阿智村に呼び込むことのメリットもあったものと思います。しかし、その慈昭記念館計画も当初は満蒙開拓記念館とは別で自前の記念館を建てたいと言う意向を持っていたものの、実際には資金面等で行き詰まっており、最終的には満蒙開拓記念館事業に吸収する形となりました。これも奇遇ながら山本慈昭翁が住職を務められていたお寺「長岳寺」が記念館から歩いて直ぐの所にあり、慈昭翁の長岳寺があったから記念館があそこの位置に建った等と曲解している方もおられますが、それは全くの偶然で、長岳寺自体もかつては全く別の場所にあったものが中央自動車道工事により現在の場所に移転してきていたものでした。したがって、あの映画『晩鐘の鐘』に出てくる長岳寺は当時は全く別の場所でした。いずれにしても満蒙開拓の招いた悲劇でもあった残留孤児・婦人、その帰国のために献身的に尽くされた山本慈昭翁は正しく尊敬に値する偉人であり、そのご縁もあっての当記念館の阿智村での立地であったかとも思っています。

雨の中で挙行された記念館の開館式　（2013. 4. 24）

昨秋、新設なった記念館の「セミナー棟」（2019. 11. 4）

新「セミナー棟」利用団体第一号は大阪からの修学旅行（2019. 10. 10）

８.事務局体制も徐々に整う

かくして阿智村内での記念館立地を決めた段階で、これまで飯田市内の私の会社内に置いていた準備会の事務局を阿智村内に移したのもこの頃でした。「村内でどこか安い民家でも借りて」と思っていたところ、飯田日中友好協会の役員の方の紹介で、有り難いことに国道沿いの一軒家を格安でお借りすることが出来ました。この貸家の大家さんは奥山廣さんとおっしゃって、この記念館事業にとても理解を示してくれ、家賃も格安にしてくれたどころか、盆暮れに家賃をお支払いに行くと、その家賃をそのまま「これは準備会に寄付するから」と手渡してくれたりした、本当に神様のようなお方でした。その奥山さんも記念館の完成を見届けた後、本当に残念なことに平成２８年７月に鬼籍に入られてしまいました。こういった多くの皆さんのご支援あっての記念館の実現でした。

こうして阿智村内に準備会事務局を移したのが２００９年（平成２１年）１月のこと。しかし依然として事務局員は実質的には私一人だけで、本業の仕事が終わってから深夜や早朝にこの事務局まで通うと言う生活が１年ほど続きました。この事務局に泊まり込んだ夜もありましたが、まだ先の見えないこの事業のことを思うと、「一体いつになったら建てられるのだろう」と悶々と眠れない夜もありました。しかし、流石にこれでは先に私が倒れてしまうし、それ以前に事務局機能が十分には果たせないと思い、準備会役員会で「安い給与しか払えないが週３日勤務とかでもいいので専従の事務局員を雇用したい」と要請し許可を得ることが出来ました。しかし、果たして建設実現出来るかどうかも判らないこの事業、ましてや薄給しか払えないこんな所に人など来て頂けるだろうかと思っていたところに現れたのが現在、記念館の事務局を仕切ってくれている三沢亜紀現事務局長でした。広島県出身の三沢さんは平和への思いも厚く、薄給を承知で自ら望んでこの満蒙開拓の世界に入ってきてくれたのは記念館構想が始まってから３年以上も過ぎた２００９年（平成２１年）の暮れ近くのことでした。勿論、当初段階では満蒙開拓のこともほとんど知らない彼女でしたが、元々が優秀な方であり、めざましい吸収力で、今は記念館にとっては欠くことの出来ない「要」として館運営全体を担ってくれています。

こうして事務局体制も整い始め、翌２０１０年（平成２２年）８月には阿智村内にて初の本格イベント『満蒙開拓歴史展』を開催、１週間の開催期間中に県外からも含め約１，８００人が来場、改めて満蒙開拓を語り継ぐことの意義深さ、そして国民の間での満蒙開拓への関心度もまだまだ高いと言うことを実証でき、それからはいろいろなことも動きだすようになりました。しかし、記念館が開館出来たのはそれから更に３年を経過した２０１３年（平成２５年）であり、それまでの間にも様々な紆余曲折がありました。紙面の都合もあるので、それらのこと、開館後のことなどはまた機会を改めたいものと思います。

９.最後に（満蒙開拓平和記念館を建てたことの意義）

こうして記念館構想発足当時のことを思い起こすと、本当に「構想当初から足かけ１５年、開館から満７年、早いものだなあ」と改めて思います。多くの皆さんのお力により建てられ、そして維持されている当記念館、まだまだ課題も多いものの、それでも建設当初の目的も徐々に果たせつつあるものと思います。「満蒙開拓の史実をより多くの人に知って頂くこと」、「その史実の中から平和の尊さを学んでいくこと」、「満蒙開拓に関わる人と情報の交錯する拠点とすること」、「満蒙開拓を語り継ぐ後継者の育成をしていくこと」等々の所期の目的も徐々にながら実現出来ているものと思います。開館以来の７年間の記念館活動の中では多くの出来事、学び等もあり、年間３万人前後の皆様にご来館頂いたり、２０１６年（平成２８年）１１月には思いもかけず当時の天皇皇后両陛下にご来館

頂く等の出来事もある等、「満蒙開拓の史実」をより多くの人々に伝えていくという記念館の使命をそれなりに果たせてきたものと思っています。

その一方で抱える課題も依然として山積です。言うまでもなく当記念館の立地は正直なところかなり不便です。そのような中、流石に開館満７年ともなると来館者数も減少しつつあります。しかしそれも全て「想定内」です。飽くなき挑戦を続けるべく、今後は更に若い人たちの平和・人権学習等の場として地区内外の学校関係、県外からの修学旅行等の受け入れ等にも対応出来る施設とすることを目的として、昨年秋、１２０人収容可能な「セミナー棟」を多くの皆さんのご支援により完成させることが出来ました。その直後にとも言える今回のコロナ禍で、中には「あんなもの建ててしまって大変でしょう」との声も一部には聞かれますが、しかし私は全くそんなことは思っておらず、むしろ昨年のうちに建てられて本当に良かったと思っています。今年になっていたらまずセミナー棟など暫くはあるいは永遠に建てられなかったかも知れません。一昨年の春、思い切って新規建設を決定し、開館以来、節約を重ねる中で蓄えてきた自己資金と多くの皆様からの尊いご寄付等により、幸いにして借入等することも無く昨年中に建てられたことは極めて有り難いことでした。あれだけの広さがあれば、今回のコロナ対策等として距離を取っての感染対策を講じての学びの場として活用していくこと等も出来ます。

今回のコロナ禍等を経る中で改めて思ったこと。それはこの記念館を建てたことの意義の大きさです。満蒙開拓の史実は多くの犠牲を出したが故に振り返るには躊躇する部分もあった向き合うことの難しい歴史、不都合な歴史でもありましたが、しかしそこからは未来の平和に向けて学ぶことの多い教訓の多い歴史でもあります。多くの犠牲を出してしまった道筋を辿り、二度と同じ犠牲を出すような歴史を繰り返すことの無いように、共に歴史から学ぶための拠点として満蒙開拓平和記念館はこれからも在り続けたいと思います。旧満州の近現代史を学ぶことは日本とアジアとの関わりの近現代史を学ぶ上でも大きな位置づけにあると思います。これからの次代を生きる若い皆さんと共に平和、命、人権等を考えていく中で「満蒙開拓」と言うテーマは極めて多くの教訓に富んだ歴史であり、これに向き合うことは明日に向けての「平和の種まき」であるとも思っています。

開館から満７年、記念館を通じての様々な出会いや発見、学び等があり、「これも記念館と言う活動拠点があったからこそ」と思うことも少なくありません。あの準備期間中の苦節に満ちた足かけ８年間、信念を曲げずに頑張って記念館を完成させて本当に良かったと今改めて思っています。

このような状況下とは言え開館８年目に入った当記念館への皆様よりの今後の更なるご支援等を改めてお願い申し上げると共に、このコロナ禍の収束後には是非また当記念館へご来館頂けますよう伏してお願い申し上げたいと思います。

（てらさわ・ひでふみ；1953年生まれ。不動産鑑定士の傍ら、館長業務に奔走。また旧満州の元開拓団跡地などを訪ね歩き、両親らが暮らした吉林省水曲柳などを20数回訪れる。長野県松川町在住）

「満蒙開拓記念館（仮称）」の名が最初に世出た日刊『南信州』（H18.5.3付）への掲載記事

2006年（平成18年）5月3日　水曜日

この飯伊にこそ満蒙開拓記念館を

―飯田日中友好協会からの提唱―

寺沢秀文

かつて現在の中国東北地方に13年間だけ存在した幻の国「満州」。この満州に日本全国から約27万人の開拓団が渡満し、その中でも最も多くの開拓団を送出したのが長野県であり、さらにその4分の1を送出したのが私たちの飯田・下伊那からであったことは多くの人が知るところである。

この旧満州関係に関してはこの地域でも多くの記録活動等が進められており、旧満州との縁の深い飯田日中友好協会（河原進会長、会員300名）においても、早くから満蒙開拓体験談の語り継ぎ活動や資料収集、保存等に取り組んでいるところである。当協会は全国に数多ある日中友好協会（平山郁夫全国会長、会員約3万名）、長野県日中友好協会（井出正一会長、会員約3千名）の中でも極めて活動の活発な協会として知られている。これも、満州残留孤児等の引き揚げ支援、平岡ダム殉難中国人慰霊事業等を契機として昭和38年に協会の前身が発足し、以降、歴代の小笠原正賢初代会長（元阿智村村長）、串原義直元会長（串原先生はその後、長野県日中交流協会を新たに設立され現在も幅広く御活躍中である）、河原宣人前会長等の御尽力のもとに現在まで諸活動が引き継がれてきた成果でもある。現在も当協会では諸事業を展開しており、旧満州関係では昨年より「満蒙開拓・語り部の会」を立ち上げ、約40人の元満蒙開拓団員等の語り部の方に学校や地域の集まり等で体験談を話して頂いている。当協会における満蒙開拓の語り継ぎ記録活動は平成5年に協会内に立ち上げた青年委員会活動の中で着手し、この語り継ぎ活動はその後、飯田歴史研究所が中心となって運営する「満蒙開拓を語りつぐ会」に継承され、同会では公的補助を受けつつ「下伊那のなかの満州」として聞き取り報告集を発刊されている。これも大変な手間のかかる事業であり聞き取り手各位の御苦労はいかばかりかと思う。飯田日中青年委員会当時の語り継ぎ活動は全くの手弁当であり、公的補助を受けての運営は誠に羨ましいところである。こういった類の活動はなかなか公的補助が得られず、昨年秋に出版した「伊那谷の満蒙開拓慰霊碑等記録集・慰霊碑は語る」も飯田日中友好協会よりの御援助を頂いた以外は全くの自費出版であり、多くの追加発行依頼も頂いたが、これ以上は赤字となるばかりであるのでその増刷をあきらめた経過もある。

こういった旧満州に係わる調査、記録活動を進めていくうえでいつも痛感することは満蒙開拓に係わる資料文献の保存の重要性である。勿論、満州関係の専門書等もであるが、個々の開拓団で書かれた記録集や追悼文集、個人的手記等については図書館等公的機関での保存も十分ではなく、個々の蔵書のまま、御本人の逝去等と共に処分されてしまうことも多い。それらの中には、満蒙開拓に係わる貴重な資料も数多く含まれていることと思う。そして、いつも思うことは、この地域にこそ満蒙開拓資料館の開設をということである。かつて「平和記念館」であったか類似の構想もあり、行政等が中心となっての検討委員会等も設置されていたようであるが、それもその後の話を聞く機会が無い。勿論、満蒙開拓だけでなく、戦争全般に係わる資料を保存し、平和の尊さを語り継ぐための平和記念館等の設置も必要であろうも、このような施設は既に全国各地にある。また、近・現代史の中での一分野として扱うのでは満蒙開拓も単なる歴史の一コマとして埋没してしまう。全国で最も多くの満蒙開拓を送出したこの飯田・下伊那であるからこそ、全国にも例のない満蒙開拓に特化した記念館を設置すべきと思う。そして、それは飯田・下伊那でしか出来ないことであるし、この飯伊でこそやるべきことと思う。かつて青少年義勇隊の訓練所があった茨城県の内原町（現在は水戸市内原）に義勇隊記念館があるなどするも、満蒙開拓だけに特化した記念館、資料館等の存在は全国的にもまだ聞いたことはない。全国一多くの開拓団を送出した当飯伊地方であるだけに、満蒙開拓を研究する学者の方なども多く来訪され、開拓団関係者等から多くの資料等を収集されていかれる。その研究成果は学者の方々の学業成果として活用されてはいるも、その研究成果が再びこの地域へ還元されることは極めて少ない。やはり地域のことは地域の人々の手により守り、語り継いでいかなくてはならないという思いが強い。飯田日中友好協会でもこの満蒙開拓資料館の設置の必要性を重視し、早くから協会内に関係委員会を設け、資料館の設置を提唱してきているところである。地域の歴史でもある満蒙開拓に係わる諸資料等を記録、保存し、この地域から多くの人々が旧満州へと渡った歴史的事実を永遠に語り継ぐと共に、戦争の悲惨さ、平和の尊さを確認し合っていくことは未来への重要なメッセージでもある。当協会としても改めて満蒙開拓記念館の飯伊の地での建設を提唱するところである。市町村等行政始め関係各方面でもこの問題について今一度真剣に取り組んで頂きたいものと切に願うところである。

（追記）飯田日中友好協会では6月24日～29日、旧満州の葫蘆島、瀋陽、大連、旅順を訪ねる旅を募集しています。葫蘆島は満州から日本への引揚出港地であり6月25日開催の60周年記念式典に参列、帰途、瀋陽での世界花博、旅順の203高地などを訪ねます。どなたでも参加自由ですので、参加御希望の方は飯田日中友好協会の小林事務局長（電話㉓6389）、または寺沢（電話㉔6186）までお問い合わせ下さい。

【飯田日中友好協会副理事長】

「日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後」

シンポジウム報告

三沢　亜紀

2019年10月19日。記念すべきセミナー棟竣工式当日、遠くドイツから引揚げ体験者女性３名をお迎えし、シンポジウム「対話から学ぶ歴史と未来　日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後」を開催した。この開催経緯と当日の様子について書いてほしいと声をかけていただき、改めて経緯についてさかのぼってみると、シンポジウムのキーマンであった上智大学教授・木村護郎クリストフ先生と方正友好交流の会の大類善啓さんとの出会いに辿りつくのである。お手元にある方は、『星火方正』会報２３号　２０１６年１２月刊を今一度開いて読み返していただきたい。めぐりめぐって繋がっていく人との出会いから生まれたシンポジウム。まずは開催経緯から辿ってみたい。

ドイツへのいざない

2016年9月にご一家で来館された木村先生から、お祖母様の体験として、ドイツでも敗戦後に満州と同じ様な悲惨な逃避行があったことをお聞きした。当記念館の展示はその話とシンクロするという。愕然としたことを覚えている。確かにドイツも日本と同じように占領地を広げていったし、ナチ政権のホロコーストはあまりにも有名だが、敗戦とともに追われたドイツの人々がいたこと、その姿はまったく想像していなかった。

２０１７年夏。そのドイツからメールがきた。デュッセルドルフ在住の日本女性、フックス真理子さんだ。彼女は「被追放者女性同盟」という団体から依頼され、日本の満蒙開拓団の講演をおこなうため準備をしているという。この何やらいかつい名前の「被追放者女性同盟」とは何だろう。そこから「ドイツ人追放」の歴史に出会い、木村先生の話に結びつくことになる。（この時点でフックスさんと木村先生はすでにドイツでつながっていたことは後で知る。）

日本と同じように占領地から逃れた人々の中には、ナチの非道への残虐な仕返しを受けたり、長年ドイツ領であったところを強制的に追われた人々も多かった。戦後、ヨーロッパ中からドイツに帰ってきた人たちは実に1,200万人ともいわれている。「引揚げ」ではなく「追放」といわれているところに、苛酷な状況と容赦ない厳しさが感じられる。

そんな体験をした人たちが戦後組織した団体「被追放者同盟」の中の女性組織が「被追放者女性同盟」というわけである。（開拓団でいうと「開拓自興会」にあたるが、その中に女性組織はない。これも日独の社会の違いであり興味深いと思う。）彼女たちが今でも講演会などを催し学び合っているというのも驚きだった。しかも、その活動には政府機関が助成金も出しているというのだ。実はフックスさんもこの講演を通して比較・考察した日本とドイツの歴史の向き合い方について、『星火方正』（会報26号 2018年5月刊）に寄稿されている。

そして、2017年12月。以前から一度は訪れたいと思っていたアウシュビッツ収容所博物館で唯一の日本人ガイドとして活躍されている中谷剛さんが、帰国に合わせてわざわざ

当館に来てくださるというサプライズがあった。ホロコーストという史実にどのように向き合い伝えているのか。私はあの現場に立ち、中谷さんのガイドを聞きたかった。また、この歴史をドイツではどのように伝えているのかも見ておきたい。中谷さんの来館がきっかけで、ポーランドとドイツへ行くことを決め、動き出すことになった。

2018年3月には木村先生が記念館で講演をしてくださった。テーマは「〜対立・侵略・追放・和解〜　ドイツ・ポーランド関係史から考える東アジアの隣国関係」。ここで、ドイツ・ポーランドと日本・「満州」という対称軸がしっかり見えてきた。対称軸はもう一つ、戦前と戦後という時間軸もある。

帝国主義のもと、軍事力をもって広げた占領地へ自国民を入植させ、敗戦を迎えるという共通点。追放されたドイツ人と満州からの引揚者は、被害者でもあるが、背景に国としての加害の面も背負わされている。一方で、隣国との和解の歩みを進めてきたドイツ。大きな戦後の相違点だ。人々の歴史への向き合い方は何がどう違うのだろうか。相対的な学びは「満州」について客観的な視点と同時に、私たち日本社会の課題を浮き上がらせてくれるものだった。（この講演内容は『星火方正』26、27号に木村先生が寄稿されている。）

こうして、2018年6月、私たちはヨーロッパへ向かうことになる。まずはポーランドにあるアウシュビッツを見学し、中谷さんに再会。その後、ドイツへ移動することにしたのだが、フックス真理子さんが、ドイツに来るならぜひ「被追放者女性同盟」の皆さんとの交流会を、とセッティングしてくれることになり、ボンにある国立歴史博物館の見学を兼ねて彼女たちと会うことになった。

「記憶の対話」という文化

交流会は国立歴史博物館の２階にある会議室でおこなわれた。私たちを迎えてくれたのは、「被追放者女性同盟」の会長マリアさんと、役員で重鎮のヘルガさん。同館で「ドイツ人追放」をテーマにした企画展の責任者を務めた学芸部長さんまで同席してくださり、昼食をはさんで約３時間におよぶものとなった。

マリアさんはまず女性同盟という組織の意義について「かつてドイツが占領したポーランドなどの隣人を訪ね、お互いの戦争体験を話し合うことが最も大切な課題です。そして、私たちの文化の中でその経験が生かされること、その声を今、この社会に還元していくことが必要です」と切り出した。そして、この交流会について「私たちは加害と被害、両方を持ち合わせているという形でここに一緒にいます。これがどういうことであったのかを話し合うことは良い体験になると感謝しています」と。

ヘルガさんも言う。「ドイツは戦後の学校教育や社会の中で、ナチ政権時代、ドイツの国が犯した罪をゆっくりとではあるが追及してきました。そして、あのヴァイゼッカー大統領がはっきりと自分たちの国の罪を告白しています。私個人としてはそれをとても誇りに思っています。」

圧倒された。もちろんお二人はそれぞれ学識も社会的立場も高いのだが、自分たちの経験を客観的に捉え学んできた視点や、被害の苦しみを乗り越え自分たちの国の歴史として加害の面にも向き合ってきたことなどを堂々と語る姿。彼女たちは隣国との和解の歩みを自らにも課してきたのだった。開拓団の歴史が社会的にも、国としても検証されず、ご本人たちもほとんど口にできずにきた日本との歴然とした違いを突きつけられるようだった。

そして、印象深かったのは「還元する」という言葉。かつての経験や人々の思いを現在に生かすという考え方である。そのための「記憶の対話」であり、それが隣国との和解につながり、国際社会のあり方を考える叡智となる。

もちろん、ドイツのイデオロギーも隣国との和解のプロセスも単純ではなかった。多くの人々は自分たちの故郷を奪われ、戦後新たな国境線が引かれたのである。そして、ドイツ社会があのホロコーストの歴史と向き合いはじめたのもようやく 60 年代後半のことだ。どれほどの痛みを伴っただろうか。でも、それらを乗り越える力を、人々は対話や学びの中から培ってきたのだと思う。それは文化として今に息づいている。

こうして、交流会はドイツ側の皆さんの発言に圧倒される形で時間切れとなった。それでも、日本から参加した元開拓団で語り部でもある原千代さんが体験を少し語り、同世代であるヘルガさんとしっかり握手をして別れた。二度と来ることはないだろう、会うこともないだろうと思いながら。

そして、日本での再会

貪欲に学ぼうとするヘルガさんは日本に来る気満々だ、というフックスさんからのメールが届いたのは 2019 年の春だった。ご高齢の原千代さんをドイツへお誘いしたのもかなり躊躇しつつだったが、あのヘルガさんが日本へ？！　しかも時期としてはセミナー棟が竣工するタイミングである。新しいセミナー棟で国際的なシンポジウムが開催できれば、こんな光栄なことはない。

ありがたいことに、木村護郎クリストフ先生がコーディネーターを引き受けてくださることになり、日本側のパネラーとして、当事者でもあり研究者でもある長崎大学准教授の南誠先生も参加可能となった。話はトントン拍子に進んだが、資料作りなどの準備は大変だった。ドイツからのパネラー３名は、前年にお会いしたヘルガさんとマリアさん、そして若い世代の後期帰還者であるローゼマリーさん。この３人が事前に書いてくださった重厚なレポートの和訳に、フックスさんと木村先生が奮闘してくださった。当日はこの内容をもとにしつつ、ご本人たちの体験を中心に話していただくこととし、はじめに歴史背景と複雑なドイツの引揚げについては木村先生が基調講演をしてくださることに。

2019 年 10 月 19 日。午前中のセミナー棟竣工式を無事に終え、午後のシンポジウムに多くの人が集まってきた。そして、ドイツからの皆さんも到着。ヘルガさんやマリアさんがこの記念館に本当に来てくださったことは、今でも信じられないくらいだ。

木の香りに包まれたセミナー棟に机と椅子がぎっしりと並べられた。参加者は１００人を越えた。まずは木村先生の講演。ドイツの引揚げは「避難」「追放」「強制移住」と「後期帰還」など、どこにいたか、いつ帰ってきたかによって状況が異なる。ヨーロッパ各地に民族が混在していた時代から、１９世紀に入り一民族一国家、すなわち国民国家という理念が広がっていく。この考え方をヒトラーは侵略の理由に使い、敗戦後も同じくこの考え方で人々はドイツへと帰ることとなった。ひとあし先に戦後を迎えたヨーロッパにおいてこうした民族の大移動がおこなわれ、アジアでも日本人の帰還がおこなわれることとなる。では、人々はどのように帰還し、国や社会はどのようにその人たちを迎え入れたのか。

シンポジウム前半では主に、ヘルガさんがチェコからの悲惨な逃避行の経験を。マリア

さんがルーマニアの残留経験を踏まえ、ドイツが帰還者にどのような支援策を講じたかを。ローゼマリーさんは後期帰還者（主にベルリンの壁崩壊後に東欧諸国から帰国した人。日本でいう国交正常化後の中国帰国者に相当する。）という立場の体験も混じえながら、ドイツの戦後引揚げ体験が現在の移民・難民問題にどのようにつながっているのかを。南さんがそれぞれドイツと比較して日本の引揚げとその後の受け入れについて述べた。

後半ではパネラーがお互いに質問をし、会場からの質問にも答える形で進められた。印象に残ったのは、ドイツの引揚者たちが故地のことを大切にしていることと、今でも現地の人たちと交流しているケースもあることだった。また、ドイツと日本で決定的に違うと感じたことは、引揚者の生活支援のための制度が早くから確立されていたことと、ドイツはドイツ民族として生きてきた人たちをドイツ国民として受け入れたということだ。もちろん個人の体験としては引揚げ後の苦労、後期帰還者への差別などは日本と共通することもある。しかし、残留孤児訴訟を通してようやく手に入れた支援金制度しかり、戸籍を抹消された上、国交正常化後の帰国においては身元保証人が必要とされるなどの日本と比較すると、制度的な差が歴然としている。

さて、シンポジウムのクライマックスは、ヘルガさんの「加害の歴史にどう向き合うか」という話であった。「私たちもある意味、ナチスという政府を持ってしまった被害者であると思う。私たちが持っている罪、これをどう償えるのか、答えはない。」沈痛な表情で語るヘルガさんのことばに会場は一瞬静まりかえった。彼女はユダヤの人々との交流を持ち、彼らの文化を学び歩み寄っていった。彼女なりの答えである。それは、遠く日本まできて日本の歴史を学び対話をしようとする姿にも表れている。心震えるひとときだった。

シンポジウムをまさに閉じようとしたその時、最前列に座っていた原千代さんが思わず立ち上がってヘルガさんのもとへ歩み出て、手を握り合うというひと幕もあった。同じ時代にアジアとヨーロッパで同じ様な体験をした二人。大切な人を失い、戦後の苦難も乗り越えてきた。その二人が手を取り合い、お互いをいたわり、ねぎらう。時空を越えた奇跡のような瞬間だった。会場は大きな拍手と笑顔に包まれた。

記念館というプラットホームで

あの時の興奮と感動が今でもよみがえる。人と人とのつながりが導いてくれたシンポジウム。特に、当事者同士が膝を交え体験を語り合う場に居合わせた私たちのこの体験は、きっと後に振り返った時にどれほど貴重であったかを改めて知ることになるのだろう。

欧州・ドイツの引揚げと「満州」をはじめとするアジア・日本との比較研究は、「満蒙開拓とは何だったのか」という命題を、これまでとは違う視点で明らかにするアプローチとなり得ると思う。そのような中で、私たち満蒙開拓平和記念館は、人々の記憶に寄り添い、「記憶の対話」を通して国を越え、民族を越え、学び合う役割を果たしていきたい。いつか隣国の人々と、このようなシンポジウムが開催できることを願って。

（みさわ・あき：1967 年生まれ、広島県出身。大学から 8 年間の東京生活を経て結婚後に長野県飯田市へ移住。15 年間ケーブルテレビ局勤務。2009 年 12 月より記念館事業準備会事務局員。満蒙開拓平和記念館事務局長。）

「日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後」シンポジウム風景

左から南誠さん、マリア・ヴェアタンさん、
ヘルガ・エングスフーバーさん

シンポジウムの会場の様子
木村護郎クリストフ先生（右）と
パネラーのみなさん

新しいセミナー棟に 100 人以上の聴衆

最前列に座る元開拓団員とヘルガさん、
通訳をする木村先生

「満洲国」のエスペランティストたち

～「王道楽土」の一断面～

石川 尚志

かつて少なからぬ日本人にとって「満洲国」は壮大な「実験国家」、「計画国家」だった。中国東北地方と内モンゴルの悠久な歴史と現に住む諸民族を無視して、白地図を広げると現在の日本の 4 倍近い広さになる。そこに自由に鉄道網と道路網を広げ都市を描く。鉱物資源と広大な土地があるので豊かな国になるだろう。国には元首と人民が必要だ。好都合なことに、満洲から出た清王朝の最後の皇帝で辛亥革命で倒された溥儀がいる。人民は新たに定義して五族、即ち、満洲、中国、モンゴル、日本、朝鮮の五民族を平等に国民とする（ただし国籍法は制定されず、法的な意味の国民は不在）。行政機構、産業、その他の制度は日本を手本にするが、伝統に縛られ既存権益にまみれた組織は持ち込まない。国造りの標語は「五族協和・王道楽土」だ。

このような壮大極まるビジョンに胸を躍らせて「理想国家」建設に邁進した多くの日本人がいた。満洲国は「私の作品」とうそぶいた、今の安倍首相の祖父、岸信介もその一人だった。

渡満したエスペランティスト

もちろん、すべての日本人が理想を抱いて渡満したわけではなく、内地で食い詰めて渡った人も多かった。窮乏する農村からソ満国境付近に入った農民たちがその典型だろう。いずれにせよ、大多数の人は日本では得られぬなんらかの「可能性」を求めて海を越えた。そういう人たちのなかに、少なからぬエスペランティストがいた。彼らの多くが考えたのは、「計画国家」には「計画言語」[1]が相応しい、ということだった。その根拠は、「五族協和」のスローガンにあった。実態はともかくタテマエとしては、五民族は平等であったから、言語も平等なはずだ。事実、初期の満洲国では、日本語が優先されたわけではなかった。満洲語（ここでの満洲語は満州族に固有のアルタイ語族の満洲語ではなく、中国語であった）、朝鮮語、モンゴル語、日本語、更に多くの白系ロシア人たちのロシア語が話されていた。ある民族の言葉を他の民族に押し付けるのでなく中立で易しい言語があれば共通語として、諸民族が対等に付き合うための手段になる、というのだ。

さらに彼らの脳裏には、エスペラントの創始者、ザメンホフが共通言語を考えるきっかけとなった光景が浮かんだことだろう。19 世紀ロシア帝国領であったポーランドのビャウストクでユダヤ人、ザメンホフは生まれた。そこでは四つの民族が混住し、ロシア語、ポーランド語、ユダヤ人の言葉イディッシュが話され、お互い他民族の言葉を解さず、いさかいが絶えなかった。ザメンホフ自身が後に少年時代を回想して手紙に書いている。

「どこよりもこの街で、感じやすい心は言語が異なることの不幸を思い、そして一足歩む毎に言語の相違こそが唯一の、または主な原因であり、人類家族を引き裂き、敵対するグループに分断している、と確信したのです」[2]

1887 年にエスペラントが発表されてから 10 年ちかく経った世紀の変わり目には、極東の

ロシア、中国、日本にエスペラントが到達し始めた。1904 年ザメンホフのもとで作られた年報には、大連、長春、ハルビンで 9 人のロシア人名が載っている。日本や中国では欧米への留学生、海外情報に敏感な知識人などが個人的に学ぶ程度だった。ウラジオストックに本店を持つ貿易商・徳永商店の顧問として 1902 年に大陸に渡った長谷川辰之助（筆名・二葉亭四迷）が、当地のエスペラント会の代表であるポストニコフに出会い、誘われて入会している。そして、エスペラントの教科書を日本語で書くことを勧められて、4 年後の 1906 年に日本で最初の教科書『世界語』を出版することになる。

揺れ動くエスペラント運動

1920 年代になると日本でも、第一次世界大戦後の国際協調主義と大正デモクラシーを背景にエスペラント運動に追い風が吹く。国際連盟の事務局次長の新渡戸稲造が、1921 年にエスペラントに好意的な報告を連盟に提出したり、翌年には衆議院がエスペラントに関する調査請願を採択した。1920 年代末が戦前の運動の最盛期であり日本エスペラント学会（Japana Esperanto-Instituto, JEI）の会員数が 2100 人を超えた。満洲でも満鉄関係者を中心とする運動が活発になり、1923 年の大連でのエスペラント会の発足に奉天（現瀋陽）、長春（のちに新京）、撫順などが続いた。

しかし、1930 年代になると時代は暗転する。満州事変に続く傀儡（かいらい）国家「満洲国」の建国、そしてこれに続く国際連盟からの脱退と国際的孤立が戦争への道を開いた。海外では、ナチスドイツとスターリン体制下のソ連で、36、7 年にはエスペラント運動はほぼ壊滅させられた。日本では運動は禁止されなかったものの当局の厳しい監視下に置かれた。一方、エスペランティストの中には、満洲国建国を運動にとっての大きなチャンスととらえたものもいた。1932 年には高橋邦太郎らの有志が多くの署名を集めて、満洲国政府および日本の内務省にエスペラントを満洲国の「国際用語」として採用することを陳情した。

二・二六事件で処刑された思想家北一輝が著書『日本改造法案大綱』において、エスペラントを第二国語とする、と主張したのはよく知られているが、満洲国とエスペラントの関係については次のような話がある。関東軍参謀の石原莞爾（いしわらかんじ）が大本教の幹部に、満洲国がいよいよ独立するので、そのときにはエスペラントを採用する。これを満人に教えるための教師団の編成を大本で引き受けてもらいたい、と依頼したというのである。[3] しかしその後、石原や満洲国の側からの具体的な働き掛けはなかったようだし、大本の側にも組織的に満洲国にエスペラントを持ち込む力量はなかった。

そんな訳で、政府が関与するような上からのエスペラントの導入は行われなかった。しかも、日本においてエスペラントの運動が、大東亜共栄圏の理念にすり寄ることによってしか認められなかったと同様に、満洲国においても運動が「理想国家建設」の理念に迎合することで成立し得たことに留意しなければならない。その具体的な例が、1938 年に満洲国最高検察庁次長として赴任してきた平田 勲（ひらたいさお）との協同である。平田は思想検事のエースであり、1933 年に共産党の最高指導者佐野学、鍋山貞親を転向させた仕掛け人といわれ、プ

ロレタリア・エスペラント運動の摘発にも力を発揮した。満洲赴任の直前、JEI は当時東京保護観察所長をしていた平田を招き、会員向けの講演会を開催している。翌年 1939 年 8 月、平田は新京で開かれた全満エスペラント懇話会で「時局とエスペラント必修」と題して講演、「エスペラント精神こそ八紘一宇（はっこういちう）の精神と一致する」と運動へのお墨付きを与えた。これはとりもなおさず、エスペラント運動は平田の掌で踊っていたにすぎない、といえるかもしれない。いずれにせよ、満洲にわたったエスペランティストは多く、新京や奉天のエスペラント会の活動は盛んだった。多民族国家「満洲国」の公用語としてエスペラントを採用せよという主張も新京エスペラント会会長の荒川衛次郎（あらかわかんじろう）などによってなされた。

満洲でのエスペラント放送

本稿は、満洲国のエスペラント運動を全体として扱うものではないので、概括的な記述はここまでで、幾人かの人物を個別に取り上げてみたい。これらの人々は、昨年私が、『埼玉県エスペラント運動史』を書くためにあたった資料に出てきただけであり、満洲国の運動を代表する人々というわけではない。

最初に取り上げるのは、新京エスペラント会の住吉知恵子である。彼女は 1941 年（昭和 16 年）9 月 11 日に新京中央放送局から短波で全世界に向けてエスペラントで放送を行っている。実はエスペラントのラジオ放送が実現したのは日本本土より満洲の方が早かった。すでに 1926 年と 28 年、大連放送局から、満鉄職員の尾花芳雄を講師としてエスペラント講座が放送されている。名古屋放送局からエスペラント講座が放送されたのは、1927 年と 29 年であり、同じ 1927 年から 3 年連続で東京中央放送局の講座が実現した。

満洲国成立後は、新京放送局から不定期ではあるが、ラジオ短波放送を全世界向けに行っている。41 年 9 月の住吉の放送内容が JEI 機関誌の 42 年 5 月号に再録されている。Manĉoŭkuo,Paradizo（楽園の満洲国）という題であるが、その一部を私訳を添えて示す。

“Estimataj sinjorinoj kaj sinjoroj tutmondaj. Nun mi stariĝas antaŭ la mikrofono kun kortuŝa ĝojo kaj feliĉo. Ĉu vi scias Manĉoŭkŭon,orientan paradizon？Vi ĝin trovas en la nordo de Koreujo, en la sudo de Sovetio kaj en la oriento de Ĉinujo. Kiam la tutmondaj nacioj mortbatalas reciproke, ĉi tie en nia lando, sub la plene saĝa kaj favora Imperiestra Moŝto, vivtenas sin kvin gentoj, t.e. japanoj, koreoj, manĝuroj, mongoloj, kaj ĉinoj. Ja estas nia lando tia, ke ĉiu el ili unu kun la aliaj kunfandiĝas nesciante la vortojn; konkeri aŭ invadi.....”

「全世界の皆様、今、私は心からの喜びと幸せに浸ってマイクの前に立っています。皆様は、東洋の楽園、満洲国をご存じでしょうか？それは、朝鮮の北、ソ連の南、中国の東に位置しています。全世界の民族が互いに殺し合いをしているこの時、この地では賢くも温情にあふれた皇帝陛下の下、五つの民族、即ち、日本人、朝鮮人、満洲人、蒙古人、中国

人が暮らしています。まさしくこの国では五民族が征服とか侵略という言葉を知ることなく互いに融和しているのです。…」

エスペラントの発表から50数年後、征服と侵略、その延長上に建設された傀儡国家を美化する放送が、諸民族の融和を願って創られた言語によって極東の地から全世界に流された、と知ったら地下のザメンホフも仰天するだろう。

住吉知恵子の生年や出自も、いつエスペラントを学んだかも分からないが、渡満して医師の住吉勝也と結婚、二児を儲けた。共に新京エスペラント会で活躍し，知恵子は会計を担当していた。上記の放送では、彼女の農村訪問と満人農民の描写などが続くのだが、貧しい農民に対する特権階級に属する日本人の「温かい眼差し」が、語られている。

この時代に大陸に渡って放送に関わった日本女性のエスペランティストといえば、いやでも長谷川テル[4] を想起せざるを得ないのだが、ヴェルダ・マーヨ(緑の五月)と呼ばれた長谷川テルと比較するのは、住吉にとって酷であろうか。1945年の日本の敗戦時の混乱の中、知恵子は、流れ弾に当たって亡くなったという。夫の勝也は、日本に引揚げ大阪に在住、長くエスペラント活動を続けた。

ヒューマニスト守随一

次に取り上げるのは、守随一(しゅずいはじめ)(1904-1942)である。成蹊中学在学中からエスペラントを始め、1922年旧制浦和高校に第一期生として入学、すぐにエスペラント会を設立して活躍、会長(顧問)の生物学者、島地威雄(しまじたけお)（のちに岩波文庫から『ビーグル号航海記』を翻訳・出版）とのエスペラントを通じた師弟愛は語り継がれている。東大経済学部では植民政策の矢内原忠雄に師事、卒業後、矢内原の助手を務めたのち、武蔵高校などの講師となった。その間、JEIの機関誌の編集、執筆にも携わり評議員を務める。また、彼は民俗学の柳田国男(やなぎたくにお)に師事し、東北地方の民俗のフィールドワークも行った。

守随が渡満したのは1938年であり、その動機はわからないが推測すれば、矢内原忠雄の影響があるかもしれない。矢内原は社会科学的立場から植民政策を研究、32年に満洲国を視察、帝国主義時代の普遍的法則が貫徹していることを見て取り、37年には南京事件を糾弾する言動により東大を辞任する。守随は渡満すると満鉄調査部に加わるが、当時の満鉄調査部はスタッフ2000人を擁する巨大な、いまでいうシンクタンクだった。彼が当初大連で後に新京に移って担当したのは、中国社会の特質解明をめざした「中国農村慣行調査」の一環としての土着資本の調査とされる。おそらく矢内原の下で学んだ植民地政策論を現地で確かめたいという気持ちがあったのだろう。さらに、戦時体制の強まる内地よりも、まだ満洲には自由な空間があるようにも感じられ、満鉄には東大での先輩などもいて、働きやすい環境と感じられたのかもしれない。そして満洲に渡って早速、大連のエスペラント会に加入している。

1941年8月13日、守随は先に記した住吉知恵子の一月前に、「政治組織と協和会」とい

うタイトルで放送しているが、そのエスペラント放送原稿は残っていない。また守随は、関東大震災直後の朝鮮人虐殺を扱った秋田雨雀（あきたうじゃく）の戯曲「骸骨（がいこつ）の舞跳（ぶちょう）」で発禁となったものを共訳で”Danco de Skeletoj”としてJEIから1927年に出版している。それだけに、彼が「五族協和、王道楽土」などを単純に信じていたとは考えられないが、政治的なテーマについて話す以上、何らかの配慮は必要だったろう。

異色の人材が集まった満鉄調査部

多くの転向者、旧左翼が集まっていた満鉄調査部は、関東軍憲兵隊の格好の標的になり、1942年（昭和17年）から43年にかけて起こった2度にわたる満鉄調査部事件で44名の部員が検挙され、守随もその一人だった。被検挙者たちは満洲国治安維持法違反の罪に問われるが、近現代史の研究者の間では、ほとんどが冤罪であるとされている。浦和高校、東大を通じて守随の関心はエスペラント文学にあり、後にJEIの機関誌に世界のエスペラント文学の概観を書くなど、一貫して穏健なヒューマニストであった。東大の新人会という進歩的な団体に属したこともあるとはいえ、在学中の26年には東京警備司令部の将校25名にエスペラントの講習を行ったこともあり、左翼活動の疑いで検挙されるのは全くの心外だったろう。

守随が逮捕されたのは1943年の7月と考えられ、奉天の刑務所に収監された。守随と同い年で、東大新人会と満鉄調査部の先輩にあたる石堂清倫（いしどうきよとも）は、獄中で守随に遭遇したことを、著書『わが異端の昭和史』に記している。

「ここは発疹チフスの巣であった。多くの人がそれで死んだ。チフスが猖獗（しょうけつ）をきわめたのは1943 – 44年の冬期で、44年2月の旧正月の春節明けには、私の窓下の通路を通った棺は13であった。3日の休日中にそれだけの人が死んだのである。

――中略――

夏中入浴させなかったとおなじく、運動もさせなかった。毎日運動させる規定があるが、監獄法はまったく無視されていた。最初の1年のあいだに2回だけ運動、しかも集団運動があった。ゴッホの絵にあるように、何十人もゾロゾロと円周運動をする。そのなかに守随一がいた。秤座（はかりざ）の守随の一族[5]で、おそく新人会に入ってきて、卒業後柳田国男の弟子になったと聞いていたが、久しぶりに再会した彼はまったく生気がなく、その目はまるでうつろで、はげましてもなんの反応も示さなかった。」

石堂によれば、奉天の刑務所の医者は獣医で、医薬品もなかった。チフス患者は治療も受けず放り出されるか、遺体として運び出されるかだった。守随は前者だったが、路傍で倒れていたところをエスペランティストの安部浅吉（あべあさきち）（作家、安部公房（あべこうぼう）の父）の医院へ担ぎ込まれたが治療できず、最後は新京病院で亡くなったと伝えられる。守随のこのような死の様子を伝えたのは、当時満洲でエスペラント活動をしていて、戦後1967年（昭和42年）にベトナム戦争と佐藤首相の訪米に抗議して焼身自殺を遂げた由比忠之進（ゆいちゅうのしん）（1894～1967）であるといわれる。

〈赤＞は何でもダメ

最後に有馬芳治（ありまよしはる）（1907～1995）を取り上げる。有馬は、熊本生まれ、満洲に渡り大連の南満洲高専に在学中、1928年にエスペラントを独習する。満鉄に勤務して、羅津、奉天など各地で運動に加わった。32年頃から大連のエスペラント会に属して、1935年に会の機関誌“Akacio”（アカツィーオ）を発行した。大連を代表する花、アカシアを誌名にしたのであるが、有馬は大連警察から呼び出しを受ける。事前許可なしに出版したことが咎められたのだ。誌名の読み方を聞かれ、「アカツィーオ」と答えると、アカはいかん、クロならよい、と言われたとのこと。警察機構の末端ではそのような滑稽な対応がなされていた一方で、先の平田勲に見るように、運動の核心にまで踏み込むアプローチもあった。悲運に見舞われた先の二人とは異なり、有馬は無事帰国して、北海道や埼玉でエスペラント運動のみならず、世界連邦運動、カナモジカイの活動など多方面で活動した

日本の敗戦と共に傀儡国家の満洲国は建国13年で消滅したが、岸信介に典型的に見るように、官僚や政治家、実業家たちは、満洲国で築き上げた人脈、資金力をもって戦後の保守政治を形づくったといわれる。一方、エスペラント運動は、ラジオ放送、満鉄の広報誌エスペラント版の数回発行などの試みはあったものの、上からの運動支援は起こらず、敗戦ですべてを失った人々は、裸一貫で帰国し、それぞれゆかりの地で活動を始めることになる。

注 1.「計画言語」という用語が使われるようになったのは最近であり、かつては「人工語」が一般的であった。

2. 1895年にロシア人、N.A.ボロヴコにあてた手紙
3. 大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』
4. 長谷川テル（1912～1947）は、奈良女子高等師範在学中にエスペラントを学び、中国人留学生、劉仁と結婚して37年中国に渡る。郭沫若などと協力、上海、武漢、重慶などでエスペラントを通じた反戦活動を行う。前線の日本人兵士向けの反戦放送を行い、内地で売国奴と呼ばれる。戦後、東北部のチャムスで病没
5. 守随一族は、戦国時代から甲斐地方で武田家の庇護の下、秤を作り、江戸幕府にも保護され、現代にいたるまで計量器を製造している。

（いしかわ・たかし：1942年、東京生まれ、岩手県で育ち、埼玉県在住。スウェーデン系商社などに勤務。日本エスペラント協会会員、ベルギー発行のエスペラント語情報誌 ”Monato″ の日本通信員）

引揚者となる人たちと歌―そのとき歌い、そのとき聴いた

藤川　琢馬

終戦後、引揚者や抑留帰還者が祖国の地を踏んだとき、彼らの多くにとって、‘焼け跡に流れる’「リンゴの唄」が、まず耳に入ってきたであろう。終戦後 2 か月も経たない昭和 20 年 10 月 10 日、映画「そよかぜ」が封切られ、21 年 1 月、挿入歌「リンゴの唄」のレコードが発売された。庶民が如何に娯楽に飢えていたかという状況下ではあるが、この歌に対する、内地の人々がまず感じたことは戦後の明るさと解放感であった。ところがこれとは違って私は、違和感、さらには怒りを覚えたというある満洲引揚者の証言に接し、驚いた。引揚者たちの、終戦後引揚げに至るまでの体験は、内地においても多くの人が空襲に遭い、家族と死別し、死と隣り合わせの苦難を経たという体験と、苦難においては同様であっても、それぞれに異質な面があった。両者が遭遇する時間的・空間的な差異のなかの異質な体験は、同一の歌に対して受け止め方を、全く違ったものにしたということを知ったのは、ショックであった。

そのことが心底にあってか私はふと、「引揚者と歌」という観点を着想し、引揚者となる人たちの外地居留時および引揚げ時の情景や心情、引揚げ後彼らが体験した戦後社会の場面場面に歌がどう係わったか、触れることができないだろうかと考えた。彼らが外地で日常の生活を持っていたときには、日本の流行り歌や童謡・唱歌などに親しんでいたに違いないが、終戦となって避難し、あるいは引揚げの途上にあるとき、彼らは歌を歌っただろうか。

シベリア抑留者などの場合は、その過酷な抑留生活のなかにあっても、集団が生き延びるうえで歌が一定の役割を果たしたことは、証言され記録されている。彼らの場合には、歌が生まれ伝播される日常と集団とがあった。最もよく知られている歌は「異国の丘」であり、「あゝモンテンルパの夜は更けて」である。これら抑留・収監時に生まれた歌は、まさにそのときその現場で、その当事者たちによって歌われた、抑留者の想いを表現する貴重な証言であり、歌によって人々の共通の記憶が残されている。

一方、引揚者の帰還を待ち受ける国内（内地）では、「かえり船」や「岸壁の母」が歌われた。故国への帰還に涙する男子が歌われている「かえり船」のレコードが発売された昭和 21 年 11 月の、その年末までに 500 万人を超える復員・引揚者の帰還があった。

私は、引揚者となる人たちが‘そのときに’歌い、聴き、あるいは出会った歌を証言や記録などから集成した。本稿では限られた紙面ゆえ、それらのなかから一部を抜粋して、彼らの「歌とその場面」を紹介したい。

1. その地その地で歌われた歌

昭和 21 年 9 月から 10 月にかけて、なかにし礼（本名中西禮三）氏一家は、避難地哈爾浜から貨物車、無蓋車を乗り継いで、15 日かかって葫蘆島に着く。その間礼氏は、同じ貨車に乗っていたある中年の男が月明りの下に吹く、ハーモニカの音に耳を傾けた。「青春日記」「高原の旅愁」「マロニエの木蔭」「旅の夜風」「上海の街角で」「人生の並木路」。♪泣

くな妹よ　妹よ泣くな・・・。「温和(おとな)しく聞いていた人たちは低い声で唄い出した。一人、二人、三人・・・。やがて、低く、うめくような声の大合唱となったが、それは、そのまま長く連なった、汽車全体のすすり泣きに変わっていった。私も一緒になって歌った」。

礼氏は自著において、一家が牡丹江に居住していたとき、家に客がよく集まり宴会となって、満洲に生きる人たちが望郷の想いを込めて唄ったと記し、「緑の地平線」「無情の夢」「小さな喫茶店」「野崎小唄」「大江戸出世小唄」「むらさき小唄」、そして「国境の町」を挙げた。「『国境の町』を唄うと必ず泣き出す大人たちの心の中はわからなかったが、歌の持つ力の不思議さはこの頃から感じていた」と述べている（『翔べ！わが想いよ』）。列挙されたいくつもの流行歌のなかで「国境の町」は満洲に生きた人々の愛唱歌 No.1 であろう。東海林太郎のやや生硬な歌唱は、凍てついた地の殺伐さをいっそう感じさせる。

国境の町（昭和 9 年 12 月、東海林太郎 歌）

1	2	3	4
橇(そり)の鈴さえ	故郷はなれて	明日に望みが	行方知らない
淋しくひびく	はるばる千里	ないではないが	さすらい暮らし
雪の曠野よ町の灯よ	なんで想いがとどこうぞ	頼みすくないただひとり	空も灰色また吹雪
ひとつ山越しゃ	遠きあの空	赤い夕日も	想いばかりが
他国の星が	つくづく眺め	身につまされて	ただただ燃えて
凍りつくよな	男泣きする	泣くが無理かよ	君と逢うのは
国境い	宵もある	渡り鳥	いつの日ぞ

２．満蒙開拓団・満蒙開拓青少年義勇軍で歌われた歌

児童文学評論家・上笙(かみ)一郎氏は「児童史」という観点から、昭和期の児童受難の記録として『満蒙開拓青少年義勇軍』を著している。以下、主として同書による。

満洲への農業移民政策は、満洲国吉林軍応聘武官であった東宮鉄男大尉が入植地を選び、試験移民として昭和 7 年秋に第一次 492 名、第二次 455 名が佳木斯(ジャムス)方面に送られた。彼らは在郷軍人を主体とする武装移民で、実際の現地入植は昭和 8 年 2 月に行われ、それぞれ弥栄(いやさか)村、千振(ちぶり)村をつくる。しかしこの地方は地下資源上の利権も絡んで問題も多く、中国農民の抵抗があり、第一次から百数十名、二次からも数十名の退団者が出た。その反省から移民政策は、単に貧農の次男三男を選んで行き先を決めるということでなく、開拓移民の人選が重要だとして、成人移民と並んで青少年移民政策が考えられた。昭和 13 年青少年移民の志願制度が定められ、名称が青少年義勇軍と呼称されたが、兵隊にあこがれていた当時の青少年たちを捉え、「片手に鍬、片手に銃」、あるいは「昭和の白虎隊」としてもてはやされた。昭和 13 年 1 月の第一次募集には応募者が殺到し、定員枠を拡大して 7,700 余名が採用された。しかし応募者が定員をはるかに超えたのは当初だけで、今度は小学校、青年学校の教師が部落を回り応募を説得して歩き、都道府県や各学校に数が割り当てられるようになる。

青少年義勇軍は茨城県内原で、軍隊式組織により 3 か月間の訓練を受け、満洲の現地訓練所に赴く。内原訓練所における義勇軍送出者名簿によると、昭和 13 年の 22,000 人から、昭和 20 年までに計 86,530 人の送出があった。これは、満洲開拓移民送出総数の 3 割に相

当する。3年間の訓練を終えると、建国農民としてどこかの開拓地へ入植することになる。上氏の計算によると、64,500人が義勇軍開拓団となった(別数値あり)。

義勇軍の宣伝は、義勇軍の歌を懸賞募集し、ラジオで放送するなどして行われた。応募した一等当選は「われ等は若き義勇軍」で、義勇軍生活において、行軍や訓練の際によく合唱された。当選歌のほか、満洲開拓を主題とした流行歌曲は数多い。私の手元には満洲移住協会編『満洲開拓歌曲集』第一巻（山田耕筰監修、白眉出版社、昭和15年8月）があり、何曲も記載されている。また、レコード会社による満洲開拓を鼓舞する歌も多数あったであろう。当時の国策がいかに華々しく喧伝されていたかが推量される。

われ等は若き義勇軍（昭和13年9月、徳山璉・東京リーダー・ターフェル・フェライン 歌）

1 われ等は若き義勇軍	2 われ等は若き義勇軍	3 われ等は若き義勇軍	4 われ等は若き義勇軍
祖国のためぞ鍬とりて	祖先の気魄享けつぎて	秋こそ来たれ満蒙に	力ぞ愛ぞ王道の
万里涯なき野に立たむ	勇躍夙に先がけむ	第二の祖国うち樹てむ	旗ひるがえし行くところ
いま開拓の意気高し	打ち振る腕に響きあり	輝く緑空をうつ	見よ共栄の光あり
いま開拓の意気高し	打ち振る腕に響きあり	輝く緑空をうつ	見よ共栄の光あり

佳木斯から南南東およそ100キロ、牡丹江から東北におよそ250キロの鉄道沿線に、千振および弥栄村がある。千振の東方奥地の大醤岳に千振開拓団の分村日高見開拓団があり、さらに奥地の七道溝に新生日高見義勇隊開拓団があった。昭和20年8月9日、日高見在満国民小学校の校長だった川端秀樹さんに在郷軍人分会長から緊急の連絡が入る。ソ連が参戦し、午前零時を期して総攻撃が始まるので、45歳までの兵籍にある在郷軍人全員に防衛応召がかかり、牡丹江兵事部に速やかに出頭せよとのことであった。このことが中国人に知れたら、女子どもしか残らない開拓団はたちまち襲われる。日高見開拓団本部に翌朝10時集合とされて、その時刻、新生日高見義勇隊開拓団も32名全員が集まり、真夏の日差しを受けながら歩きなれた道ではあったが、強行軍で千振駅前広場に到着したところ、沿線の大八州、八虎力、七虎力各開拓団の応召者やそのほかの応召者がいて、駅舎が夕闇に包まれたころやっとカランコロンと鐘を鳴らした列車が入ってきた。後からわかったことだが、これが圖佳線最後の南下列車で、応召者全員は無蓋の貨物列車に詰め込まれた。ところがこの列車の後半分は客車で、佳木斯からの避難で満鉄の社員家族や軍の家族、官庁街の家族が荷物を通路にまで積み込んで乗っていた。車中で応召者たちは誰もが眠っているようであり、眠っていないようでもあったが、気がついてみるといつの間にか列車は動かなくなり、薄暗い電灯の光に駅の表示が「勃利」と読め、千振からいくらも進んでいなかった。夜が明けてみると、避難列車の客車が一輛もなくなっていて、一足先に安全地帯に逃れていったのだった。

8月12日、やっと林口駅を出発し牡丹江駅が近くなったが、牡丹江の駅舎は空襲で壊されていた。駅前大通りに人影はなく、駅構内だけが避難民の群れでごった返していた。再び輸送司令部からの伝令が来て、応召者は哈爾濱市に行って、そこの防衛軍に加わる、とのことだった。超満員の哈爾濱行き最後の避難列車に乗った。屋根の上だった。それでも、悪臭とスシ詰めの有蓋車の中に比べるとどれほどよいかわからない。炎を背に、列車は闇

の中に向けて出発した。義勇隊の開拓団員たちは、このあと再び口にすることはあるまい「満洲開拓の歌」を力いっぱい歌った。横道河子の長いトンネルの中でも、若い団員たちは煙にむせびながら歌った。13 日の朝、汽車は雨の中を哈爾濱の香坊駅に着いた（『満州と日本人』第 3 号）。

満洲開拓の歌（昭和 14 年、徳山璉/中村淑子/合唱団 歌）

1 大陸色に焼きつけた
五體(ごたい)がつちり先駆者の
誇りに燃えて陽(ひ)があがる
ひろい舞臺(ぶたい)だこの朝だ
やるぞ何處(どこ)まで根かぎり

2 花嫁部隊今日は早(はや)や
モンペ凛々しい野良仕度(のらじたく)
駒よいななけ雲千里(くもせんり)
骨を埋(うず)める覺悟(かくご)なりや
住めば都よ北の空

3 日満むすぶ日の丸と
五色(ごしき)の旗を組立(くみた)てて
門(かど)もうららな村景色(むらげしき)
銃(じゅう)と氣(き)負(お)った開拓の
戦士われらが氣は彈(はず)む

4 せまい天地であがくより
胸もすくよな 大原野(だいげんや)
拓(ひら)く男児(おのこ)のこゝろ意氣(いき)
見ろよ日毎(ひごと)に伸びてゆく
第二の祖國 わが樂土(らくど)

敗戦直前の在満日本人開拓民はおよそ 27 万人で、敗戦時の在満日本人 155 万人の 17%に相当する。引揚げまでに全体で 176,000 人が死亡したとされているが、うち開拓移民は半数に近い 78,500 人が死亡している。建国移民、あるいは国境の防衛力として国策に乗り、辺境の地に散った多くの開拓民は、いったん敗戦が決定的になると関東軍に見放され、国境を越え侵攻してきたソ連軍の餌食となり、また暴民の襲撃に遭い、悲劇が繰り返された。国内では官民一体となって理想郷とはやし立てられたが、開拓地の生活の現状と終戦時の悲劇を思うと、これらの歌の響きに悲しみを禁じ得ない。

東京・多摩市の連光寺（最寄り駅：京王線聖蹟桜ケ丘駅）に立てられた満洲開拓殉難者慰霊碑を前にして、昭和 50 年 5 月に執り行われた第 13 回慰霊祭において、前記の川端さんは開拓団引揚者の全国組織から表彰を受けた。ソ連侵攻のさなか、東辺に取り残され窮地にあえいでいた南下する開拓団の脱出・救済に身命を賭して尽瘁(じんすい)したことによる。

満蒙開拓義勇軍として 3 年間の訓練を終え、義勇軍開拓団となった元隊員に聞き取りを行った記録がある（『人びとはなぜ満洲へ渡ったのか 長野県の社会運動と移民』、小林信介著、聴き取りは著者により 2002.7.7 石川県辰口町で）。元隊員は石川県から送り出された宝和義勇軍開拓団員である。終戦直前、ソ連軍の侵攻に始まる開拓団員の逃避行を詠み、元隊員が作詞・作曲した「鎮魂歌」である。全 5 連のうちの 3 連が記載されている。「風」に追われ、死の影におびえながら逃げる姿が描かれ、「風」とはソ連軍を指す比喩だと作詞者は語る。

鎮魂歌

1 蘭の花咲く 宝和の里に
王道楽土の 夢破れ
明日は何処の 寝ぐらやら

2 風に追われて 完達嶺下(ほうだつれいか)
行方定めぬ 旅の空
遥か彼方は 大茄子(おおなす)か

3 行く手当ない 荒野の果てに
死ぬも生きるも 二人連れ
明日は彼の岸 渡ろうか

3．満州の子どもたちの満州唱歌

満洲の小学校の同窓会では、校歌とともに必ずといってよいほど「満洲唱歌」が歌われ

る。以下、喜多由浩著『満洲唱歌よ、もう一度』から引用する。

「・・・大正の終わりから昭和にかけて・・・百曲を超える満洲唱歌が作られた。満洲っ子はみんな、満洲唱歌を歌って育ったのである。なぜ、満洲だけの唱歌が作られたのか？それは、内地と満洲の風土があまりにも違ったからである。・・・満洲の教育者たちは、『子どもたちが、満洲の自然や風俗に親しみを感じられるように』との願いを込めて満洲唱歌を作ったのだ。・・・満洲唱歌は、満洲で育った人の心の中に、懐かしい思い出や風景とともに深く刻みこまれている。異郷に暮らす日本人として、『満洲唱歌が心のよりどころだった』という人もいる。そして、故郷を失ってしまった今では、満洲唱歌に寄せる思いは、いっそう強い」。

元日銀副総裁藤原作弥さんのご一家は、教師である父君の仕事の関係で、昭和 17 年新潟から北朝鮮の清津（せいしん）に、そして昭和 19 年春、ソ連国境に近い興安街に移り住んだ。終戦間近い昭和 20 年 8 月 10 日、ソ連軍侵攻の報に接して、当時 8 歳だった藤原さんは父親の軍官学校職員家族とともに、女・子ども・年寄りが中心の総勢 150 人の集団となって、ソ連国境に近い興安街を汽車で脱出する。そのときある生徒が無蓋車の上で、興安嶺の山々と草原に別れを告げるため歌を歌おうと呼びかけ、「♪兎追いしかの山～」と歌いかけた。そのとき誰かが、「それは日本の歌だ。ボクたち満洲の歌を歌おう」と提案し、「♪寒い北風吹いたとて　おじけるような子供じゃないよ　満洲育ちのわたしたち」と、満洲唱歌「わたしたち」を歌い、・・・次から次へ満洲の歌を歌った。・・・この歌は学校の往き帰りによく合唱した歌で、「君が代」より大切な愛唱歌だった（『満洲、少国民の戦記』）。

藤原さんは、「♪柳の棉の飛ぶ頃は　黄色いほこりもかすみます　乗れ乗れ小さなロバの上　夕日の古塔を見に行こか」（「やなぎの春」）を、また「♪風の姿（すがた）はおもしろい　雪の原のは銀の風　砂の岡のは黄（き）いな風　桃の里では赤い風　草の山では青い風」（「風」）をと憶えている歌詞を記し、「夕日」（正確には「赤い夕日」）も暗誦（そら）んじていると記す。

わたしたち（昭和 8 年改訂『尋常小学校第 3 学年用』）

1	2	3	4
寒い北風吹いたとて	それに雪さへ降ったとて	風の吹く日は外に出て	雪の降る日も外に出て
おぢけるやうな	たまげるやうな	リンクをまはろよ、	みんなでしませう、
子どもぢゃないよ	子どもぢゃないよ	スケート遊び	雪投げしませう
まんしうそだちの	まんしうそだちの	まんしうそだちの	まんしうそだちの
わたしたち	わたしたち	わたしたち	わたしたち

「わたしたち」は、“満洲っ子”であることを意識させる特別な歌で、内地っ子には通用しない（させない）。この歌を通じて、満洲っ子同士は互いに心が通じ合う。「わたしたち」には北風、雪、リンク、スケート遊びなど、満洲ならではの歌詞があるだけでなく、直接的な表現「まんしうそだちのわたしたち」があって、満洲っ子だけの歌である。外地でよく親しまれた歌は、引き揚げたあと思い出の深い歌となり、共通の思い出の歌となる。「わたしたち」などの満洲唱歌は、引揚げ後「満洲っ子をつなぐ歌」となった。

『満州唱歌よ、もう一度』では、元岩波ホール総支配人高野悦子氏（1930－2013）ほか何人かの満洲っ子たちにインタビューをしている。高野氏は、「南満本線」（♪春は南から杏（あんず）

の花で　冬は北から氷柱で知らす　詩の列車が　からゝん鐘を　鳴らして走るよ　南満本線・・・）を聞くと、懐かしい満洲の大地が目に浮かぶといい、「わたしたち」「たかあしをどり」「こな雪」―いったいどこで習ったのやら・・・でもいつの間にか、みんなが知っていましたね、「娘々祭」も懐かしい歌のひとつだという。そのほか同書のインタビューでは、「山ざし売り」「ペチカ」「居庸関の早春」「蒙古の旅」「星が浦」「アキ」「子羊」「梨の花」「土まんぢゅう」「望小山」「轎車」「やなぎの春」などが挙げられている。これらの中から「娘々祭」（女学生版）を次に記す。

娘々祭（女学生版、大連音楽学校『満洲新中等唱歌』）

1　楡の若葉の　風かをる
窓に衣ぬふ　小娘が
針の手しばし　やすめつゝ
指折りて見ぬ　幾日にて
娘々祭　來るかと

2　畑の地ならし　高粱の
種播き終へし　里人が
晴着装ひて　集ふさま
胸に忽がきて　頬染めぬ
娘々祭　はや近し

４．わらべうた（遊び唄）

私の２歳上の姉の高校における同級生、水橋晶子さんに満洲時代に親しんだ歌をお訊きしたところ、その一つに「♪いちれつらんぱん　破裂して　日露戦争　始まった～」という数え歌を連絡してくださった。「いちれつらんぱん」は「一列談判」で（異説あり）、手毬唄、毬つき唄、あるいはお手玉唄として、1950 年代まで唄われていたことがわかった。子どもの遊び唄に戦後まで、日露戦争勝利の余波が残っていたのは面白い。

一列談判（明治 38 年頃発生）

いちれつらんぱん　破裂して

一列か一月か、しかし談判が決裂したのは２月。一裂という説もある。らんぱんは談判がなまったもの。

日露戦争　始まった
さっさと逃げるは　ロシヤの兵
死んでも（死ぬまで）尽くすは　日本の兵

日清戦争の際死んでもラッパを離さなかったラッパ卒木口小平の話は修身の教科書に載り、広く知られていた。

五万の兵を　引き連れて
六人残して　皆殺し
七月八日の　戦いに（は）

五から七までは単に数字合わせ。

哈爾濱までも　攻め込んで（寄って）

実際は奉天まで。奉天大会戦では日露両軍 60 万人が激突した。日本軍は限界であったがロシア軍は哈爾浜に撤退、クロパトキンは罷免された。

クロパ（ポ）トキンの　首を取り

東郷元帥（大将）　万々歳（十でとうとう大勝利）　当時は大将。海軍大将が出てくるのはおかしいが、時とともに変わったのであろう。

私は、私の年齢前後の人が集う、地元の郷土史関係のある小さな集まりでこの唄を話題に出したところ、歌詞にバリエーションはあったが、みなさん知っていた。つまり日本中の子どもたちが唄って遊び、満洲の子どもたちも同じ遊びに興じていたのであり、児童の遊び文化やその伝播の観点から興味あることである。

ほかにも「乃木大将」（♪日本の　乃木さんが～）や「日清戦争」（♪おじゃみ～）などの尻取り唄、数え歌がよく唄われた。わらべうたに懐かしく思われる方も多いだろう。

５．引揚船内や上陸地で出会った歌

昭和 21 年 10 月、当時国民学校 5 年の三木卓氏（1935～）はその自伝小説で、引揚船における演芸会について記述する（『裸足と貝殻』）。

「葫蘆島から博多に入港して、1 週間経っても投錨したままで上陸させられず、その間船員たちの音頭取りで歌謡大会が催されることになった。船員によるにわか楽団が演奏したのは「鈴懸の径」であった。次いで、日本では流行っている歌として「どうじゃね。元気かね」と怒鳴ったというが、これが歌い出しだという。最後に「ズンドコ節」で、聴衆も一緒になって、リフレインを唱和した」。

「主人公豊三少年は「鈴懸の径」は好きな歌だったが、「どうじゃね元気かね」が流行っているようでは日本にもあまり期待はできそうにない、と思う。マドロス楽団が引っ込み、はじめはためらっていた聴衆が一人、また一人と出てきて、芸を披露した。「緑の地平線」「並木の雨」「二人は若い」「男の純情」「旅姿三人男」、広沢虎造「石松三十石船」。歌謡大会は毎晩の行事になった」。

「昭和 21 年 10 月 18 日の昼前、いよいよ上陸。豊三少年の一家は、30 メートルほどの高さのある舷側から、船腹に沿って斜めに取り付けられている鋼鉄のタラップを降りてゆく。小児まひで左脚が不自由な豊三は、船員におぶらされて下船する。そして、粗末な木造平屋建ての宿舎（収容所）に入ると、大きな筆の字で、〈引揚者のみなさま、お帰りなさい。長い間ごくらうさまでした。上陸最初の一夜をここでゆつくりお過ごし下さい〉と書かれた模造紙が貼られていた。さらに行くと、また大判の模造紙に歌の歌詞が書かれていた。「故郷の廃家」の一番であった」。

故郷の廃家（明治 40 年 8 月、『中等教育唱歌集』）

1 幾年(いくとせ)ふるさと　來てみれば
咲く花鳴(な)く鳥　そよぐ風
門辺(かどべ)の小川(をがわ)の　ささやきも
なれにし昔(むかし)に　変(かは)らねど
あれたる　我家(わがいへ)に
住む人　絶えてなく

2 昔を語るか　そよぐ風
昔をうつすか　澄(す)める水
朝夕(あさゆふ)かたみに　手をとりて
遊びし友人(ともびと)　いまいずこ
さびしき　故郷(ふるさと)や
さびしき　我家(わがいへ)や

「豊三はその歌詞をいくども繰り返し読み、感動が体のすみずみにまでひろがっていくのを覚えた。・・・中国の広野をさまよう旅をしていたあいだ、一度も出会わなかったやさしさだった」。

安東会の梶浦敦さんは、終戦のとき安東中学校1年であった。その年の8月は例年と違って、学校はあったがまともな授業はなく、学校が休みとなってからは毎日ぶらぶら歩きまわって過ごした、その後煙草売りで大分稼げるようになったが、21年10月6日一家の引揚げの日となった。六道溝の操車場が集合場所となり、荷物検査の後江岸に移動し、指定された船に乗った。岸壁の残留者と互いに声をからして「さよならー」と一生懸命手を振ったが、船はいっこうに出航する気配がなく、江岸で幾夜か過ごすことになった。中秋の月がきれいな満月の夜、男の人の歌う声が聞こえてきた。初めて聴く歌だったが、「誰か故郷を想わざる」だけはよく解ったという。しわぶきひとつなく、静かにみんなが故郷を想った（『ありなれ』第61号）。

誰(たれ)か故郷を想はざる（昭和15年2月、霧島昇 歌）

1 花積む野辺に　日は落ちて	2 ひとりの姉が　嫁ぐ夜に	3 都に雨の　降る夜は
みんなで肩を　組みながら	小川の岸で　さみしさに	涙に胸も　しめりがち
唄をうたった　帰りみち	泣いた涙の　なつかしさ	遠く呼ぶのは　誰の声
幼馴染(おさなななじみ)の　あの友この友	幼馴染(おさなななじみ)の　あの山この川	幼馴染(おさなななじみ)の　あの夢この夢
あゝ誰か故郷を　想はざる	あゝ誰か故郷を　想はざる	あゝ誰か故郷を　想はざる

6．戦後世相と替歌

「歌は世につれ世は歌につれ」というように、歌はそのときどきの世相の反映であり、歌の流行には必ず社会的な背景がある。世相の推移と関連して、流行歌もその都度、形を変えていく。一方替歌は、わが国特有ではないにしても、日本の伝統的唄文化の所産であった。都都逸など歌詞の定型性は替歌創出の基盤そのものであり、これら伝統的音曲のみならず、明治期以降の軍歌、唱歌、演歌に対して作られた替歌は、庶民・大衆の感覚と正直な想いを赤裸々に表現する。替歌は、庶民が生み出した庶民自身の歌で、作品のレベル（パロディ・風刺）としては稚拙かもしれないが、一般の流行歌より、いっそう直接的に、庶民・大衆の心情をうかがい知ることができる（『占領期生活世相誌資料Ⅲ』）。

この『生活世相誌資料』は、「異国の丘」ほかの、替歌が掲載されている資料を紹介している。替歌の対象にされるということは、その曲の流行の度合いを測る、ひとつの指標でもある。その点で「異国の丘」の存在感は大きく、引揚者も含めて当時の大衆の心情をうかがい知ることができるのは興味深い。替歌が生まれてくる陰には、ヒット曲を歌った満たされない大衆がいた。戦中においては、抑圧された大衆が軍歌を皮肉り、戦後においては、窮乏した庶民が流行歌を餌にした。それに対して、歌が氾濫し短命になった現在は、大衆がかつてのような精神的・物質的状況になく、大衆のエネルギーは感じられない。替歌を生む社会的素地が変わってしまったのは幸せなことではあるが、当時の社会が懐かしく思えるのは、単なる懐古趣味によるのではなく、庶民が等しく生活に困窮していた共通

の社会環境にあったなかで、共感と連帯があったのに対し、現在はそれらが失われてしまったと思うからで、寂しい。

かつて、大正12年関東大震災の直後、演歌師たちは焼け残った印刷所で刷った唄本を手に、焦土と化した東京下町の街角に立ち、急遽作られた「大震災の歌」や「復興節」を唄った。人々は食の飢えもあるが音にも飢えていて、粗末な唄本に飛びつき、「復興節」はたちまち人々に唄われたという。この唄は焦土風景やバラック生活を唄ったものだが、食料の配給（無料）の前には奥さんも嬶（かかあ）もなく一視同仁、生活の格差をなくした平等感に一種の和みさえ感じたという（『演歌の明治大正史』）。

被災者、引揚者が置かれた戦後社会の世相は、関東大震災時と一脈通じるところがあったであろう、流行（はや）り歌に飛びつき、たちまち替歌を作った。以下の元歌は戦後流行った歌で、引揚者たちはみんな歌った。その替歌のいくつかを転載する。

「リンゴの唄」替歌

赤いリンゴの　露店の前で
だまって見ている　青い顔
リンゴの値段は　知らないけれど
リンゴのうまさは　よくわかる
リンゴ高いや　高いやリンゴ

（『流行歌でつづる日本現代史』）

「異国の丘」替歌１

夫の歌える

今日も暮れゆく　かまどの前に
妻よ辛かろ、せつなかろ
我慢だ待ってろ　会社の月給
もらう日が来る　いつか来る

妻の歌える

今日もきのうも　配給はあれど
買うに買われぬ　空財布
泣いて笑って　おかゆで堪えりゃ
足はふらつく　目はかすむ

（『読切講談世界』第二巻10号）

「異国の丘」替歌２　別居の唄

１ 今日も暮れゆく　二畳の部屋に
妻よ辛かろ　切なかろ
辛抱してくれ　家さえ掴みや
呼べる日が来る　時が来る

２ 今日も更けゆく　会社の寮に
又もそなたの　ことばかり
泣いて笑って　一つの膳に
向かうその日を　夢に待つ

（『キング』第25巻8号）

「異国の歌」替歌３　異国のウオツカ

１ 今日もくらった
異国のウオツカに
友よつぶれてせつなかろ
かゞんで吐いてる背中をなでりや
帰れ帰れとポリが来る

２ 今日も過した
異国のウオツカに
女房おもへば身もちゞむ
泣いて誓つて土産見せりや
だます手もある術もある

３ 今日もあをつた
異国のウオツカに
重い足どり目が赤い
倒れちやならない吾が家の床に
たどり着くまでもぐるまで

（『小説倶楽部』絢爛豪華特別号）

「夜のプラットホーム」替歌　朝のプラットホーム

1　重いリユックの　底ふかく
何んですか　米でしよう
プラットホームの　一斉検査
さよなら　さよなら
泣き泣き帰る

2　ひとに推(ママ)されて　突出され
行つてしまつた　満員電車
ハット気がつき　ポケット見れば
さよなら　さよなら
紙入れはカラ

(『女性の友』第二巻三号)

「君待てども」替歌

君待てども　君待てども　まだ來ぬ宵　わびしき宵　窓邊のベット　二つの枕　眞白いシーツ
油切つたる　その面影　酒臭い口(くち)　思ひ出す　待ちませう　待ちませう　わたしは一人

(『小説倶楽部』絢爛豪華特別号)

「ハバロフスク小唄」替歌　屋台小唄

1　妻の顔ラヽラ妻の顔　ラヽラ妻の顔
屋台のコップの　その底に
唯一つ気にかかる　云訳に
悩むわが家の　窓明かり

2　また来てねラヽラまた来てね　ラヽラまた来てね
甘いささやき　ふらふらと
今宵また飲みに行く　屋台店
可愛い彼女は　カストリマダム

(『実話と小説』第二巻 10 号)

これら元歌のなかには「抑留者」や「引揚者を待つ身」を示すものがある。彼らの存在が社会に大きな影響を及ぼしていて、世相の形成に与っていたことがわかる。

◆おわりに

「引揚者と歌」という、ふつうには脈絡があるとは思えない、思いつきの着想から筆を起し、研究資料『引揚者と歌の場面』として集成した。これには本稿のほかシベリア抑留者の歌、ある中国残留一家の歌、パラオ入植者が持ち帰った歌、同郷の歌など数多くの曲を収載した。引揚者となる人たちが外地に居留していたとき、また終戦により、余儀なくされた抑留・収監や逃避行、避難生活で、あるいは引揚船の中で、そして日本に帰還したあとの戦後社会のなかで、歌い、聴き、出会い、係わった数々の歌とそれぞれの場面を通じて、人々の思いや、当時の社会の実相を振り返って見ることができないかと思ったのである。流行歌、唱歌、国歌・建国歌、校歌、愛唱歌、わらべうたなどがある。これらの歌をご覧いただいて、関連して歌が思い出されたり、当時の思い出が浮かばれれば幸いである。また、「引揚げ」というわが国の記憶を歌とその場面から、一端でも記録することができたなら幸いである。

本稿では割愛したが、原著では可能な限り楽譜および音源をそろえるよう努めた。機会があればこれらの歌をお聴きいただきたいと思っている。なお、みなさまから関連する歌の情報をお寄せいただければうれしいことである。

（ふじかわ・たくま、1939 年奉天生まれ、父は終戦時北安省依安県副県長、1946 年引揚げ。日清製油（現日清オイリオ）に勤務し油脂の研究開発に従事、退職後「うた文化」の研究を志し、その一環として 2018 年資料集『引揚者と歌の場面』を集成、現在一般社団法人国際善隣協会常任監事）

「方正日本人公墓と満蒙開拓団そして日中戦争を勉強する資料」の作成にあたって

岡邑　洋介

知られず、知らされずきた満州

「方正日本人公墓と満蒙開拓団そして日中戦争を勉強する資料」というのを作成しました。

きっかけは、2018 年 10 月 4 日から 8 日まで私の所属する関西紫金草合唱団をはじめ、全国の有志 42 人でハルビン市を訪問しました。2 日目、黒竜江省歌舞劇院音楽庁の大ホールで地元の合唱団と約２時間ほど合唱交流しました。（写真）その様子は当日「42 人の反戦人士『紫金草物語』を歌い反戦を誓う」と「ハルビン日報」電子版で数ページにわたり紹介されました。

翌 7 日、バス、タクシーを乗り継いで日中友好園林内にある方正日本人公墓を参拝しました。誰もいない静かな林の中でした。花束をお供えし、参加者一同お墓に手を合わせ帰国しました。

黒竜江省歌舞劇院音楽庁にて地元合唱団のみなさんと

翌年の 2019 年になって当、合唱団の千秋昌弘が「方正日本人公墓」に関する歌を次々発表、団の中で「方正公墓」の話し合いが多くなりました。子供の頃、よく「満州」という言葉を聞きました。残留孤児がテレビや新聞を賑わしていた頃もありました。しかし私自身あまり満州に関心がありませんでした。

そうした中で、方正友好交流の会の大類善啓（おおるい　よしひろ）（当時、事務局長、現

在は理事長）氏の「日本人公墓を知ってますか」朝日新聞 07 年 10 月 10 日付けを読み衝撃を受けました。

こんなことがあったのか、これは調べて見ないといけない、勉強しなければならないと思い、次々、本を買い込みました。同時にこれは、自分だけの知識だけに終わらせてはならないと思い、一項目ごとを 1～2 頁にまとめ合唱団の仲間約５０人ほどに送信しました。30 週を越えてメールで配信しました。配信しているうちに、数人の方から、「こんな本もあるで」と新たな資料が送られてくる一方で、毎週配信している中身に対し「これは本にせんとあかん」と言われ、まとめました。「方正日本人公墓」を歌う人に無償配布しました。

子どもの時 大人の話は戦争

私は大阪生まれで 3 才の時、空襲に見舞われました。家を焼かれ、父はそのまま行方不明となり、母はやむなく私を連れて石川県の親類を頼って避難しました。何軒かあった親類の家を転々としましたが､しょせんは厄介者、そのうち行くところがなくなり、あてもなく駅のベンチで座っていたところを町の隠居さんに拾ってもらい、数年の間厄介になりました。

小学校５年生の時、大阪に戻ってきました。戦災者引揚げ住宅でそれまで離れ離れで過ごしていた兄と一緒に住むことになりました。

石川県でも大阪でもそうでしたが、大人の男が集まってお酒を飲むと、出てくるのは必ず、戦争の話でした。それも殆ど中国で「満州」という言葉も良く聞きました。大人の話は悪いことをしながら、それを自慢話として話していました。戦争が終わった後も長い間、朝鮮人や中国人を「チョウセン、チャンコロ」などと蔑み、いじめの対象でした。今もそうした風潮は根強く残っているように思います。

あってはならない戦争

大阪に帰る年に先生が授業時間中に「家にラジオのある人」「自転車のある人」と聞きました。手を挙げたのは一人で同じ人でした。その頃は学校では頭から DDT を吹き付けられ、全員がお腹に寄生虫を飼っていました。私は十二指腸虫と回虫でした。２日ほど絶食で飲むのは虫下しと水だけ、そうでなくとも毎日食べるものがない日が続いているなかでの絶食で目が回りました。

中学２年生の時、林間学校があり、みんな出かけて行きました。私はお金がなく行けませんでした。ふてくされていました。その時、女の先生でしたが私の両肩を掴んで「人間の一生でする苦労はこれだけや」と両手で丸をつくり「君は、今、その苦労をしているんやから負けたらあかん」と励ましてもらったことを今も覚えています。

私たちの年代で苦労を知らない人は稀だと思いますが、満州に行かれた人は特別、筆舌に表しがたい苦労をされたと思います。日本でさんざん苦労をし、現地で苦労し、あげくの果てに敗戦で命掛けの逃避行、ようやく日本に帰ったら帰ったで新たな苦労、何故ここまで苦労をせねばならないのか。

ひとたび戦争が起きるとどういうことになるのか、戦争で負けるとはどういうことなの

か、多くの人に知ってもらわねばと思います。

資料の中身について

先の戦争では全世界で６０００万人～８４５０万人

日本では２６２万人～３１２万人が犠牲となりました。

広島、長崎では一瞬のうちに２１万人が犠牲となり

沖縄選では米軍合わせて２０万人が犠牲となりました。

一方、日本人にあまり知られていない歴史、知らそうとされていない歴史に満州があります。

ここでは広島、長崎、沖縄をしのぐ２４万５０００人が犠牲になり、特に国策として送り込まれた満蒙開拓団は送り込まれた２７万人のうち８万人が非業の死をとげました。

中身は方正日本人公墓を中心に、満蒙開拓団、逃避行中に起きた麻山事件やソ連兵への性接待など数々の事件、そしてその背景となった日中戦争を A4 で９０頁ほどにまとめました。

私たちは「うたごえの合唱団」です。スローガンは「うたごえは平和の力」です。満州であったことを多くの人に知らせるとともに、平和を願う一翼として今後もがんばって行きたいと思います。

（おかむら・ようすけ：関西紫金草合唱団 事務局長の他、安保破棄緒要求貫徹大阪実行委員会、原発ゼロの会、大阪のうたごえ協議会の相談役など務めて多彩に活動する）

方正日本人公墓
満蒙開拓団
そして日中戦争

を勉強する資料－2

先の戦争では、全世界で6000 万人～8450万人
日本では262万人～312万人が犠牲となりました。
　広島、長崎では一瞬のうちに21万人が犠牲となり、
　沖縄戦では米軍合わせ20万人が犠牲となりました。

一方、日本人にあまり知られていない歴史、知らそうとされていない歴史に満州があります。
ここでは広島、長崎、沖縄をしのぐ24万5000人が犠牲になり、特に国策として送り込まれた満蒙開拓団は送り込まれた27万人のうち8万人が非業の死をとげました。

編集　2020年　5月　岡邑洋介

満洲で育った私、夢は方正訪問だ

―ぜひ、中国人と対局したい！―

長尾 寿

コロナ騒動に思う

今、日本では、新型コロナウイルスから命と暮らしを護るということで総理大臣談話により突然、日本中の学校が休校となり子どもたちは行き場を失い、親は長い春休みの対応に苦慮しています。そのため低学年の小学生は学校で一時預かりをし、児童クラブ（学童保育）もそのあとの受け入れに大変です。

学習指導要領に定められている授業時間数は大幅に削減されてしまい、その補習は各学校任せで具体的計画はありません。余暇を持て余した子どもがゲーム機で遊びに興じスマホを持っている子が増えています。

子どもの学力は学習塾があるから大丈夫というのであれば、親の経済力がその子の学力となり次の世代に受け継がれることになり公教育として学校の果たす教育の平等という大義が失われていくことになります。新型コロナウイルス対策だからと全国一律に休校するのはいかがなものかと思います。

数少ない国立学校や独自の建学理念を有する私立学校は別として、市町村立である日本の学校の設置者は文科相の指示に従い一斉休校となりましたが、地方自治法と教育基本法の精神に照らした独自の対応があったのではないでしょうか。“そこのけそこのけコロナが通る”とばかりコロナウイルス撲滅という大義のため各論がおろそかになっている現状を憂います。「WHO」が勧告で述べているように、心配しなければいけないのは子どもよりもお年寄りへ目を向けるべきではないでしょうか。

置き去りにされた高齢者問題

この問題に対し３月２日、蓮舫議員が参議院予算委員会で安倍総理に質問していた NHK のＴＶ中継は、時系列で学校の休校が安倍総理の独断であったことがよく分かりました。

保育所や児童クラブは学校よりも感染リスクが低いという疫学的根拠はありません。「学校（幼稚園）と１１時間開所している保育所とどちらの方がコロナウイルスに感染するリスクが高いのか、参考人として国会に招かれた専門家の意見は、どちらが高いのか分からないという見解を基に、「どうして学校だけを休校にし、保育所や児童クラブは休園にしなかったのか」と質問をしたのです。

本当に心配なのは子どもではなくお年寄りなのに高齢者への対策が不十分だという蓮舫議員の発言中、にわかに会場がざわめき紛糾しＴＶを観ていた私は何が原因で混乱してい

るのか分かりませんでしたが、翌朝の新聞記事で与党議員の「高齢者は歩かないからいい」という発言が事の発端であったことを知り、驚きを禁じえませんでした。

新型コロナウイルスからの感染予防のため老人が集う諸々の集会施設が自粛という名の閉鎖に追い込まれ、施設や居場所が次々となくなっている事実は高齢者の移動を前提としているからで、老人は歩かない存在ではないことを示すとともに先の発言が単なるヤジでしかなかった軽率さを物語っていました。

一方、自己防衛の意識から市民によるマスクの買い占めがはじまり、店頭からマスクが消えるという異常事態となりマスクのインターネット販売や転売を禁じる規制がなされました。一方、コロナウイルスからの感染予防のため野球や相撲をはじめスポーツや文化、芸術の分野でも観客のいない競技や発表会となり、校園の卒業式、入学式、入社式は中止や簡素化となりこのままでは新型コロナウイルス収束の目途が立たず生産・物流という世界経済の混乱と停滞が発生し、とうとうオリンピック・パラリンピック東京大会の延期が決まりました。

「満洲」で育った私

いささか前置きが長くなりましたが、何故､方正訪問なのか、何故、中国人との対局なのか表題についてふれなければなりません。

私は中国の東北部が「満州国」と呼ばれたころ黒竜江省黒河にいました。１９４５年８月当時、黒河の在満国民学校１年生でした。

「満州国」に住みながら日本人は誰一人「満州国」の国籍を取らず私たち子どもは日本人学校で内地と同じ教科書で勉強し中国語は学びませんでした。（編集部注：「満州国」には国籍法がなかった）ちなみに、今の学習は平仮名から始まりますが昔は片仮名で始まり、１年生の国語教科書の始まりは“アカイ　アカイ　アサヒ　アサヒ”でした。

自宅の暖房はオンドルでしたが学校はスチーム暖房で快適でした。冬場になると整備された運動場は、回を重ねた散水により広いスケートリンクに変わりスケートを楽しむことが出来ました。私の履いた靴は演技のフイギユアでなく歯が薄く長いスピードスケート用の靴で転ぶと、先端が鋭くとがっているため恐ろしかったがそのスケート靴を首にぶら下げて登校するのが自慢でした。今の様に学校給食はありませんが各自持参の弁当をスチームの上に並べ温かい昼食を頂いていました。

戦争ごっこで明け暮れた日々

黒竜江(アムール川)はソビエト連邦と満州国の国境をなしオホーツク海にいたる大河で、その上流に位置する黒河という町は“北国の真珠”とよばれる美しい町でした。その対岸にはブラゴエチェンスクという古風な町があり、肉眼でその町を見ながらの生活で短い夏

の一夜、日本の打ち上げる花火はブラゴエチェンスクの夜空も彩りロシア人も楽しむという平和な一時でした。

日本軍（関東軍）の精鋭部隊は東南アジア転戦のため移動し「満州国」には戦う軍事力はありませんでしたが、日ソ不可侵条約の存在もあり治安は安定し日本の各地から来る「満州」への開拓団の入植で活気づいていました。

国民学校１年生の私は小柄だったので、いつも整列するときは最前列でした。クラスは１クラスで４０人を越える生徒数だったと思います。担任の先生は「ナカノ」という女性の先生で、中野なのか仲野なのか分かりませんがとても厳しい先生であったことを記憶しています。

その先生の通知表に記された『小柄なれども腕力強く勢力家』という一文を拠り所に父は私を鍛えたようです。遊びはいつも戦争ごっこですが親しい友だちが２派に別れた戦いでは臨場感が湧きません。そこで思いついたのが中国人の飼育する野外の養豚（黒豚）をめがけて石を投げ棒で叩き悲鳴を上げて逃げ回る豚を追いまわす戦争ごっこでした。

そんな遊びの在る時、豚の番をしている青年が、豚が可哀相だから止めるよう必死に言いました（私には中国語は解せないが身振り手振りと雰囲気で良く分かります）が戦争ごっこなので止めることをしませんでした。それどころか、益々戦意は高揚し投石の前進が始まったとき注意しに来た青年の投げた石が運悪く私の眉間に当たり顔中血だらけになりました。「中国人が悪い、ボクは逃げているのに」と弁明すると、「逃げているのにどうして眉間に石が当たるのか」と父に問い詰められ、中国人少年には不問で私は毎日一人で病院通いをさせられました。眉間にしわを寄せ人相が悪くなったのは傷を縫合した跡形なのです。絵といえば日の丸の戦闘機と軍艦の勇姿ばかりを描き、「ルーズベルトが死んでメデタイ・メデタイ」とみんなで唱和する私でした。

敗戦で一夜にして変わった黒河の街並み

しかし、１９４５年８月１５日、日本の敗戦が伝わると黒河の街並みは一夜にして中華民国の旗で埋め尽くされ「満州国」が中華民国の統治下に移った事を知らされました。それは清王朝最後の皇帝である溥儀を登場させた傀儡国「満州」の崩壊を宣言するもので、中国人がこの日の来たることを密かに待ち望んでいた祖国を思うマグマのような民衆のエネルギーを見せつけられました。

日本の敗戦後も一週間ほどは治安も安定していましたが、やがて中国人による略奪が始まりました。それを知った父は財産、食料、衣類まで中国人に預けましたが戻ってくる機会はありませんでした。

時を待たず住まいを追われた日本人は武装解除された日本軍の連隊の敷地へ難を逃れようと難民化し、長い行列の中に私たち５人の家族もいたのです。こうして、 私たちは安全

を求め命からがら日本軍の敷地へ逃避しましたが、すでに軍隊は武装解除され兵士は丸腰でした。

私たちは、８月１５日を境に、黒河で捕虜となり抑留され天国から地獄への転落となりました。こうなることをいち早く察知した高級役人や軍の上層部はチチハル→ハルビン経由で祖国へ帰還していましたが、取り残された人の中には自殺した人、現地で殴り殺された日本人もいました。

ソ連軍が「満州」に侵攻

12 月、極寒の訪れに黒竜江が凍結すると待機していたソ連軍の戦車が大挙して渡河し、「満州」に侵攻してきました。その姿は黒い鉄の塊で白い氷を踏みつけ、上陸しても障害物は踏みつぶし、まっしぐらに前進してくる戦車軍団を見て、あまりの恐ろしさに声が出ませんでした。

私（寿）、弟の英二の下に妹（昌子）、弟（三郎）の４人兄弟でしたが中国で生まれた昌子、三郎は抑留中に栄養失調から死去しましたが抑留中による死者に墓地などありません。

それでも、同じ黒竜江省方正県には中国人の手によって作られた日本人の墓地「方正公墓」があるということは何と有難いことでしょう。方正には昌子や三郎の霊はありませんが同胞の墓地として中国人に感謝するとともに機あらば墓参してみたいと思います。

私たち家族も他の日本人家族と同じで、父はシベリアへ抑留される身となり母子３人が中国に残されたのです。日本政府は８月 14 日の終戦宣言の前日、在留邦人の現地定着を指示しましたが GHQ の政策により帰国事業が始まり、私たちは 1947 年９月、胡蘆島より米軍の LST（戦車用上陸用舟艇の船底）に乗船し佐世保に上陸することが出来ました。日中合作の映画の一つに『大地の子』がありますが、私は自分が『大地の子』であるかのような錯覚を覚える時があります。

父がシベリアから帰還

シベリアへ連行され消息の知れなかった父が興安丸で、ひよっこりと帰還したのは 1947 年の秋でした。私たちが帰国した佐世保港、父の帰還した舞鶴港に引き揚げ者名簿類が保存されていたら今一度どんな状態で帰国したものか確認したいものです。

佐世保に着いた私たち母子は全身が真白になるまで DDT の粉末で消毒され検疫をすませ内地の土を踏むことができました。昼食に出された、さつまいもの甘い美味しさに舌鼓を打ったのです。

本籍岡山、出生地京都、育ちは中国と、何処が故郷なのか分からない生い立ちを経て、ようやく安住の地を現在の大津市に定めることになり 1948 年には弟要四郎が生まれまし

た。父が 34 歳の時の子なので漱石の小説にヒントを得たのであろう三四郎としたかったが母の希望で要四郎と名付けられました。

私は今年 83 歳になります。私には、これがラストチャンスかも知れないと覚悟をして日中友好協会主催の囲碁大会に参加しようと思っているので新型コロナウイルスの感染拡大が一日も早く収束し無事に開催されることを念じています。

昨年（2019 年 11 月 10 日）日中友好 70 周年記念の囲碁大会が日本棋院市ヶ谷本院で開催され会員として参加しました。年寄りが 10 時の対局に間に合せるため、京都駅を新幹線（６時 14 分）に乗車しなければならず、そのためには、５時 48 分の湖西線唐崎駅に乗車するという強行軍のため会場に着いたときはふらふらでした。主催する役員さんも滋賀という遠方からの高齢参加者と言うことで心配して下さったことを感謝しています。

会場では、日中友好協会会長の挨拶のあと、大会審判長の蘇耀国九段による、「こうした時節柄だからこそ囲碁を通して日本と中国が友好を深めてほしい」という趣旨の挨拶があり。待っていましたとばかり対局が始まりました。蘇耀国九段が終始会場を巡回されて私たちの対局を楽しく観戦されていたのが印象的でした。

肝心の私の戦績ですが午前中は２連敗と振るいませんでしたが、午後になって元気が戻り、２連勝し星を五分に戻す事が出来ました。日ごろ４段で打っているのを３段で申告しての結果でした。大会参加の証しに日本棋院のアイドルである仲邑菫ちゃんのブロマイドを沢山買って帰りました。今年も昨年同様の強行日程による参加となりますが土産は何にしようか、やはり対局者との中国での思い出談義になるでしょう。加齢を忘れて腕を磨き黒竜江省方正県を訪れ中国の愛好家と対局出来る日が来ぬものかと夢を見ながら今年も大会要項の届く日を待っています。

（ながお・ひさし：1937 年生まれ。元公立小学校、中学の校長、風の子保育園長を経て、現在同園の理事長。滋賀県大津市在住）

水　葬

柳生　じゅん子

毛布にくるんだものが静かに降ろされ
船が汽笛を鳴らした
甲板に並んだ人達が
頭を下げ　敬礼し　手をふって見送った
もう一度　長い汽笛が響き渡り
あたりを船は旋回した

母が語る水葬の儀礼を
わたしは覚えていない
それでも　毎日の遊び場であった甲板で見た
あの毛布のなかの人は
水の中から決して戻ってこないことが解っていた
父母をはじめ多勢の大人が泣いていたからだ

敗戦一年後　中国大陸からの引揚船上である

それまで　もっと残酷な死はあった
北の方から避難してきた人たちで
すぐ近くの学校は　ごった返していた
河の水を飲んで病気になり
毎日のように死者が出た
冬は零下三十度になる地である
焼くことも埋めることも出来ない死者たちは
衣服を盗られ凍って
丸太のように転がされていたという
暮らしの通り道にある恐怖に
誰もが目をつぶり思考の回路を封印した
母も無言で足早に駆け抜けたのだろう

けれど　ひとのやわらかな感情
涙を噴き出すほどの悲しみは
子供にも伝わる
今まで表出しなかった大人　が
汽笛にお腹の底までゆさぶられ

何かを取り戻したときの声と構えのない姿
その驚きが
子供の想像力をかきたてたのではないか

わたしは四歳になったばかりだった
初めて出会った　ひとの死を
今も　胸奥に　張りつけている

（やぎゅう・じゅんこ：1942 年生まれ。その年の秋に旧満州撫順へ。父は満鉄勤務。46 年秋に中国葫蘆島より引揚げ、福岡県に住む。母の語りを作品化するために「満州研究会」に通う。日本現代詩人会・日本詩人クラブ・日本社会文学会・日本文芸家協会　各会員）

本は開げないと燃えない

柳生　じゅん子

風呂を焚こう　と父が言った
日本への引揚げが決まった時だった
十歳の少女は　それから三日間釜の番をした

時折手伝いに来てくれていた朝鮮族の女の人に
箪笥ごと持っていってもらった
伯父の畑を一緒に耕していた満州族の男の人たちが
終戦後も耕地を貸してくれ
夕暮れになると野菜を運んでくれていた
その人たちにも要るものを受け取ってもらった
あとは持ち帰れないものは何でも燃やした
石炭と木炭になりかけた木の上に放りこみ
朝から　残留する日本人たちを次々とお風呂に入れた

学校が閉じられるとき先生が
図書館の本を　子ども達に配った
それが大陸での一年間の教科書代わりであった
二日目からはその本を破いていった

七五調で父を探した『孝女白菊』は
阿蘇の山奥に辿り着く前に燃え尽きた
三歳すぎに「ふる雪がおしろいならば手にとりてクロ
　（女中さんの名）のかおにぬりたくぞおもう」
七歳で「正月は地獄の道の一里塚」とよんだという
『良寛さんの一生』は　眼底に
無情の青白い炎を焼きつけた
星空を教えてくれた『小林一茶』が
慰めの火花をはぜた
『安寿と厨子王』がいつまでも泣き
兄たちに与えられた多くの『偉人』（伝）たちもまた
灰になるまで　親孝行を論した

（だから高校生だった兄は
大人は痩せた骨と骨がぶつかるから
痛いという祖母を

しっかり負ぶって歩いた）
（一茶で夢見た夜空は
無蓋車からだと星から掴まれそうで
チカチカして眠れなかったけれど）

顔がほてり頭がくらくらとする三日目
三人の兄弟の教科書と
二人の幼児の絵本にも火をつけた
古文の「平家物語」が暗唱と共に
ゆっくりとめくれていった
『むかしばなし』は厚紙の間に
恐ろしい物語をはさんでいた
すると　ふいに　石が投げられてきた
学校の側を通ると　なぜ
私達と入れ代わって学校に行っている中国の子ども達の
敵意を受けなければいけないのか
もう充分に解っていた
異国に戻ってしまった鶏冠山や川が写る写真にも
目をふせながら別れを告げた
学校　先生　級友たちとの日々が
消えかけるたびに日本語を繋いでいった

風呂には遠くから歩いてもらいにくる人
一年間一度も入ったこともない人も来て
兄は夜まで水を汲み足し
少女は頭のなかに本を開げ続けて……。

———H・節子さんの証言から

この空は、チベットに続く

渡辺　一枝

あだ名は「チベット」

子どもの頃から、なぜかチベットに惹かれていた。幼い私は「チベットに行きたいなぁ」と口ずさむことがあり、それであだ名は「チベット」だった。どんな所で、どんな人たちがいるのか何も知らず、ただ、いつか誰かに聞いた「チベット」という響きに憧れていたらしかった。

そこに住む人たちのことを初めて知ったのは、中学２年生の時だった。川喜田二郎さんたちが西北ネパールのドルポに入り、植生や動物などの自然環境、また、そこで生きるチベット人の暮らしを調査した報告が新聞に載った。大きな見出しには「鳥葬」の文字があり、私は夢中で記事を読んだ。それまで漠とした憧れだったチベットだが、記事を読んで、そこに生きる人たちの文化や風習にいっそう強く惹かれるようになった。

その翌年、また新聞紙上でチベットに関する記事を読んだ。「ダライ・ラマ法王インドに亡命」という記事だった。地理上のチベットの位置だけではなく、政治上の位置を知り、チベットは行くことが叶わない場所だと思った。ちょうどその頃から出版されるようになった白水社の『西域探検紀行全集』や『ヘディン中央アジア探検紀行全集』を夢中で読み、憧れの地へ想像を巡らせる高校・大学時代だった。中学では登山同好会、高校、大学では山岳部に入ったのも、ヒマラヤの向こうがチベットと思えばこそだった。

同行者はお坊さま

やがて結婚して保育士となり長女が生まれ、山へ向かう足も遠くなり、子育てと仕事に夢中の日々を過ごしていた。１９７２年、中国と日本の国交が正常化した時には、「これでチベットに行けるようになる」と嬉しく思ったが、中国は外の世界に対して、チベットを“竹のカーテン”で閉ざしていた。その頃保育士だった私は、その仕事が楽しくて、いつしかチベットへの夢は胸の奥に畳んだまま、日頃は思い浮かべることもなく過ぎていった。

あれは１９８１年だったろうか、ＮＨＫでチベットに取材した番組が放映された。タイトルは忘れたが、聖山カイラスへの巡礼のドキュメンタリーだった。それまで文字でしか触れることのできなかったチベットの光景が、その番組によって初めてカラーの動画で生き生きと眼前に映し出されたのだった。一緒に見ていた家族にも「チベットってこういう所なの」と、弾む声で話しかけていたのに、外国人に対して“竹のカーテン”が開かれたということには思い及ばないその時の私だった。だから「私もチベットへ行こう」などとは、思いだにしなかった。

初めてチベットに行ったのは、４２歳の時だ。偶然が重なって叶えることができた初チベット行だった。

ＮＨＫの番組を見た頃の私が夢中で読んでいたのは、博物学者のライアル・ワトソンと物理学者のフリッチョフ・カプラの本だったが、１９８６年秋に、その二人が同時期に来日するのを記念して、高野山大学で公開シンポジウムが開かれるという記事が新聞に載った。大好きな二人の話が聞けるとあって参加を申し込み、会場の高野山大学へ行った。受付で配られた資料の中に、１枚の旅行勧誘チラシが挟まっていた。シンポジウムのもう一人の発言者で、当時は高野山大学の学長をされていた松永有慶氏を団長にしての「チベット仏教寺院を訪ねる旅」の勧誘チラシだった。旅行出発日は１９８７年３月２６日とあった。願ってもない日程だった。

保育士の仕事をやめようと思ったのは、その数年前だった。産休明けで入園してくる１歳未満児クラスを受け持って、年度替わりにはそのクラスを持ち上がって担任となり、その子どもたちを卒園させる年に私も保育園を退職しようと思っていた。１９８７年３月が、その照準に当てていた時だったのだ。そして仕事仲間たちにもその心算は伝えて、了解を得ていた。高野山でのシンポジウムを終えて職場に出勤した日、園長に卒園式を３月２５日にして欲しいことを伝え、快く了承されたのだった。

そんな偶然の重なりで、保育士をやめた翌日に私はチベットへ旅立ったのだった。チベットに行くことがツァーに参加した理由で、その頃の私は、仏教にはまったく興味はなかった。成田空港で同行者たちと初めて顔を合わせたのだが、旅行目的から言っても当然だったのだろうが、２０名弱の団体のメンバーは私ともう一人を別にして、あとは全員高野山関係のお坊さまたちだった。だがそれも気にならず、初めてのチベット行を前にして「なぜ私は子どもの頃からチベットに惹かれてきたのか、行けばきっとその訳がわかるに違いない」と、その理由が解き明かされるだろうと心弾ませている私だった。

２日目で落ちこぼれ

上海空港で入国手続きをして、陝西省西安（かつての長安）から宝鶏を経て甘粛省天祝を訪ね、西安へ戻りラサへ飛んだ。旅行は、そのタイトル通り「仏教寺院を訪ねる」スケジュールで、西安でも天祝でも仏教ゆかりの地を訪問し、ラサに着いた。ラサに着いてから２日目で、もう私はお寺巡りから落ちこぼれた。毎日朝食後にホテルからバスでお寺に行き見学し、昼にはホテルに戻って昼食後２時間ほど休憩して、午後にまた別のお寺にバスで行くのだが、お寺の見学は全く興味が湧かなかった。せっかくチベットに来たというのに、心弾まず詰まらなかった。２日目の午後からはバスでお寺まで皆と一緒に行ったが、そこからは寺院の中に入らずに外に居て、参詣に来たチベット人との触れ合いが楽しかった。互いの言葉は知らないのに、身振り手振りで何か伝えようとし、また判ろうとする。

翌日は午前のお寺訪問後にホテルに戻って昼食を摂った後の休憩時間に外に出て、畑仕事をするチベット人のところへ行った。一緒に鍬を振るわせて貰い、その後で車座でお茶を飲み、そんな事が心から楽しかった。「この人たちと居ると、なぜこんなにも素のままの私で居られるのだろう」と思った。そしてこの旅が終わる頃には、その訳がわかるまでチベットに通おうと思っている私だった。

50 歳記念旅行

それから毎年、時には１年に二度三度と、通い続けた。初めてのチベット行は、その直前にはラサで自由を求めての抗議行動が起きたのだったが、そうとは知らず帰国後にそれを知った。政治的な状況には深く思い至らずに、遠く憧れていたチベットが、手の届くところにある嬉しさばかりを思う私だった。２年後のチベット行はネパールから陸路でチベット入りし、ラサから空路でネパールに戻る旅程だった。

ネパールの国境を越え中国領に入ると、李という名の中国人ガイドが付いた。道中で出会うチベット人たちとチベット語で会話を交わすガイドの李に私は、どこでチベット語を習ったのかと尋ねた。ラサに住んで３年になるが、その間に覚えたのだと答えを聞いて私は、子どもたちの学校ではチベット語教育はされているのかと聞いた。李はそれには答えずに、笑いながらこう言った。「子どもたちの親はチベットが解放されてから教育を受けたので中国語を話しますが、子どもたちの爺ちゃん婆ちゃんは中国語が話せません。だから子どもたちは家では両親とは話せますが爺ちゃん婆ちゃんとは会話ができません」

彼の言ったことは正しくないことは、その後もチベット行を重ねる中で判ったが、その時は彼の言いぐさと不遜な態度をとても腹立たしく思った。これから後のチベット行は、中国人ガイドではなくチベット人ガイドを頼もうと思った。それまでは旅行会社がアレンジした団体旅行に参加していたが、その後はラサの旅行会社に直接連絡をして、チベット人をガイドに頼んで個人旅行を重ねた。また私自身もチベット語を習い始めたが上達はせず、未だに日常の挨拶程度しか話せない。

チベットのことを、チベット人の暮らしを、もっと知りたかった。旅行者としての見聞ではなく、もっと分け入った感じ方でチベットを知りたかった。チベット本土だけではなくチベット文化圏のラダックへ行き、チベット人が暮らす西北ネパールのムスタンやドルポへも行った。それでもまだ、チベットの上っ面しか見ていないような気がしていた。そして思い至った。「チベットを、馬で行こう」と。

それまでのチベット行はいつも、四輪駆動車での移動だった。馬ならば道路を外れてテントで暮らす牧畜民を訪ね、小さな集落を訪ねながら行くことができる。少し長い旅になるから家族には、家を空ける理由を言う必要がある。「５０歳記念旅行」だと称して、ほぼ半年の旅程で計画を立てた。

こうして私は、１９９５年にチベットのチャンタンを馬で旅行した。行く先々でチベット人の暮らしぶりを目にし、思いを聞いた。

学齢期の子どもが学校に行かない理由も様々だった。学校があるのは遠くの町で寮生活になるが、家族の中ではその子が羊の放牧をしている働き手の一員だと言う祖母がいた。別の人からは、学校へ行って何を習うのか？中国語と中国の歴史か？と聞かれることもあった。また、インドの学校（亡命政府のあるダラムサラ）に行かせたいがどう思うかと聞かれたこともある。それは、時に今生の別れになることさえある選択肢だった。

どこへ行くかと聞かれ、西の聖山を目指すと言えば、道中で食べるようにとバターや干し肉を恵まれた。どこから来たと聞かれ、ラサから来てラサへ戻ると答えると、そんな長旅で馬がかわいそうだと言われた。観光客の訪れないような小さな寺院で祈る老婆は、持病の辛さを言いながらその辛さを憂いて祈っているのではなく、そのような辛さを他の誰も味わうことのないようにと祈っているのだった。

この旅行によって私は、ようやくチベットの懐に入ることができたと思えたし、またチベットも、この馬旅以降私を無条件に受け入れてくれていると感じられるようになった。馬の旅を経て、私は初めて「チベット」を書くことができるようになった。

馬旅の後ではなお繁く通い、各地に親しい人たちもできて家庭を訪ねるようにもなり、季節を違えて１年に２度３度と重ねて行くようにもなった。

「祈りの言葉を唱えなさい！」

チベットには太陽暦でも太陰暦でもない独特の暦があり、年中行事や祭りなどは仏教に根ざしたものが多く、それらはこのチベット暦によって行われる。

チベット暦の４月１５日はサカダワの祭礼の日で、この日にはチベット人の多くが聖山、聖湖、聖地を目指して巡礼に繰り出す。チベット人の巡礼の仕方は、聖なるものの周囲を時計回りに巡るのだが、チベット人にとっての一大聖地であるラサの巡礼路のこの日は、地方からやってきた人たちやこの街の在住者たちでいっぱいに溢れる。

私もサカダワのラサの巡礼路を歩いたことは何度かあるが、巡礼路を巡るには一巡だけではなく三巡する。そんな、ある年のことだった。巡礼路を歩き出した一巡目、それまではスムーズに人波は流れていたのに、ある場所に差しかかったら動きが止まって、人だかりで団子のようになっていた。人垣をかき分けて覗くと巡礼路の傍に小さな円形のビニールプールがあり、水を張ったその中には魚が泳いでいた。傍には中国人の男が座り、巡礼のチベット人たちは小銭を出して男から魚を買っていた。買った人がまた巡礼路を歩き出すと見物の一団も歩き出し、そんな繰り返しで巡礼路の団子状は途切れなかったが、水と魚を入れたビニール袋を手にしたチベット人と一部始終を見物していた一団とともに私もまた再び歩き始めた。ラサ川のほとりを行く時には、さっきのチベット人は買った魚を川

に放生したのを見た。そしてその先の川岸には、投網を打つ中国人の姿があった。

巡礼路の二巡目でまた団子状の人垣に差し掛かり、人ごみを分けて売り手の中国人に近寄ろうとした私の肩を、後ろからそっと叩く人があった。振り返ると、見知らぬその人は私に言った。「あの男のためにあんたが心を苛立たせてはつまらないよ。それよりも、哀れなあの男のために祈ってやりなさい」

またもっと別の時のことだ。村はずれには小さな粉挽き小屋があって、村人たちが収穫した青裸麦は、そこで粉に挽いて貰う。ツァンパが欲しければ、そこで挽きたてを買うこともできる。ツァンパを買いたい私がその小屋に脚を踏み入れようとしたら、扉の前に立ちはだかった粉だらけの老人が、いきなり言った。「祈りの言葉を唱えなさい！」咄嗟のことで、私は観音菩薩の真言、薬師如来の真言、文殊菩薩の真言を唱え、白ターラーの真言を唱え始めたら、それを遮って老人は言った。「よろしい。あんたにはツァンパを売ってあげよう。世界では今、あちこちで戦争が起きている。みんなが武器を捨てて、祈るようになれば平和な世界になれるのだ。わしは祈りの言葉さえ知らない奴にはツァンパを売らずに、出直してこいと言ってこの箒で追い出すのじゃ」。粉挽き小屋の賢者の言葉だと思った。

そうやって通い続けてきたが、２０００年以降のチベットの変わり様は凄まじい。これは、江沢民が２０００年３月の全人代で打ち上げた「西部大開発」計画による。計画は、鄧小平の「先富起来」の掛け声で始まった改革開放政策の恩恵が未だ及ばない内陸西部の経済を、成長路線に載せようというものだった。その四大柱は「西電東送」「南水北調」「西気東輸」「青蔵鉄道」で、水資源の豊かな西部地域で起こした電力を東へ送り、長江の上・中・下流域から取水した水を黄河に引水して南部の慢性的な水不足を解消し、西部で産する天然ガスを東に送るパイプラインプロジェクトのことだ。西部大開発計画の目玉ともいうべきは「青蔵鉄道」で、北京とラサを鉄道で結ぶことだった。それ以前に既に青海省ゴルムドまでは鉄道が通じていたが、これをラサまで延ばす鉄道敷設計画だ。２００８年には北京でオリンピックが開催されるので、何があってもそれ以前に完了させるべき工事だった。五輪前年の２００７年に運行開始の予定だったが、それよりも早く２００６年に工事は完了して運行も始まった。

計画が実行に移され工事が始まる前の地元の声には、「天然資源が狙われている」と不安をいう声もあったが、「鉄道が敷かれれば物流が改善されて物価が安くなるだろう」と期待する人もいた。だがいずれの計画でも実行に移されれば、環境に相当な影響があることは目に見えていた。

２００８年の記憶

２００８年には、オリンピックで世界の目が中国に注いでいる今こそ、中国政府の少数民族政策の実情を、チベット人が置かれている実態を、世界に知ってもらうチャンスと、

各地で政府に対しての抗議行動が起こった。政府はそれを「騒乱」と呼び、武装警官と軍を出動させて鎮圧にかかった。抗議と弾圧の応酬は続き、多数の犠牲者、検挙者が出たがその数は今もはっきりしない。

２００９年には、僧院での法要を禁じた政府に抗議して一人の僧が、チベット国旗とダライ・ラマ法王の写真を掲げて自らの体に火を放った。焼身抗議の僧は武装警官に発砲されて倒れ、連れ去られた。これより後に今日まで１６５人が焼身抗議で亡くなっているが、政府はこれをテロだと言う。「チベットに自由を」と声を上げることさえできない今のチベットでは、ただ一人でガソリンをかぶり我が身に火をつけることでしか、抗議の術がないのだ。監視カメラ・盗聴器がそこここに設置され、街角に数人で集まるのも禁止されている。

チベット語教育を禁じ「国家共通言語文字」での教育を推し進める政府に対して、もっと密やかな行動で抗議をする人たちも多い。これは２００９年に、私がラサで目にしたことだ。話し言葉には、しばしばその民族の言語ではなく外国語が混じることがある。例えば私たちも、相手の提案などを了承するときに「OK」と言ったり、自家用車で通勤することを「マイカー通勤」などと言ったりする。チベットでも同様のことは頻繁に耳にしてきた。電話番号を言葉で伝えるのに、チベット語の数字で言わず中国語を使うなどは、ごく一般的なことだった。他にも会話の中に中国語が混じるのは頻繁にあった。ある日チベット人の食堂に居たときに、こんなことがあった。二人連れの若者が店に入ってきたが、彼らの会話に中国語の単語が混じっているのを店主の女性が聞き咎めて「あなたたちチベット人でしょう？チベット語を話しなさい」と言った。青年は即座に、「あ、ごめんなさい。そうですね。チベット語で話しますよ」と言って、言葉を改めたのだった。同様のことは、何度か他の場所でも耳にした。

また別のときのことだ。東チベットのムリ（木里チベット族自治県）で小学校教師だった男性に会った。彼はこう言った。「私が学校でチベット語を教えようと思っても、それはできません。でも私の息子は５歳になりますが、教えなくてもチベット語を話します。彼が生まれたとき、３歳になってもチベット語を話せなければチベットに未来はないと思っていましたが、息子はちゃんとチベット語を話しています。中国語は玄関から入ってくる埃みたいなモノです。掃き出しても知らないうちに入ってくる。私はここで息子や他のチベット人たちに、チベット語とチベットの文化をしっかりと伝えていきます。今私がここで事を起こそうとしても、それは卵が岩にぶつかるようなことです。卵が硬く硬く岩を打ち砕くほどに硬くなるように、私は卵を育てます」

西部大開発がもたらしたもの

２０００年以降のチベット行で私が目にしてきたのは、大規模の環境破壊と伝統や文化

が踏みにじられ、消されようとするチベットの姿だった。そこには表現の自由も移動の自由もなく、人権はなかった。

鉄道工事のために草原が削られ、既存の幹線道路を胸骨に例えれば、それに交わる新設の道路はあばら骨のようだった。それらは、工事に使う鉄鉱石やセメントなどを採取して運び出すための道路だった。そうした工事現場の周辺には、プラスティックの袋が散乱して風に舞っていた。羊やヤクが草を喰む草原が遠目には以前には気づかないでいた花畑のようだったが、よく見ればそれは、棄てられたプラスティックや空き缶、空き瓶の徒花なのだった。幾種もの野生動物が数多く棲息する草原を切り裂いてできた鉄道に乗れば、前述したような光景は決して目に入らず、車窓には壮大で感動的に美しい風景が広がっていた。

あるいはダム建設に必要な土砂を運び出すために、地元民が産土神のおわす地として大切にしている山が崩されていった。砂利を採取するために水源の河岸が削られて、川水は褐色に濁って流れていった。こうしてチベット各地域で、自然破壊は進んでいった。

２０００年代に入ってから西部大開発が実行されてくると変化は徐々に現れてきていたが、２００６年にラサまでの鉄道工事が完成すると、物品の運搬はトラック輸送よりもずっと容易になったので、変化の速度は加速した。

それからのチベットは様々な工事が急速に進み、その変わりようは凄まじい。

ラサの街は高層マンションの建設ラッシュを迎え、そのために新たな道路が幾筋も作られ、高層ビルが林立した。流入人口が増大して大きく広がった新市街地の中で、ポタラ宮殿やヂョカン寺などの古くからチベット人たちが暮らしていた旧市街地域は、まるで“チベット・テーマパーク”のようになってしまった。ラサ河は堰き止められて、人造湖が作られた。人口が増大したので、上水道供給のためだという。人造湖には遊覧船が航行され、湖岸（本来は河岸なのだが）には高地であるこの地には元来は生えていなかった種類の樹木が植えられ、公園になった。公園やホテルが夜にはライトアップされて、通りの名に中国の都市や人名が冠されたラサの街は、さながら不夜城のようになった。

西部大開発は、西の内陸部の経済を成長路線に乗せて生活向上させることを謳いながら、その実、西域の地から豊富な天然資源を運び出し、また人口が過疎な西の地に他民族人口を流入させていった。経済的ゆとりを得た中国人の間では旅行ブームが起きて、異なる文化や風習を持つこの地域は観光資源にされていった。それも本来その地に根付いた伝統や文化、風習に畏敬の念を抱いて大事に伝えるやり方ではなく、物珍しげに訪れる者たちの趣味嗜好に合う様に変えられた形で、観光資源となって搾取されている。増大したホテルやレストランを経営するのは地元民ではなく、他省から流入してきた者たちが多い。

以前の秋には、農耕地帯と牧畜地帯の住民の交易風景が見られたものだった。ヤクの背に、あるいはトラクターやトラックの荷台に羊毛やバター、チーズや干し肉などを積んで

牧畜地帯から農耕地帯にやってきた人たちが、持ってきた生産物と畑の収穫物を互いに交換しあう様を、よく目にしたものだった。バターや羊毛などを青裸麦に換えて帰った牧畜民は、自分たちでそれを煎って挽き、ツァンパにしていた。

なるほど、２０００年以降はインフラも整ってきて、上下水道は完備し、四六時中電気も通じている。街には品物が豊富に溢れ、どれを選ぼうかと迷うばかりだ。洗濯機を備えた今はもう、洗濯物を抱えて川に行って、硬い石鹸でゴシゴシこすって洗う必要もない。ストーブの前でマッチを擦ってヤクの糞に火をつけ、共同井戸で汲み上げた水が入った鍋をストーブに載せることもない。便利な世の中になった。

鉄道が開通してからは貨物駅の近くにそれぞれの収穫物は集積されて中国人資本家によって加工場も作られ、ツァンパなど製品にされて市場に出される様になった。自給自足と交易での暮らしはたちゆかず、現金がないと日々の暮らしは成り立たなくなり、働き口を見つけて就職しても中国人とは賃金の格差がある。こうして否応なしにチベット人の暮らしは、根底から変わっていった。経済至上主義が、伝統や文化を浸食していったのだった。これは、経済的なアパルトヘイトと言えないか？

便利な世の中にはなったが、便利はしばしば欲望を道ずれにやってくる。執着を忌み、利他を尊ぶチベットの心が、この先も消えることなく灯されていくことを切に願っている。

消されゆくチベット

私が初めて訪ねた１９８７年は既に中国に占有されていたチベットだが、でもまだ自然の風景にも人々の暮らしぶりにも、チベットの原風景が広がっていた。それらを目にしたこともなかったのにチベットに惹かれていた幼い私は、やがてその地に通い出してからは、なお一層心惹かれていった。そして通い続けていく中で、現地の人々の望みとはかけ離れた、巨大な力が、チベットの原風景を踏みにじり、呑み込んでいく様を見てきたのだった。

私の大好きなチベットの姿を、せめて写真に残しておきたかった。撮りためていた写真を見た友人の編集者が、写真集にすることを勧めてくれて本になった。『ツァンパで朝食を』（本の雑誌社）だが、Ｂ５版で２８０ページ、収録写真３５０枚という大部の本になったため、値段も高くなってしまった。だが、「今は消えてしまったチベットの貴重な記録だ」と、研究者からの評価を頂いた。「文化がくっきり浮かび上がる。グローバル化と画一の波にさらわれる前の奇跡的な記録の光」との書評も頂いた。また在日チベット人からは、今は消えてしまった子どもの頃の懐かしい故郷の風景がある、という声や、祖父母や両親から聞いていたが自分は知らなかったチベットの暮らしぶりが判ったという若いチベット人の声もあった。

そして嬉しいことにこの本を目にした新日本出版社さんから、もっと廉価で多くの人が手に取りやすい普及版を出そうとお声がかかった。こうして元本の文章をそのまま生かし

て、『チベット　祈りの色相、暮らしの色彩』が生まれた。写真の点数は減らし、また元本とは差し替えた写真も何点かあるが、述べてきたような思いが伝わる嬉しい本になった。多くの方に手に取っていただけたらと願っている。

チベット問題は中国の少数民族政策が根元にあるが、しかし政治的な視点からだけで見てはならないと思う。政治問題としてだけ語れば、隣国を非難するだけで、私のこととして考えることはできないだろう。それよりも彼の地の暮らしが、この空の下で営まれていることに、想いを馳せたい。この写真集から、経済至上主義が何をもたらし、何を消していったのかを感じていただけたらと願っている。

最後に、こんな詩を紹介したい。

道はできる　−チベット遊牧民の落首−

あなたがたは道を作った
だがわたしたちはその道が作られるより遥か昔から
ヤクとともに大地の上を歩いてきた

あなたがたは山を削り崖を切り崩し道を作った
だがわたしたちの歩いてきた踏み跡は
山肌を巻き峠を上り下りるものだった

あなたがたは草原の表土をこそげ取り道を作った
だがわたしたちはヤクに草を喰ませながら
草原を歩いてきた
ヤクは糞を落としたが
それは燠になって茶を沸かし
やがて土に還った

あなたがたは道を作った
道を作りながらゴミの山も作った
大地に還らぬゴミの山を作った

（わたなべ・いちえ：作家。著書『ハルビン回帰行』（朝日新聞社）には残留婦人との交流が詳述されている。他に『チベットを馬で行く』（文春文庫）、『私のチベット紀行』（集英社文庫）、『聞き書き南相馬』（新日本出版社）など多数）

新疆ウイグル自治区での国際協力ご紹介

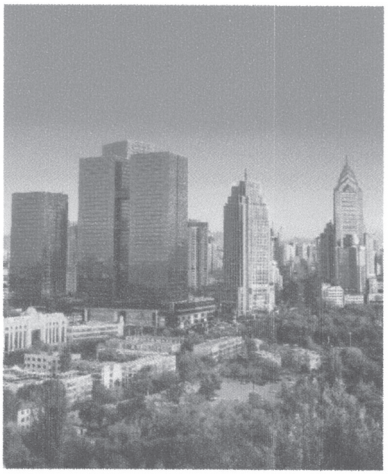
小島 康誉

『星火方正』に感謝

2020年正月、札幌から戻ると、「方正友好交流の会」の大類善啓理事長より御心こもった便りが届いていました。数年前に小生が講演をした際に出席されて以来、『星火方正』を贈呈いただき、拝読し勉強しています。昨年末にも12月号をお届けいただき、申し訳なく拙著『中国新疆36年国際協力実録』を進呈したことへの礼状でした。

そこには「世界を見わたしてみますと、どこの国もナショナリストが台頭し、1930年のヒトラーやムッソリーニが登場した頃のように思えてなりません」と世界的見地が述べられていて、感心するばかりでした。文末に「『星火方正』に、ぜひ著作に関するものなど、論文ではなく、エッセイ風な原稿をいただければ嬉しいです」と記されていました。そこで、『星火方正』活動への感謝を込めて駄文を記しました。笑覧くださいませ。

新疆ウイグル自治区ご紹介



新疆の区都ウルムチ市の一角

新疆については昨今いろいろ報じられているが、基本状況を紹介したい。新疆ウイグル自治区は1955年10月1日に成立した。清代は新疆省であった。東西南北の文明文化が行きかったいわゆる「シルクロード」の中央に位置し、モンゴル・ロシア・カザフスタン・キルギス・タジキスタン・アフガニスタン・パキスタン・インドと国境を接し、国境線は約5,600㎞におよぶ。地政学的に古来より重要な一帯であり、古には東西交通の要衝の地であり、19世紀から20世紀にかけては欧米で「グレイトゲーム」と称された諜報戦が展開された。現在では「一帯一路」の「シルクロード経済帯」の重要地帯としての意味を持っている。

面積は約166万㎢、中国の約六分の一、日本の約4.4倍。アルタイ・天山・崑崙の三大山脈がジュンガル盆地とタクラマカン沙漠をはさむかのように聳えている。6,000m級の天山山脈の峰々は万年雪におおわれ、ナラティなどの草原には高山植物が咲き乱れている。

新疆を理解するキーワードは、シルクロード・多民族・資源・シルクロード経済圏センターの4点である。多くの文明文化が行きかい楼蘭・キジル・ニヤに代表される世界的文化遺産が点在している。文明文化を運んだのは人々であり、漢・ウイグル・カザフ・回・モンゴル・キルギス・シボ・タジク・満州・タタール・ウズベク・ダフール・ロシア各族など47民族、約2,500万人が協力しあって生活している。

石油・天然ガス・石炭・レアメタルなどが大量に埋蔵され、開発が始まっている。タクラマカン沙漠はかって「死亡の海」と言われたが、現在では「希望の海」に変わった。区都ウ

ルムチには高層ビルが林立し、近隣諸国との経済活動は活況を呈している。日本企業の進出も始まっている。北京～ウルムチ便は一日 10 便余も飛んでいる。

新疆が広く日本で知られるようになったのは 1980 年放送の NHK「シルクロード」で、神秘の扉が開かれたことによる。2005 年「新シルクロード」が放送され再び注目された。改革開放 40 年をへて中国の発展は目覚しく、新疆でも投資と観光ブームで企業家や観光客があふれている。一時減少した日本人観光客も増加中である。中国政府による大規模な全面的支援策が実施されていて歴史的大発展期を迎えている。是非お出かけください。

『中国新疆 36 年国際協力実録』ご紹介

お陰様で好評です

私は 1982 年以来、新疆ウイグル自治区を 150 回以上訪問し、世界的文化遺産保護研究・人材育成・関連事業の三方面で 100 以上の国際協力を実践し、日中間の相互理解促進に微力を尽くしてきた。これらは日中双方多くの方々の尽力によるもので、感謝するばかりである。

大類善啓理事長に紹介を求められたのは新疆での国際協力をまとめた写真集『中国新疆 36 年国際協力実録』(東方出版 2018)である。大量の写真や資料から選び出した約 840 点、日本語のほか中国語と英語も併記し、A4 版 270 頁。初公開の写真・資料も多く含んでいる。「国際協力実践の手引書」としても好評で、「国際協力学」系の学部を設置している諸大学などで副本として採用されたとか。

多数の便りが届いているが、国家文物局(文化庁相当)の宋新潮副局長から「この『実録』は貴方の長年の活動と貢献の真実の記録である。中日両国文化交流と学術活動を生々しく収めていて、非常に意義がある。国家文物局を代表して心からの敬意と感謝を表します。今年は中日平和友好条約締結 40 周年であり、安倍晋三首相の訪中時に双方は多くの共同認識に達し、中日文化交流は新たなチャンスを迎えた。貴方は『至誠・感謝・縁・義理・人情といった琴線にふれる交流を続けてきた』と書いている。中日の平和友好を共に推進し、相互繁栄へ合作しよう」(拙訳)と温かい EMS をいただいた。以下、短く紹介します。

日中友好キジル千仏洞修復保存協力＝開始 28 年後に世界文化遺産

1986 年、天山山脈南麓クチャ西方約 70km の敦煌・雲崗・龍門とならぶ中国四大石窟のひとつキジル千仏洞を参観し「人類共通の文化遺産だ」と直感。感動している私に案内人が「10 万元寄付してくれたら、専用の窟を造ってあげる」と。私は「寄付する。保護に使って、石窟はいらない」と即答。当時の 10 万元は約 450 万円。私たちが大金のことを 1 億円と表現するように「10 万元」と言ったのだ。

外国人の答えに彼は驚いた。クチャからウルムチへ帰る 2 日間二人の会話は「冗談です。

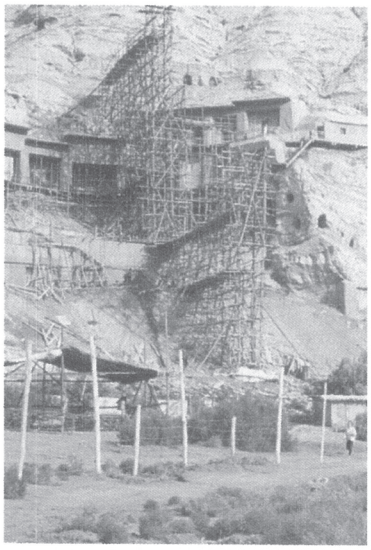
忘れてください」、「冗談は分かっている。保護に使って」の繰り返し。紹介された新疆文化庁の韓翔文物処長も考えてもいなかった申し出に、「なぜ？ 本当？ 真の目的は？」を繰り返した。簡単なメモにサインして帰国。しかし、振込先が中々来ない。新疆では外国人からの初の寄付申し出で、半信半疑、別の目的があるのではと、許可が得られなかったからだ。保護協力金を振り込んだのは10月31日のことだった。

その後も新疆を訪れると、外国人も重視するほどであればと、中国政府が本格的修復を行うことになったという。私はそれなら10万元では足りないから、日本で浄財を募り1億円寄付すると申し出た。当時の物価などを考えると、現在の1億元（約15億円）にも匹敵する巨費である。新疆文化庁長はじめ皆が「エーツ！」と声をあげ驚いた。キジル千仏洞は中国だけでなく人類共通の文化遺産であり、次世代に引き渡す責任があると考え申し出た。

1987年5月20日、新疆迎賓館での調印式には王恩茂全国政治協商会議副主席（前新疆党書記）も出席、新疆文化庁書記と協議書にサインした。

1987年11月、私は「日中友好キジル千仏洞修復保存協力会」を設立し、会長などを宗教・経済・学界の諸氏にお願いし、私が専務理事を担当した。12月、「人類共通の文化遺産を後世へ」をスローガンとした募金パンフレットを作成し募金活動を開始したが、敦煌と違って殆どの方がキジル千仏洞をご存知なく、募金は難渋。募金に奔走した。

1988年4月28日、新疆人民会堂で黄宝璋新疆政府副主席列席のもと、第一次贈呈式を行ない、トラック等8台2,701万円相当と現金3,500万円の計6,201万円を贈呈した。89年8月30日、新疆人民会堂で王恩茂全国政協副主席列席のもと、第二次贈呈式を行ない、現金4,343万円を贈呈。二次にわたり3,000余の個人や企業の浄財1億544万円を新疆政府に寄贈することができた。協力いただいた方々に心から感謝を申し上げたい。開始した本格工事は数年に及びキジル千仏洞は輝きを取り戻した。



保存工事中のキジル谷西区

その後も世界的文化遺産保護の重要性を理解いただくため参観団を度々派遣。職員通勤用バスや飲料水浄化装置贈呈なども行ってきた。

2014年6月22日、カタール・ドーハでの第38回世界遺産会議で「シルクロード：長安－天山回廊の交易路網」のひとつとしてキジル千仏洞は世界文化遺産となった。PC生中継を見続けていた私と妻は「万歳！」と叫んだ。修復保存協力を開始して28年後のことであった。2015年と16年に写真集『新疆世界文化遺産図鑑』中文版・日文版を出版した。

2016年2月フジTVでキジル紹介番組が放送され、9月にはキジルで「小島氏新疆文化文物界投身30周年記念座談会」が開催された。17年10月NHK「シルクロード・壁画の道をゆく」が人気を博した。18年にも参観団を案内、保護の重要性を訴え続けている。

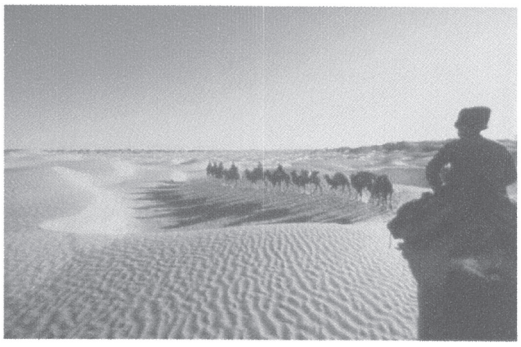
日中共同ニヤ遺跡学術調査＝7年後に国宝中の国宝「五星出東方利中国」錦発掘

キジル千仏洞の修復活動の過程で、韓処長が「新疆には三大遺跡がある。楼蘭・キジル・ニヤだ。楼蘭は基本調査がおわり、キジルは日本からの資金協力で修復中、規模の大きいニヤ遺跡は本格的調査が行われていない」と言った。私は即座に共同調査を提案した。

ニヤ遺跡はタクラマカン沙漠南縁ミンフゥンから約 100km 北上した一帯に残る紀元前 1 世紀頃から 5 世紀頃まで栄えた古代都市で、『漢書』など記載の「精絶国」と比定されている。その規模は東西約 7km・南北約 25km（周辺を含む）という広大な範囲に、仏塔を中心に、寺院・住居・墓地・生産工房など約 220 ヵ所の遺構が残存している。「西域 36 国」の残存する都市では今や最大の都市国家遺跡であり、古代西域研究に欠くことのできない重要な位置をしめている。世界的文化遺産ともいえる規模と価値を有し、「シルクロードのポンペイ」・「幻の古代都市」とも称されている。

私の共同調査提案に韓処長はすぐに同意したものの、この時もまた許可をえるまでには長い時間を要した。過去の西域一帯における日本の大谷探検隊をふくむ外国人による文化財持ち出しや遺跡が未開放地区に属していることなどの理由からである。

何とか許可を取得。1988 年の第一次予備調査は、沙漠車や GPS といった近代装備を持たない、まさに「探検」であった。ミンフゥンからカパクアスカンと称される小オアシスまでの約 90 kmに 12 時間余を要した。道らしい道も無く車輪が砂にとられてたびたびスタックするためであった。オアシスの現地民の粗末な小屋で雑魚寝。翌日、牛や羊の糞の浮いた水を錆びついたタンクに汲んでいるので、ラクダ用の水かと聞くと、人間用だとの答え。これには唖然とするばかりだった。ラクダに装備を積み、その上に乗って遺跡を目指した。



ラクダで 3 日かけてニヤ遺跡へ

頼りとしたのは、1901 年にニヤ遺跡を発見したスタインの報告書記載の略図と 1980 年に NHK・CCTV 取材班を案内した研究員やラクダ使いの記憶だけだった。安全のために政府から派遣された無線士の定期交信は「現在地不明なれど全員無事」であった。モールス信号用のアンテナを立てる度に小 1 時間を要した。タマリックス堆の間を「右だ、左だ」とラクダで 3 日かけてようやく仏塔にたどりついた。11 月 6 日早朝のことである。ここに画期的調査の幕が開いた。この時の感激は今でも忘れられない。

わずか 2 日の滞在であったが、遺跡中心部を観察してまわり、概要を把握するとともに、地表散布遺物の収集を開始し、日中双方とも調査の必要性を確認、以降調査の協議書を新疆文化庁長と交わした。

その後も規模を拡大し調査継続、1994 年には国家文物局より「発掘許可書」をえた。中国全土で外国人第一号である。1995 年調査で王族墓地を発掘し、「五星出東方利中国」「王

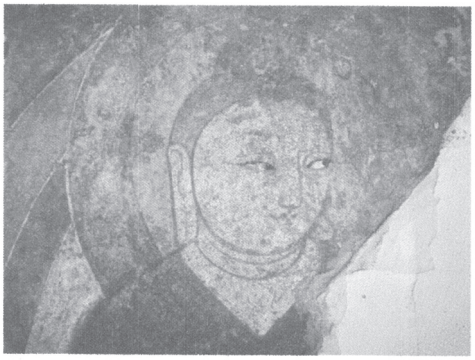
侯合昏千秋万歳宜子孫」錦などを検出。これらは「1995年中国十大考古新発見」「20世紀中国考古大発見100」「中国の国宝中の国宝」などに選ばれた。1997年まで9次にわたる現地調査を敢行し、成果は報告書3巻や国際シンポジウムなどで発表し続けている。2019年1月CCTV「国家宝蔵」が大型番組「五星出東方利中国」を放送し、反響を呼んだ。

ニヤ遺跡もキジル千仏洞と世界遺産計画に含まれていたが、共同申請国の準備遅延で、天山周辺に絞って申請され、楼蘭などと次段階に繰り越され、各種準備が行われている。

日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査＝法隆寺「鉄線描」壁画の源流「屈鉄線」壁画発掘

2002～06年ダンダンウイリク遺跡で調査を敢行した。タクラマカン沙漠南縁チラ北方約100kmに残り8世紀頃まで栄えた古代都市である。ニヤ遺跡調査では国宝級文物発掘まで7年を要したが、ダンダンウイリク遺跡調査では初年度に大発見があった。

我が国最初の世界文化遺産「法隆寺」。火災で焼損した金堂「鉄線描」壁画はシルクロードの影響を受けていると言われてきたが、源流の実物資料は中国にも存在していなかった。ラクダに揺られてたどり着いた初日に露出した壁画を発見、保護のために緊急発掘すると次々に「屈鉄線」壁画が現れた。後日、保護専門家の参加もえて、「西域のモナリザ」などの保護を実施した。NHK「新シルクロード展」などへも出陳した。



「屈鉄線」で描かれた「西域のモナリザ」

ニヤ調査をふくめて沙漠での大規模調査は困難を極める。約60人が3週間に必要とする水5トンはじめ大量の食料・調査器材などを運び込まねばならない。気候的に調査に適した10～11月でも一日の温度差は約40度。多領域での総合調査のため多数の研究機関の参加が必要、その調整も大変。中国政府の許可取得、各種調整。大金が必要…。文科省助成をえて、佛教大・龍谷大・京都造形芸術大・京都大・早稲田大・科学技術庁・京都市埋蔵文化財研究所・六甲山麓遺跡調査会・奈良大学・岡墨光堂・国家文物局・新疆文物局・新疆文物考古研究所・北京大・国家博物館などの専門家に参加したいただき感謝している。

6,500余人に授与した新疆大学奨学金・新疆文化文物優秀賞・シルクロード児童育英金、各種寄付・希望小学校建設・代表団派遣と招聘・各種仲介・歴史档案史料出版・国際協力の意義なども記載　　※拙ブログ「国献男子ほんわか日記」で連載中。検索くださいませ。

こじまやすたか：1942年生。佛教大学卒。浄土宗僧侶。ツルカメコーポレーション社長・佛教大学客員教授を歴任。現在は佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構代表や新疆ウイグル自治区政府文化顧問などを務めている。編著『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』『日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査報告書』『念仏の道ヨチヨチと』『ニヤ遺跡の謎』など。

武吉次朗氏を偲ぶ

凌　星光

武吉次朗氏が去る4月11日逝去された。訃報に接し私はとっさに、彼から「凌さんの元気が羨ましい」と云われた際の彼の姿が脳裏に浮かんだ。氏はここ数年、体調を崩していたようで、日中関係研究会へは殆ど顔を出さなくなっていたから、多分、2年程前のことではなかったかと思う。

武吉氏は1932年生まれで、私より半年年長である。青少年時代を中国で過ごし、26歳の時、帰国された。私は日本生まれの日本育ちで、20 歳で祖国へ帰り、定年退職後に日本に戻った。日中両国の架け橋になるという点では、お互いに同じ運命にあったと言える。

氏が長年勤めていた日本国際貿易促進協会は1954年に設立され、日中経済交流に貢献してきた。私は中国において、改革開放前の1970年代後半から当促進協会の平井博二氏との交流が始まり、改革開放後、関係は更に深まり、武吉次朗、西忠雄、岡崎雄児諸氏との連絡も蜜になった。当促進協会北京事務所からは、一週間遅れの『日本経済新聞』他日本の刊行物を譲り受け、私の日本経済研究に資した。

私が武吉氏と特に親しくなったのは1991年頃だと記憶している。丁度1990年4月から私が金沢大学教授を勤めていた頃で、武吉氏も1990年から摂南大学教授を勤めることになり、金沢大学の私の研究室まで足を運ばれたのである。お互いにそれぞれの経歴を語り合い、大学教育を通じて、如何にして学生達を日中友好の方向に導いていくかを話し合った。国家主席になる前の江沢民と日本のリーダーとの通訳を行った経験談も思い出深い。

私も武吉氏も2003年3月、70歳で同時に大学を定年退職している。この年、私と谷口誠氏が日中関係研究所を創設した際、武吉氏にもメンバーの一人になって頂いた。今でも印象深いのは、彼の中国問題に於ける実直且つ謙虚な姿勢である。彼に主要テーマでの報告をお願いすると、“その問題については疎いので報告できない”とはっきり断られることがあったが、時にはご自分から進んでテーマを設定し報告をしたいと申し込んで来られることもあった。氏の報告は豊富な資料に基づいているばかりでなく、中国への深い愛情が込められていた。一方で、中国の良き伝統が崩れ去っていく拝金主義的傾向には、厳しい批判の目を向けておられた。

今でも私が大変感服し、感謝していることがある。中国への訪問団を組織した際、氏が進んで通訳兼案内役を買って出て下さったことである。通訳は私の他、武吉氏にもお願いすると、喜んで引き受けてくれた。そればかりでなく、「私は昔の職業柄、慣れているから」と言って、ホテルの部屋割りや出発の際の注意事項など皆の面倒を自ら進んで見てくれたのだ。武吉氏の中国語通訳は「日本一」であるにもかかわらず、決して驕ることなく、皆のために尽くしてくれたことからは、氏の「人民に奉仕する」精神が感じ取られた。

2018年、NHKのBS放送が、「中国改革開放を支えた日本人」と題するドキュメントを作成した。2019年2月にテレビ放映されるや、日本全国に大きなインパクトをもたらした。私もこの作成には少々協力したが、武吉氏は重要な生き証人として核心的役割を果たされた。ドキュメントは、氏の次の言葉で閉じられている。「中国がもっと発展してほしい。けれど

も世界から祝福され尊敬されるような国になってほしい。」今となっては、これは武吉氏の遺言であるかのように思える。

武吉先生、日中関係は必ずや新黄金時代を迎える日がやって来るでしょう、安らかにお眠りください！

（りょう・せいこう：日中科学技術文化センター顧問、福井県立大学名誉教授。1933 年、東京で生まれる。一橋大学中退後、中国へ。中国社会科学院世界経済政治研究所に所属。改革開放時代から日本を舞台に執筆講演活動を行う。著書『中国の前途』（サイマル出版会）他多数。

武吉次朗さんと方正友好交流の会

大類　善啓

武吉さんが亡くなったと、ご夫人と二人の娘さんからの連名でメールをいただき、また一人、冷戦時代の日中関係をよく知る人が消えていくのだと思った。

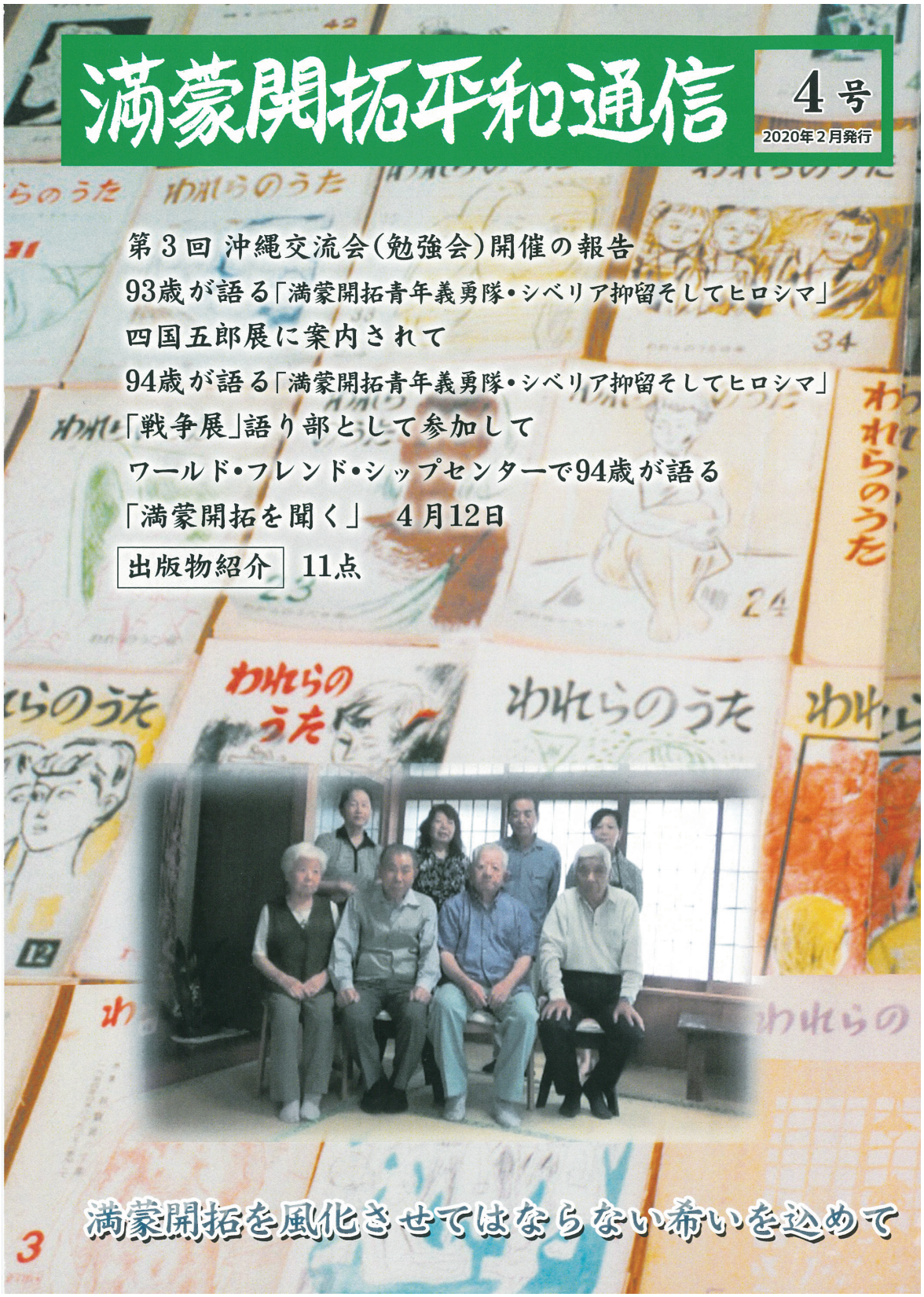
武吉さんには、2006 年の方正友好交流の総会後の記念講演会で、日本の敗戦後、中国に残留した経験、いわゆる留用体験、そして新中国建国までの貴重な話をしてほしいと依頼の電話を入れたら、予想もしない辞退の言葉だった。理由は自分の自慢話になってしまうからだと言う。自慢話になっても、今、武吉さんが話さなかったら誰が話せるんですか、と説得して承諾してもらった。

武吉さんと知り合ったのは、凌星光さんが主宰する日中関係研究所の例会だった。今から 15 年ほど前になるころだろうか。例会後の二次会で、武吉さんが話す周恩来総理の記憶力の良さなど、氏自身が直接体験したことを断片的に少しは聞いていたが、方正の会での講演は実に充実した内容に満ちたものだった。

この３月に刊行された『証言 戦後関係秘史』（天児慧・高原明生・菱田雅晴編、岩波書店）には、日中関係研究所の仲間でもある服部健治（日中協会理事長）さんが聞き手になって、＜日中貿易推進の歴史の証人＞というタイトルで、武吉さんが日中貿易に携わるようになってからの証言が記されている。この記録と方正の会での講演とを合わせると、武吉さんの日中交流史がほぼ尽くされるのではないかと思っている。ちなみにこの本には方正の会で講演をしていただいた藤野文晤（元伊藤忠商事常務取締役）さんも証言され、また日中関係研究所のお仲間でもある加藤千洋さんが聞き手になって、佐藤純子（元日中文化交流協会事務局長）さん、南村志郎（元西園寺公一秘書役）さんなど、戦後の日中関係に深く携わっていた人々の証言が記されている。

（おおるい・よしひろ：本会理事長。著書『ある華僑の戦後日中関係史―日中交流のはざまに生きた韓慶愈』（明石書店刊）、共著に『風雪に耐えた日本人公墓―ハルビン市方正県物語』（東洋医学舎刊）、『満蒙の新しい地平線―衛藤瀋吉先生追悼号』（満蒙研究プロジェクト編集委員会編）など）

この４号をほしい方は、末広一郎さんにご連絡ください。〒739-0323 広島市安芸区中野東２丁目 20－13　電話 082-893-1185 または 082-962－5741　一冊千円です。



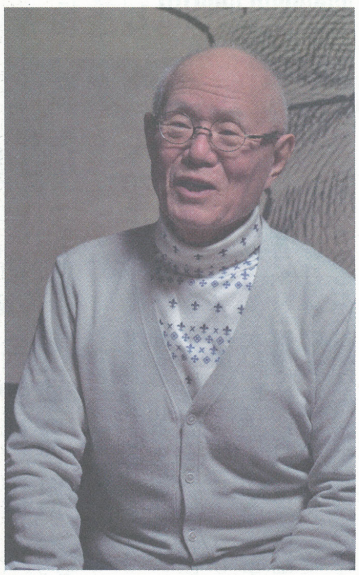
（公社）日中友好協会発行「日本と中国」（20020年1月1日）より転載
右頁（63頁）から読んで左頁（62頁）に移ってください。

しだった市場の人の態度が変わり、中国人が日本の兵隊を侮蔑するようになったのを感じた。

そして8月15日。玉音放送で敗戦したことを知り愕然とした日の晩、塀の外は爆竹音や人々の歓声、叫声、笑い声などでものすごい騒ぎだった。人々は塀を乗り越えて、社宅のガラスを割り、ドアを蹴破って侵入し、暴動が起こった。今までの日本に対する怒りが爆発したかのようだった。

「父に中国人の友達がたくさんいたからなのか、不思議なことにうちだけは襲われなかった。母はタンスや本棚でドアをすべて塞ぎ、長男の私は4歳と2歳と1歳の弟たちを押入れに隠し、その前に立って必死に彼らを守っていました」

社宅を出て引き揚げ船に乗るまでの1年間は、住居なく大陸あちこちをさまよい歩くことに。暴動はいつ起きるか分からないので、常に団体行動をした。お腹が空いて寒くて辛かったが、「不思議と怖くはなかったんです。親がそばにいて絶対守ってくれると信じていたから。でも今、私も親になってわかりましたが、小さな子どもたちを連れ、あてのない避難・逃亡生活を続けて…親はどんなに心細かったろうと思います。あの頃、親が何かを食べているところを見た記憶がありません」



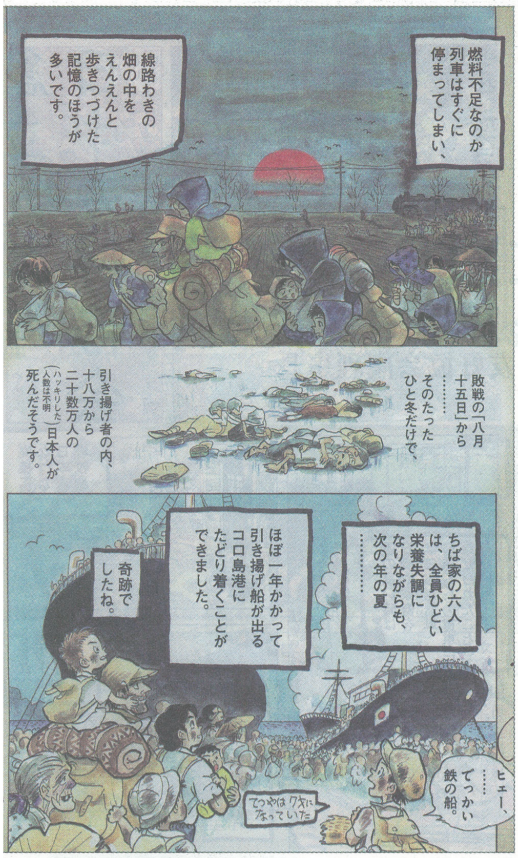
作品に生きた引き揚げの体験

引き揚げてくる途中の中国の荒れ地…。喉が乾くあまり水たまりの汚れた水をすくって飲んでしまったことも。実は『あしたのジョー』に登場する金竜飛という韓国選手の話は、当時の経験をもとに描いた。

「金選手は、朝鮮戦争の時、自分のために食べ物を運んできてくれた父親を、自分を襲ってきた敵と間違えて殺してしまうんです。減量で苦しむジョーを見た金選手は『俺はもっとすごい地獄を知っている』と。ジョーがこの選手には敵わないと感じる話です。また、ジョーが減量で苦しんでいる時、いつのまにか描き手である私も減量して苦しんでいるんですね。空腹なのに私も食べられなくなるんです」。少しリアルに描きすぎたのではないかと語るが、役に息を吹き込み、生身を感じさせるキャラクターを数多く生み出してきた。

避難中、見知らぬ場所で仲間とはぐれもうダメだと思った時、父が親しくしていた会社の同僚・除氏と奇跡の再会を果たす。仲間と合流するまで、一歩も外に出ないことを条件に屋根裏にかくまってもらうことになった。

「薄暗くて狭い屋根裏での日々は遊びたい盛りの子供には苦痛でした。私は退屈する3人の弟を楽しませるために絵本をつくり、続きを心待ちにする彼らのためにせっせと新作づくりに取り組んだ。これが漫画家としての原点となった気がします」



『ひねもすのたり日記』第1集「第21回 コロ島への長い道のり」より

戦争ではみんなが犠牲者に

敗戦から約1年経った夏、コロ島にたどり着き、ようやく引き揚げ船に乗り込んだ。船を見たのは初めて。

「海に鉄の塊が浮かんで、そこに大勢の人が乗って、沈まないのか？と不安でした。生まれたばかりの時にもこの船で満州に来ているんですけどね」。船が岸壁を離れた時に初めてみんなホッとしたようだった。

「地獄の旅でしたが、日本では東京大空襲で一晩のうちに10万人が焼かれ、眼の前で自分の家族が死んでいくのを見た子供たちもたくさんいました。広島と長崎では原爆が落とされ、戦地では水木しげるさんのように片腕をなくして泳いで逃げた人もいた。それに比べたら、私の1年間は親と一緒にハイキングをしてたようなものです。辛かったのは中国人も同じ。だからよくこんなにたくさんの日本人を無事に送り返してくれたなと思います」

赤塚不二夫、森田拳次、北見けんいち、古谷三敏…と漫画家に引き揚げ者は多い。1972年の国交回復後、漫画家仲間との満州ツアーではみんなの住んでいた家を訪ね歩いた。夕方に真っ赤に染まった夕日を眺め、少年時代を懐かしく思い、涙が溢れ出した。中国は第二のふるさと、みんなそう感じていた。

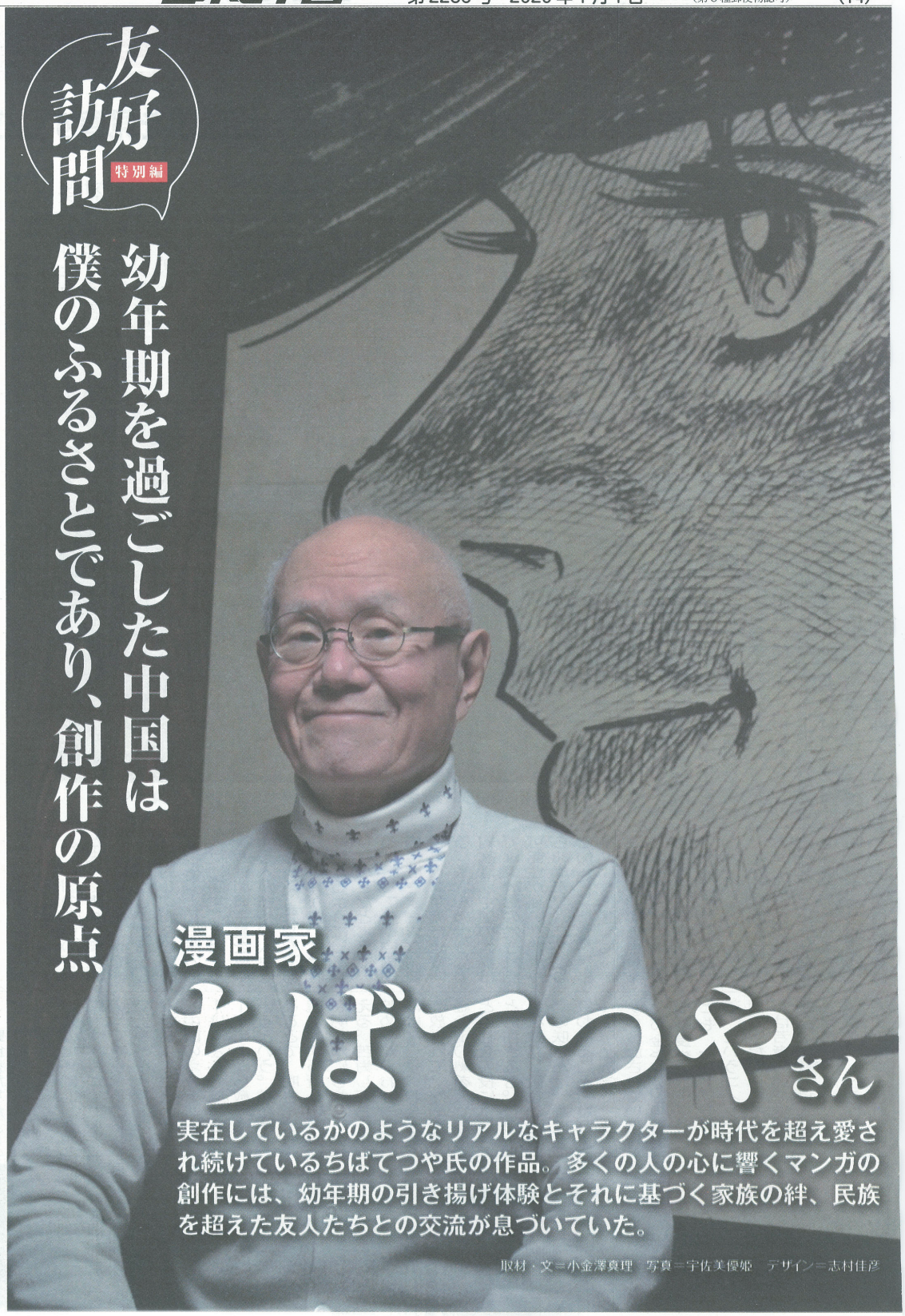
新刊本紹介

『ひねもすのたり日記』第3集 1265円（税込）

自伝的オールカラー・ショートコミック第3集が発売。貸本漫画家としてデビューしたちば少年。少女漫画誌での連載、週刊少年漫画誌の誕生。大きく変わる時代の流れとともに、少年は青年へと成長していく

友好訪問 特別編

幼年期を過ごした中国は僕のふるさとであり、創作の原点



漫画家 ちばてつやさん

実在しているかのようなリアルなキャラクターが時代を超え愛され続けているちばてつや氏の作品。多くの人の心に響くマンガの創作には、幼年期の引き揚げ体験とそれに基づく家族の絆、民族を超えた友人たちとの交流が息づいていた。

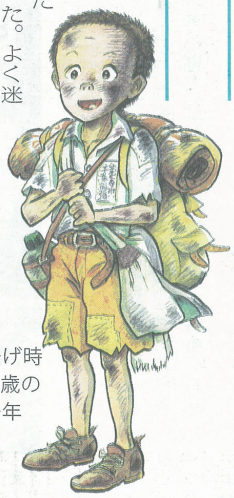
取材・文＝小金澤真理　写真＝宇佐美優姫　デザイン＝志村佳彦

満州・奉天（現・遼寧省瀋陽）の冬は氷点下20度を越える寒さで、幼少期は家で絵本や童話を読んだり、絵を描いて過ごした。敗戦後、父の友人宅の屋根裏に身を寄せた時、弟たちにオリジナルの絵本をつくって読み聞かせたことがマンガ創作の原点となる体験だった―。

満州の記憶、そして終戦へ

東京で生まれてすぐに満州へ渡り、6歳まで奉天で育った。住まいは、父が勤める印刷会社の敷地内にある社宅で、3メートルのレンガ塀に囲まれた中。「市場からおいしそうな匂いが漂ってきて、親の目を盗んで時々抜け出しました。市場の人がおまんじゅうの切れ端を分けてくれたり、外は楽しかった。よく迷子になって怒られましたが」

しかし敗戦が近づき、仲良



引き揚げ時6～7歳のちば少年

プロフィール

1939年東京生まれ。幼少期を旧満州・奉天で過ごす。1956年、単行本作品でプロデビュー。「ハリスの旋風」「あしたのジョー」「のたり松太郎」「おれは鉄兵」「あした天気になあれ」等のヒット作を世に送り出す。講談社児童まんが賞、小学館漫画賞、紫綬褒章、旭日小綬章など受賞。文星芸術大学マンガ専攻教授。日本漫画家協会理事長。「ビックコミック」（小学館）で『ひねもすのたり日記』が好評連載中

前号 29 号に寄稿していただいた藤沼敏子さんの証言集の記事
（東京新聞 2019 年 12 月 22 日付朝刊より転載）

中国残留婦人 貴重な語り

埼玉・川越 元短大講師 藤沼さんが証言集出版

第二次世界大戦の終戦時、旧満州（中国東北部）で生死の境をさまよった中国残留孤児や残留婦人。これまで帰国者ら二百人近くのインタビューを続けてきた埼玉県川越市の元短大講師藤沼敏子さん(六七)が、証言集を出版した。本人たちの語りを、ほぼそのまま記し、貴重な口述の歴史資料となっている。（中里宏）

「不条理を生き貫いて」

残留婦人は、終戦時に十三歳以上だったという理由で、「自分の意思で残った」と国からみなされ、五十年近く帰国支援がなされなかった。多くは国の移民政策である満蒙開拓団の一員として、貧しい農村から家族で満州に渡った。

証言集「不条理を生き貫いて 34人の中国残留婦人たち」（津成書院、税込み二千七百五十円）によると、終戦直前、国は開拓団から男性を根こそぎ召集し、高齢者と女性、子どもだけが残された。情報も途絶する中でソ連軍が侵攻してきて、逃避行が始まる。中国人の銃撃やソ連機の機銃掃射、集団自決などで多くの犠牲者が出た。食糧のない山中では、老人や乳幼児が次々に亡くなった。歩けなくなったわが子を川に流す母親たちの姿を、複数の残留婦人が語っている。

たどり着いた収容所では飢えと冬の寒さ、感染症による死者が続出。朝起きると、隣に寝ていた肉親が死んでいた。遺体は掘った穴に積み上げられた。ソ連兵が若い女性を暴行目的で連れ去る事件も繰り返された。

収容所で死を待つしかなかった時、貧しさから嫁を迎えられない現地の農家に売られたり、引き取られたりして生き延びてきたのが国に「自由意思」とされた実態だ。現地の言葉で「トンヤンシー」と言われ、農作業や家族の世話をし、十代後半になると、その家の男性と結婚。貧しい農村で必死に生きてきた。

埼玉県国際交流センターの日本語ボランティア講座のコーディネーターとして活動していた藤沼さんは一九九四年ごろ、帰国した残留婦人と親しくなり、インタビューを開始。膨大なビデオ映像を自身のホームページ「アーカイブス中国残留孤児・残留婦人の証言」で公開している。

取材は北海道から沖縄まで全国に及び、中国、台湾にも出かけた。庶民が「どう生き、どう死んだのか後世に伝えたい」との思いから。「満蒙開拓団とは何だったのか」という疑問は今も残る。

続編となる「残留孤児編」と、満蒙開拓青少年義勇軍や元軍人、元従軍看護婦などの「証言集」も執筆中。「若い人にこそ読んでほしい」と話している。オンライン書店「アマゾン」で販売中。

「残留婦人の誰もが『今が一番幸せ』と言うのを聞き、証言を残さなければと思った」と話す藤沼さん＝埼玉県川越市で

証言集「不条理を生き貫いて 34人の中国残留婦人たち」。筆者の主観が入るのを避けるため、本人が語った通りに記述している

「庶民の生と死 伝えたい」

東京新聞（2020年1月11日付）より転載

旧満州の戦争孤児描いた人生

小田原の元小学校教師 増田さんの教え子 本出版

終戦後、旧満州（現・中国東北部）で命を落とした戦争孤児たちの悲惨な記録を書き続けた神奈川県小田原市の元小学校教師、増田昭一さん(九二)の人生を、教え子がまとめた本「大地の伝言」（夢工房刊）＝写真(下)＝が発行された。

（野呂法夫）

増田昭一さん(左)と大野正夫さん＝神奈川県小田原市で（夢工房提供）

増田さんは一九二八(昭和三)年、小田原生まれ。四五年、十七歳のとき陸軍少将の父がいる満州にチャムス医科大学入学のため渡る。しかし終戦直前の八月九日、ソ連軍が侵攻し、戦場に身を投じるが生き延びて、新京(現・長春市)の難民収容所に収容された。

そこで開拓団の孤児たちと一緒に暮らし、飢えと極寒で次々と亡くなる最期の姿を目の当たりにした。

増田さんは引き揚げ後、小田原の酒匂小で教職の道へ。退職した後、収容所での孤児らの極限の様子や望郷の思いなどを「満州の星くずと散った子供たちの遺書」「約束」など六冊の本や絵本にまとめた。

戦争孤児の悲劇は二〇一四年八月、TBSの終戦六十九年特別企画ドラマとして放送された。原作者は「酒匂小二年一組の恩師」と同級生に知らされ、ドラマを見て感動したのが、高知大名誉教授(海洋生物学)の大野正夫さん(七九)＝高知県土佐市在住＝だ。

その後、親しい同級生三人と増田さん宅を訪問し、六十年ぶりに再会。さらに当時の思い出などを集めた同窓会記念誌を発行した。

大野さん自身も引き揚げ者だ。父は南満州鉄道に勤め、錦州市で生まれ、五歳になる前に終戦を迎えた。一年後に帰国できたが、果たせなかった同世代の孤児たちの苦難に思いを寄せ、増田さんから生い立ちや平和への思いを聞き書きして一冊の本にまとめた。

大野さんは「満州の大地の土となった戦争孤児たちの叫びを、終生想う恩師の人生を描いた。二度とあってはならない戦争の悲惨さを、戦争を知らない世代の方々に知ってほしい」と話す。税別千六百円。問い合わせは、夢工房＝電〇四六三(82)7652＝へ。

東京新聞（20020年３月３日付）より転載
右頁（67頁）から読んで左頁（66頁）に移ってください。

米軍は緻密 焼夷弾32万発 10万人犠牲に

「逃げるな、火消せ」惨劇招く

実際の空襲はどうだったのか。一九四五年三月十日未明の東京大空襲ではB29爆撃機など約三百機が飛来。「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議」の工藤洋三事務局長が米軍の報告書を調べた結果、東京には一千五百トン、三十二万七千発の焼夷弾が文字通り、雨あられと降り注いだ。

うち三十二万四千発が、日本家屋向けに開発された「M69焼夷弾」。三十八発ずつ束ねた「E46」「E28」という集束弾で投下された。高度千メートル前後で散開し、家の瓦屋根を突き破った所でとどまる設計。約五秒後に破裂し、内部に詰めたゼリー状のガソリンが数十メートルも飛び散り、壁などに粘り付き出火する。

威力を確認するため、米軍は四三年五月、ソルトレークシティー南西のダグウェイ実験場に、日本の労働者の社宅を想定した木造家屋を再現。座卓や座布団、障子、ふすまに至るまで正確に造り、M69の貫通力を試した。再現実験を繰り返し、大火を引き起こすために必要な爆弾の量を計算。四五年一月三日には名古屋、二月四日に神戸、同二十五日に東京を空襲し、どこまで燃え広がれば消火不能となるか確かめた。工藤氏は「米軍は非常に緻密に考えていた」と話す。

東京大空襲の損害評価のため、1945年３月11日に米軍が撮影した写真。広大な区域が焼失していた＝米国立公文書館所蔵、工藤洋三氏提供

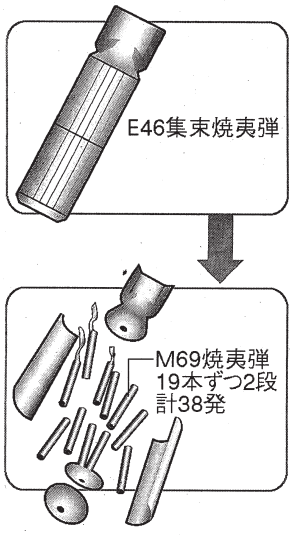
これに対し、日本政府が「時局防空必携」で指定した、家庭に備える防空「七つ道具」は①水②砂③火勢を抑えるむしろ④バケツ⑤竹の棒の先端に荒縄を巻いた「火たたき」⑥トビロ⑦水びしゃく―。「物不足で簡単に集まらない。余分なバケツなんてなかった」と、東京大空襲・戦災資料センター元館長の早乙女勝元氏（八七）が振り返る。

四二年以降は防空・防火訓練が盛んに。「銃後を守る主婦らが、一軒に一人は必ず訓練に参加するよう言われた。出ないと配給を止めると言われた家庭も少なくない」。だが、焼夷弾の火をバケツリレーの水や砂をかけて消し、天井の炎は火たたきで振り払う「原始的」な内容だった。

当時、早乙女氏は十二歳。「三月十日以前の空襲は小規模で、この程度ならなんとかなると、子ども心に思っていた。十日のは違っていた。まったく歯が立たない。一発目でまごまごしている間に次々破裂する。一軒に六、七発落ちたのでは。三十八発が束になって落ちてきたんだから」

こうした事態は十二年も前から予想されていた。信濃毎日新聞主筆だった桐生悠々の三三年の論説「関東防空大演習を嗤ふ」。敵機が都市に侵入した時点で終わりと警告していた。だが、政府は三七年に「防空法」を施行。四一年の改正で「逃げるな、火を消せ」と強制して違反者に懲役や罰金を科し、「隣組」で互いに監視させた。

水島朝穂・早稲田大教授（憲法学）は「日本の科学者は焼夷弾の火を消すのは不可能と知っていた。それでも消させようとしたのは、戦争遂行の意識づけでしかない。避難を優先させていれば、十万人も死なくて済んだ」と指摘する。



米軍が使用した集束焼夷弾の仕組み
＝「図説 東京大空襲」を基に作成

戦意を高揚 軍需生産低下避ける

国民に逃げられない体制を強制した理由について、臨戦態勢を求めることで戦意を高揚させるほか、日本軍が弱いから空襲を受けるのだという厭戦意識を抑え、人口流出で軍需生産力が低下するのを避ける狙いもあったと分析。精神論頼みの統制は「過去の問題ではない」とも話す。

「新型コロナウイルスへの政府の対応は、焼夷弾への備えと似て、目的と手段が整合していない。政権維持を図り、目立つ政策を小出しにするのは、日本軍が壊滅したガダルカナル島での『戦力の逐次投入』を想起させる。政府が国民を守らないところには、共通した構造的な問題がある」

デスクメモ

核、生物、化学兵器と違い、油や鉄でできた焼夷弾の火は簡単に消せた―。七十五年を経て、そんな「誤解」が広がっていないか。古くさい兵器も、人間が突き詰めれば想像を絶する死者を出す。犠牲者から見れば、どんな手段でも命を奪われたことは同じだ。実相を語り継がねば。（本）

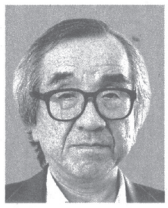
2020・3・3

東京大空襲75年 ずさん「防空実験」の実相

一夜で約10万人が亡くなった米軍の「東京大空襲」から10日で75年。原爆にも匹敵する犠牲者を出した理由の一つに、無差別爆撃を甘く見た日本側の対応がある。典型例が、軍などが全国各地で焼夷弾の消火方法を実演した「防空実験」のずさんさだ。合理性を軽視し精神論でごまかす体質によって、銃後の老人や女性、子どもが亡くなった。民衆の命は、どのように軽んじられたのか。

（石井紀代美、大野孝志）

「お上」が「不可能」を強制



青木哲夫氏

「大掛かりな実験の割に準備が雑。民衆へのデモンストレーション的な意味合いもあっただろうが、ずさんな印象だ」

戦前や戦中の防空実験の特徴を尋ねた「こちら特報部」に対し、「東京大空襲・戦災資料センター」の青木哲夫主任研究員は真剣な表情で強調した。太平洋戦争開戦前後の実験について、当時の学会誌や関係団体の機関誌、新聞などを分析している。

青木氏がまず挙げるのが、一九四〇年八月に東京市浅草区（現東京都台東区）の公園で警視庁などが実施した実験だ。防火改修した家と普通の家を燃やして比較。普通の家は点火後間もなく炎に包まれたが、改修を施した家は「完全に延焼を免れた」（専門誌「都市公論」）と強調された。

だが、会場では官僚などの招待者五千人、一般の観客数万人が見物していた。本紙の前身「国民新聞」も「素晴らしい好成績を示し数万の観衆に木造家屋に防火設備をすることの緊喫事であることを認識させた」と報じており、外向けの目的をうかがわせる。

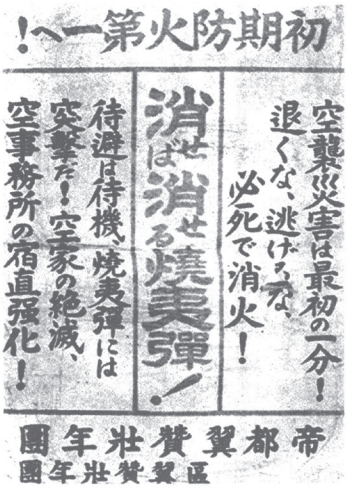
四一年十月に兵庫県鳴尾村（現西宮市）で行われた実験では、焼夷弾で建物を燃やし、実際に民衆が消火できるか確認した。専門誌「建築と社会」は「見る見る間に燃え広がりわずか十秒にて炎と煙は屋内に充満」したが、結論は「燃えてから消すことを考えるより燃えない建物を…」となったことを伝えている。青木氏は「すでに分かりきっている課題なのに進展がみられない」と指摘する。

この種の実験は四一年十二月の日米開戦後も東京・世田谷区や滋賀県などで行われた。だが、薬品を木材に注入したりモルタルを壁に塗ったりして燃えにくくする既存の防火改修やポンプなどの充実、民衆の訓練の重要性を指摘するばかり。四二年四月には東京、川崎などが本土初空襲を受けたが、新たな対策が打ち出された様子もないという。

代わりに前面に押し出されたのが精神論。「必勝の信念」をみんなが持って一致団結すれば、どんな焼夷弾火災でも消し止められるというものだ。青木氏は「『必勝の信念』の強調は最後の最後まで続いた。民衆の命が軽んじられていた」と現実を直視しない指導者の姿勢を挙げる。

そのうえで、「甲賀忍法帖」などで知られる作家の山田風太郎が四三年五月に鎌倉で見かけた防空実験について書いた日記にも注目する。準備万端の防火隊が一軒のバラック小屋にさえ消火にてこずる様子に、山田は「深夜全市に数百の焼夷弾がばらまかれたらその惨状果たして如何に」と不安をつづっていた。

青木氏は「当時、同じように感じていた人もいたと思うが、口にできる社会ではなかった。そんなことを言えば、『不安を感じるのは必勝の信念が足りないからだ』と批判されたでしょう」と表情を曇らせた。



空襲災害に立ち向かえと訴えるポスター＝早乙女勝元著「図説　東京大空襲」から

◀ 兵庫県鳴尾村（現西宮市）の競馬場で行われた防空実験＝「建築と社会」1942年２月号から

現実直視せず 精神論に終始

毎日新聞（2020年2月27日付）より転載
（エスペラントで福島の状況などを発信する堀泰雄さんからの提供）

新 20世紀遺跡 71

水戸市

満蒙開拓青少年義勇軍訓練所跡 上

国策として移民推進

今月中旬、水戸市にある農業栄養専門学校・鯉淵学園を訪ねた。青空の下、黒い農地が広がる。「このあたりは『霜の通り道』と言われています。水戸の中心部より寒いんですよ。例年ならばまだ作物があるのですが」と、職員の石塚仁さん(64)が笑った。暖冬のため、作物の育ちが早く収穫は終わっていたのだ。広大な敷地内には「タヌキ、キツネもいますよ」。のどかな現在の風景から想像するのは難しいが、ここは75年前の敗戦まで、大日本帝国の国策基地の一つであった。

現代の日本は人口減が進んでいる。しかし昭和初期は違った。毎年100万人前後、人口が増えた。当時の主要産業は農業だった。ただ、増え続ける働き手を吸収するだけの耕地がなかった。さらに不況もあって社会全体に困窮、失業が広がっていた。大日本帝国の為政者は、満州国、現在の中国東北部を侵略してつくった植民地をその受け皿に選んだ。

1936年、広田弘毅内閣は20年間で100万戸、500万人を入植させる計画を立てた。ただ、植民地とはいえ海外である。政府の思惑ほど移住者は増えなかった。そこで、従来は成人が対象だったが、青少年が注目された。37年、東京帝国大学で農業を学び「満州移住協会」理事を務めていた加藤完治らが政府に建白書を提出した。

「満州開拓は急務であり一層推進する必要がある。この際青少年で義勇軍を編成し、現地の開拓や交通の確保、有事の際の後方兵站の万全を図ることなどは重要である」（『内原町史』通史編）。建白書の内容を、政府はすぐに採用。「満蒙開拓青少年義勇軍」が創設された。

日本からすれば「開拓」だが、先祖代々現地に暮らしていた人からみれば侵略である。紛争が絶えなかった。また満州国は、帝国陸軍が長年仮想敵国としていたソ連と接していた。青少年が「義勇軍」でなければならなかったのはそのためであり、「有事」にはくわを手放し銃を取って闘うことが期待されていた。

満州に義勇軍を送り出すための、全国唯一の訓練所が茨城県下中妻村内原（現水戸市内原町）につくられた。所長は加藤が務めた。ここから敗戦まで9万人近くが満州に渡った。さらに現在の鯉淵学園には、開拓団の幹部や指導員の養成所が置かれ、加藤が所長を兼任した。学園入り口には「満蒙開拓幹部訓練所跡」などと彫られた碑が建ち、当時

鯉淵学園（水戸市）に建つ碑。「満蒙開拓幹部訓練所跡」などと刻まれている＝同市で

加藤完治の色紙（手前）について語る西村典夫・鯉淵学園名誉教授＝水戸市で

の養成を目的とした、新しい時代に即応する教育機関」である「全国農業会高等農事講習所」に生まれ変わった（『鯉淵学園五十年史』）。同学園の西村典夫名誉教授(91)は同所で学んだ。加藤とは戦後に交流があった。加藤は公職追放を経て、戦前に初代校長を務めた日本高等国民学校（現日本農業実践学園＝水戸市）に戻っていた。

この養成所は敗戦で閉鎖されたが、「日本農業再建のための優れた農業指導員

敗戦時、満州には150万人もの日本人がいた。日ソ中立条約を破って侵攻したソ連による攻撃、引き揚げ中の混乱などでおよそ18万人が死んだ。生き残った人も人生をめちゃくちゃにされた。「義勇軍」の人たちも含まれている。国策としての移民を推進した者たち、たとえば加藤にも責任がなかったとは言いがたいだろう。

ただ、敗戦の前のみならず戦後も慕う人は多かった。西村さんはその一人。「私は若造でしたが、よく議論しました」。55年ごろのこと。加藤から「うかがいたいことがある」と招かれ、ある農業のことを聞かれた。ドイツで研究製造されたそれは無類の殺虫力があり、日本でも広まっていた。西村さんは「人畜に対して強烈な毒性があります。使用にあたっては綿密周到な注意が必要です」と話した。

後、加藤は学校でその農薬を使うことを禁じた。納得しない教員もいたが「学校の水田から一粒の米もとれなくなったとしても使わせるわけにはいかない。若い生徒にもしものことがあったら、どうするのか」と譲らなかったという。西村さんは「遠くから見ると偏った人。近くにいたら離れがたい人でした」と話す。若者教育と日本農業の発展に力を入れた加藤を慕う証言は、他にも膨大に残る。

影響力のある善意の人の行動がまちがった国策と結びつくと、大きな悲劇を生むという例だろうか。私はそう考えながら、かつてインタビューした男性を思い出していた。内原の訓練所から満州に渡り、敗戦後シベリアに抑留された人だ。

【栗原俊雄、写真も】

新 20世紀遺跡 72

水戸市

満蒙開拓青少年義勇軍訓練所跡 下

描き続けた2万4000の無念

「満蒙開拓青少年義勇軍」の内原訓練所跡（水戸市内原町）近くには「渡満道路」という桜並木がある。訓練所を巣立つ若者たちが植民地・旧満州（現中国東北部）に渡るべく、最寄りの内原駅に向かうため歩いた道だ。陽光の下、記者がここをたどりながら思い出したのは、画家・宮崎静夫さん（1927～2015年）のことだった。

熊本県小国町の農家に生まれた。下城国民学校高等科では級長を務めた。そのころ国策として旧満州への移民が進められていた。

41年秋。クラスの担任教師が、生徒たちに義勇軍への参加を勧めるようになった。「先生はクラス全員に呼びかけているのですが、自分を見つめている気がしました」。宮崎さんは生前、記者のインタビューにそう話した。「五族協和」「王道楽土」という満州建国のスローガンを信じてもいた。

■　■

翌42年3月、学校の卒業式を待たずに内原訓練所に入所した。15歳。結局、学校からは唯一の参加だった。卒業証書とは別に「表彰状」が贈られた。教育は行政の一部である。為政者が国策を間違えると、学校も教師も間違えることにつながる。義勇軍はその一例だ。

このころ、義勇軍の訓練は内地でおおむね3カ月。移民先の満州では「満蒙開拓義勇軍」として3年近くの訓練を積んで定住し、村づくりに入ることになっていた（『満州開拓と青少年義勇軍　創設と訓練』内原訓練所史跡保存会事務局編・98年）。内原訓練所には各地から若者が集まり、およそ4キロ離れた河和田分所で宮崎さんは訓練を受けた。農作業を基本として軍事教練もあった。また、定住地として想定されていたのは「大半が北満中心で、人里遠く離れた無人の広野であった」（同書）ため、さまざまな技術を身につける必要があった。木工や鍛工、裁縫、農産加工や製炭、灸療（きゅうりょう）などもあった。

訓練を受けるのは育ち盛り、遊び盛りの子どもたちだ。つらさに耐えかねたのか「脱走を繰り返して、いなくなった者もいました」。宮崎さんも苦手な肉料理とシラミに悩まされた。

42年6月、満州東北部の海倫県に入った。冬の想像を絶する寒さと粗食で、少年たちの心はすさみ、「おりの中の野犬がかみ合うようでした。1杯のぜんざいを盗んで食べただけで、殴り殺された仲間もいました」。その少年は15歳で、「ほんとうに子どもだった」。現地の人々の強烈な抗日意識を知ったのも衝撃だった。

■　■

宮崎さんは45年春、17歳で兵役を志願し現地で陸軍に入った。3カ月後に敗戦。ソ連によりシベリアに抑留された。仲間が次々と倒れる中、重労働と飢え、極寒の三重苦に耐えた。だが49年2月。ソ連の政治部将校から呼び出されて「ファシストの先兵である義勇軍の一員だった」などと責められた。さらにつらかったのは、それまで仲間だった者から「裏切り者！」と指弾されたことだった。同年秋に帰国。画家となり、死んでいった人たちの鎮魂が大きなテーマになった。

水戸市内原郷土史義勇軍資料館（同市内原町）は、訓練所や満州での生活などを今に伝える。訓練所からは8万6530人もの若者が海を渡り、およそ2万4000人が帰らなかった。生きていれば、それぞれの分野で活躍していただろう。資料を見ながら、国策に翻弄（ほんろう）されて亡くなった若者たちのことを思った。

【栗原俊雄、写真も】

▲内原訓練所跡近くに残る「渡満道路」＝水戸市で▶画家の宮崎静夫さん。「死者のために」シリーズで、亡くなった満蒙開拓青少年義勇軍の仲間や、抑留で倒れた人たちをモチーフにした。後ろは同シリーズの「友よ」＝東京都千代田区で2013年3月20日

竹内良男さん（連絡先：qq2g2vdd@vanilla.ocn.ne.jp）
が発信する≪ヒロシマへ　ヒロシマから≫よりの転載

<ヒロシマへ ヒロシマから> 通信 No. 264　2020/5/19 (火)

東京　☆　2020年（令和2年）5月10日（日）毎　日　新　聞

元復員兵の心の傷 語ろう

戦後75年

第二次大戦の元復員兵が負った心の傷について、遺族として伝える活動をしている武蔵村山市中藤3の黒井秋夫さん(71)が10日、自宅前に体験を語り合う「交流館」を開設する。「ごく普通に平和を話せる場にしたい」と話している。【青島顕】

「交流館」で父慶次郎さんの20歳のころの写真を手にする黒井秋夫さん＝武蔵村山市で

父の慶次郎さん（1912年生まれ）は大柄で顔立ちの整った人だった。2回召集されて計6年間、旧満州（中国東北部）や中国の湖北省などに送られ、46年に出身地の山形県鶴岡市に復員した。

2年後、黒井さんは次男として生まれた。記憶では、慶次郎さんはダムや道路の工事現場で働いたが、定職はなく貧乏だった。親子の会話はほとんどなく、進学相談もしなかった。大学は奨学金をもらって通ったという。

黒井さんは新潟県で就職後、両親を呼び寄せた。慶次郎さんは外出せず、テレビを見て過ごし、口を利かなかった。「何を考えているか分からなかった」。戦争のことも語らず、89年に亡くなった。

父への見方が変わったきっかけは、2015年末の「ピースボート」への乗船だ。戦場から帰還した米兵が心的外傷後ストレス障害（PTSD）の症状を語るDVDを見た。慶次郎さんの姿と重なり、中国戦線で心に傷を受けたのではないかと思えてならず、戦争によるPTSDを調べた。「一番身近にいながら、親父のことを理解してあげられなかった」と自責の念にかられ、涙がこぼれた。

父亡くした黒井さん　自宅前に交流館

自宅近くの公民館で遺族として戦争後遺症を語り合う場を5回開き、歴史研究者らに講演してもらった。

前立腺がんを患い、未来に向けて記憶を継承し、語り合う場を作ることを決意した。蓄えをはたいて、自宅前に交流館を建てた。木造平屋の約10平方㍍。慶次郎さんの足跡や戦争関連の書籍やDVD、新聞記事などを展示する。

新型コロナの感染拡大で、開館祝いは取りやめたが、月曜と金曜を除く日中に開放する。「同じような体験をした人と交流したい。近所の人にもお茶を飲みに来てもらいたい」と話す。問い合わせは黒井さん（080・1121・3888）。

方正日本人公墓が私たちに問いかけるものとは・・・

―「方正友好交流の会」へのお誘い―

1945 年の夏、ソ連参戦に続く日本の敗戦は、旧満洲の「開拓団」の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒のなか、飢えと疫病によって多くの人たちがハルピン市郊外の方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人の松田ちゑさんは方正県政府に、「自分たちで埋葬したいので許可してください」とお願いしました。その願いは方正県政府から黒竜江省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、「方正地区日本人公墓」が建立されました。

1963 年、まだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない時期、中国政府は、中国人民同様わが同胞も日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ 5000 人近い人たちが祀られているこの公墓の存在は、未だ多くの人たちに知られておりません。

私たちは、民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって維持管理されている公墓の存在を、多くの人たちに知ってほしい、そして旧満洲における日本国家と日本人の中国への加害と被害を多くの人たち伝えていこう、国家や民族を超えた民衆レベルでの友愛精神を広めていこうと「方正友好交流の会」を設立しました。ぜひ皆さま方のご支援ご協力をいただきたいとお願いする次第です。どうぞよろしくお願いいたします。

個人会費　一口　1,000 円　団体・法人会費　一口　10,000 円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101-0052　東京都千代田区神田小川町 3-6　日中科学技術文化センター内

電話　03-3295-0411　FAX　03-3295-0400　Email:ohrui@jcst.pr.jp

郵送振込口座番号　00130―5－426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス　http:/www.houmasa.com/

＜報告〉　　ありがとうございました！

前号の 29 号入稿後、主に振替受入通知表 2019 年 12 月 4 日付以降にご送付いただいた会費及びカンパされた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。（敬称略、受け取った順に記載しました。2020 年 3 月末までの分です）

今井和江　貞平浩　高木雅之　榎戸吉定　上西隆全　中川信幸　野田尚道　光川澄子　広田彰夫　平沢千恵子　中島幼八　長谷川清司　柳生じゅん子　小出公司　篠田欽次　中井詔太郎　篠原淳子　小柴玲子　渡部通恵　渡辺一枝　佐藤すみ江　皆川純麿　團野廣一　藤原作弥　木戸冨美江　秋吉任子　丸山竹嘉　山田寿子　芹澤昇雄　黒木皆夫　三原容子　高橋守男　石橋辰巳　阿久津国秀　NPO 法人やまなみ　塚原常司　大島満吉　石井敏夫　奥村信子　橋本聰　十時哲哉　滝永登　松村静子　中野圭子　中村静枝　鵜沢弘　佐藤守男　上野千鶴子　さいたま市大宮日中友好協会事務局　矢吹晋　江藤昌美　田中正昭　水野恵子　阿石定子　早川浩市　百瀬享　小倉光雄　藤後博巳　柴崎葦津子　北原武司　高田京子　本並美徳　須貝佑一　肥後茂樹　藤村光子　阿部則司　柳澤永一　東海林次男　小坂井和夫　田澤仁　藤沼敏子　掛谷敏男　久保和男　毛利悦子　小林浄子　春日井治　村杉正洋　亀山英雄　森博勇　山下美子　林秀行　清島一順　吾孫子隆　西岡秀子　鳥島せい子　原田清治　井出亜夫　河野通咸　宮城恭子　宗重勇　寺本康俊　上条八郎　米山東伸　河村康彦　根田春子　杉田春恵　石川尚志　天竺桂尚穂　北村栄　初岡昌一郎　甲斐国三郎　吉川健　成田晃一　杉山秀子　丹野雅子　田中佐二郎　高橋健男　末広一郎　大里浩秋　大西房子　村田吉隆　阿部節子　堀内博史　窪田かつよ　清水醇　栗原彬　山田敬三　鈴木春夫　高嶋正文　木村護郎クリストフ　柳瀬恒範　藤井正義　﨑山ひろみ　山内るり　山口真　黒岩満喜　伊原忠　伊原泰子　荒川幸二　野崎朋子　松島赫子　近藤耀子　新井竹子　キクチカズヤ　錦織葆　石井妙子　小玉正憲　藤勝徳　新田百合子　堀泰雄　大澤大介　大津弘子　小島康誉　田村正篤　畑修三　望月信隆　南村豊實　坂本茂三郎　櫻庭ゆみ子　小野寺喜一郎　長澤保　師岡武男　白井豊富　吉田敬子　栗林稔　齋藤忠雄　久保田熙　岩間孝夫　岡田実　山口榮一　橋本紀代子　星野信　松田信義　小林彰彦　加藤毅　吉川滉　鈴木幸子　新谷陽子　酒井武史　島隆三郎　中島紀子　宮武正明　古島琴子　小田淑代　金城敬子　矢野一彌　篠原国雄　名取敬和　齋藤實　千秋昌弘　庄田和之　下山田誠子　町田忠昭　川合継美　池永博威　風間成孔　長尾寿　椎名鉄雄　田宮昌子　吉川雄作　森美紀子　トレヴァー・マーフィ　竹内良男　中嶋定和

・・

≪編集後記≫

コロナ感染危機が進行し、「緊急事態宣言」「外出自粛」なる言葉が飛び交い、本会の事務局がある日中科学技術文化センターもテレワークという名の在宅勤務が基本的な体制になった４月５月の状況下で考えると、編集作業はともかく、会報を発送する作業は難しいと判断せざるを得なかった。発送作業にはいつも 10 人近くの仲間が集まってくれるが、このような感染危機状況にある中、集まってほしいとは言えない。ともかく千部近い会報を封筒に

入れ糊をつけてメール便のシートを張る作業は、それぐらいの人数がいないとはかどらない。その発送作業と、６月７日に予定していた総会と講演会は、まず人が集まってくれないだろうと、３月時点で思った。

例年、総会とそれに続く講演会は、事務局に近い中央大学駿河台記念館で行っているが、改装工事のために使えず、一ツ橋の日本教育会館で行うべく６月７日（日）に会場を予約していた。しかしこれは無理というもので、やむを得ず延期せざるを得なくなった。おのずと会報の発行も当初の予定より大幅に遅れるかと思ったが、コロナ危機の収束状況が少しばかり見えてきたので、なんとか６月には発送作業ができそうだということになり、仲間たちが集まってくれ、会員諸氏及び支援者の方々にそれほど大幅に遅れることなくご送付できそうで嬉しい限りである。

なお、総会及び記念イベントは７月２６日（日）午後２時から日本教育会館 707 号室（道案内専用電話 03-3230-2833）で行うことに決定した。今回は旧満洲で 11 歳の時に敗戦を迎えてさまようも、1953 年に日本に帰国された引間正好さんの体験を大類がインタビューしてお聞きする会にした。場所は、千代田区一ツ橋２丁目６－２　地下鉄「神保町」駅のＡ１出口から徒歩３分の所です。ぜひご来場ください。

さて本誌であるが、まず寄稿していただいた方々に改めて感謝を申し上げます。「日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後」シンポジウムは、何度もこの会報に寄港してくれている木村護郎クリストフさんが報告書を送ってくれ、実に充実したシンポジウムだと思った。ドイツからのパネリストの参加業務など大変だったろうと思い、ぜひ開催に至るまでの経緯を書いてほしいと寺沢秀文さんに依頼すると、満蒙開拓平和祈念館の事務局長を務める三沢亜紀さんがずっと携わっていたので適任だと言われ、三沢さんにお願いした。また寺沢さんの今回の原稿を読むと、改めて寺沢さんの開館までこぎつけたエネルギーに頭が下がる思いである。

石川尚志さんとの昨年の出会いは、エスペラントの世界に近年改めて入った成果である。石川さんの原稿で、読者は旧満洲での知られざる側面がおわかりになるのではないか思う。また渡辺一枝さんの原稿は、長年チベットに携わってこられた方だからこそ書けた原稿だと思い、実に読み応えがあった。

その他の方々の原稿もそれぞれ筆者の思いがにじみ出ている文章で、読み応えがあると思う。前にも書いたかもしれないが、ある優れた編集者から「こんなに充実した会報が会費とカンパでできているのは信じられない」とお褒めの言葉をいただいたが、皆さんのご支援ご協力があればこそ発行できるわけで本当に感謝いたします。今後ともよろしくお願いいたします。（大類）

≪表紙写真撮影：寺沢秀文≫

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第 30 号）2020 年 6 月 12 日発行

発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６　日本分譲住宅会館　４Ｆ
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会